
ONE PIECE ~ 紛れ込んだ双子 ~

ペニシリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 〈紛れ込んだ双子〉

【Nコード】

N1864P

【作者名】

ペニシリン

【あらすじ】

別世界から気付いたらワンピースの世界へやって来てしまった超の付く美女美男の双子の兄妹。しかし、2人ともワンピースは名前しか知らず、話の中身は全く分からないので、この世界の人物、出来事、悪魔の実もちんぷんかんぷん……そんな2人はワンピースの世界でどんな生活を送るのか。

いずれ出て来る悪魔の実の中には、原作のルールを壊して仕舞うものがある予定です（数は極々少なくなりますが）

1話 始まり（前書き）

二つ同時の連載（^ー^；）

怖くて手を出せずにいましたが、怯えては何も出来ないなど…
…取り合えずは頑張ります！

主人公の設定が在り来りなのが、馬鹿らしく見えるけどそれが書いてて、想像してて楽しいんだからしょうがない（笑）

1話 始まり

＋＋ある無人島＋＋

「…………おはよう…………アト」

アト「おはよう…………ティア…………」

ティア「…………分かる？」

アト「…………分からないわ…………」

前方には透明な海、後方には動物の鳴き声豊富なジャングル、そして、自分達の今いるこの場所は日差しすらも反射する程に白い海岸が広がっている。

ティア「……………」

アト「……………」

2人がこれほどまでに驚いているのには訳がある。

ティア「……………僕達は家で寝たよね……………」

アト「フカフカのベッドに包まってね……………」

そう、彼等は自宅のベッドの中で寝たのに、いざ目覚めれば海岸にパジャマで寝ていたのだ。勿論ベッドも無くなっており、少し肌寒い。

ティア「まあ、寝てても仕方ないよね、適当に歩いて見ようか」

立ち上がり、適当にパジャマに纏わり付いた砂やら小石やらを軽く払って、アトに手を差し出す。

アト「そうね、まず海岸周りを見てみましょう?」

ティアの手に自分の手を重ね立ち上がる。やはりパジャマにくっついた物が気になるのだろう、背中等手の届かない所はティアに頼んだりして適当に払っている。

アト「ありがとう、ティア。さ、そろそろ行きましょ?」

ティア「どういたしまして。それじゃ、行くつか」

アト「ええ」

くくく

どれほど歩いたのだろうか、残念ながら彼等の細い腕には時計何て便利な物など付いておらず、時間を把握することは出来ない状態である。しかし、2人の脚にはかなりの疲れが溜まっているのだろう、既に痛みが走り出して経過した時間は短くない、それ相応に時間は過ぎている事を考えるとくくく5時間と言った所か。

ティア「ここって僕達が寝てた場所だよね……」

アト「ええ……。この程度の時間で回れるなら、ホントに小さい島みたいね」

ティア「入ってみる？」

後方のジャングルを指差し尋ねる。アトもほんの少し考えるそぶりを見せるが、直ぐに結論を出し、『行きましよう』と答える。

~~~~~

あれから、もう少し時間が経過した。彼等はジャングルの中を適当に探索し、分かった事がある。この島の動物達は余りにもでかく狂暴、自分達がいたはずの所の大きな動物など所詮は象、キリンで精一杯だが、この虎はそれを凌駕するサイズを誇り、更にまがまがしい。目は血走り、牙は口を閉じていても簡単に確認出来るほど大きい。何とか身を隠しやり過ごしてきたが、見つかるだけで自分達は終わりだろうと覚悟しながらも探索を続けた結果は非常に、満足出来る物だった。



ティア「アト、湖だ！」

アト「良かった……水分は何とか確保出来そうね……」

そう、湖を見つけたのだ。海水でも火を使えば普通に飲むことが出来る様になるが、火を出す手段が無いので、没としたのだ。

ティア「底が見える……凄く透き通ってるね」

アト「ええ、飲めそうで良かった……」

2人は手で水を掬い、喉を潤す。一気に身体の疲れが吹き飛んだ心地になるが、すぐに足りない物に気付いてしまった。

ティア「何も食べてないね……」

2人ともどちらかと言うと少食の部類に入るが、起きてから約7  
〜8時間歩き続け、何も食べていないのだ、お腹がすくのは当然の  
事。

アト「そうね、流石に何か食べたいわ……」

探索の途中で2人は所々木の実や、植物がある場所を確認し、既  
に把握している。

ティア「じゃあ、食べ物集めようか」

アト「そうね、行きましょう」

)))

あれからも、もう更に時間は経過し、2人の手元には木の実やら植物が大量に集まっていた。運よく湖から5分程歩いた所に洞穴の様な場所があり、そこで一息ついていた。当然この洞穴には主がいる可能性は多大にある訳だが、開けた地形じゃないだけに、短時間ならここの方がよっぽど安全だろうと判断しての事だ。

ティア「ふう、……余りおいしいとは思えないね……」

アト「そうね、ただ、少しだけおいしいのも合ったけどね」

ティア「そうだね、お腹もとりあえず膨れたし良かった。そろそろ出ようか」

アト「その方が良いわね、主人が帰って来ちゃうわ……」

その後2人は再びジャングルの探索を始めた。身を隠す事にはすっかり馴れてしまい、野獣達に見つかる事は全くなく、大方ジャングルの探索し終えた頃にはすっかり辺りは闇に包まれてしまっていた。

2人にはある問題が合った。お互い気付いていたが、結局解決策を見出だせず、困り果てていた所だったのだ。

ティア「どうやって寝よう……」

アト「あの洞穴で寝る訳にもいかないしね……」

そう、彼等が生きていられたのも、野獣達から身を隠し続けていたからであり、睡眠によって意識を手放す訳にはいかないのだ。

しかし

グオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

そんな事を2人で話し合っていると、遠くからツンザク様な野獣の鳴き声が聞こえてきた。

ティア「……………何だ？」

アト「……………穏やかじゃないわね……………」

冷静を保ってはいるが、しばらくは動けずに鳴き声のした方を見つめていた。が、その後に見えた物には驚きは隠せなかった。

ティア「……！？ あれは！？」

アト「光！？」

そう、微かに赤く光っているのだ。しかも、その直前に野獣の断末魔と思われる物を聞いているので、肉にありつける可能性も高い。期待しない方が可笑しいという物だ。しかし、辺りは闇。昼の明るい状態とは訳が違う、小さな物音一つも命取りになる。

ティア「行こう、アト」

アト「ええ、その方が良いわ」

例え今行かないとするなら、とりあえずは生き長らえるだろうが、夜も眠られず、長く生きる事が出来るとは到底思えない。

~~~~~

あれから、光の方向へ進み続けて来たが、1つ問題が出来た。未だ確実な物では無いが、恐らく何かに見付かってしまった。何かが違うのである。ただの感覚としか言いようが無いが、2人の意見はガツチリと合ってしまった、何かに見続けられていた。光はもうすぐそこに見えているのだ、後少し頑張れば人に出会える可能性がある。ある以上希望は持ち続けるが冷静を保つ事は決して忘れない、闇雲に走り出す何て馬鹿げた事はしない。

しかし、暗闇のジャングルで足元に注意しているとは言え、人間には限界がある。

アト「……キャッ！」

木の根っこに脚を取られ、転ぶ瞬間に声を出してしまった。即座にティアがアトを立たせるが、疑問が核心に変わった、背後から何かはいずる様な音が凄く速さで追いかけて来る。

ティア「（蛇！？ うっ……もうすぐそこなのに……）」

アト「（ダメ……追いつかれる！）」

2人が完全に諦めかけた瞬間、何かが2人の横を走り抜け、前に出た。

ティア「……えっ？」

アト「……人？」

2人が驚くのもつかの間、一瞬だけピカリと小光りした瞬間目の前の蛇は真つ二つになってしまった。

ティア「……………剣？」

「……………」

大蛇を斬った張本人は、2人が安全なのを確認し、剣を鞘に納めると、何も言わずに振り向き去ろうとした。……………が

ティア「待って下さい！」

「……………」

剣士は首だけをコチラに向け、2人のなりを見て、こう言った。

「……来い」

こうも言いたくなるのはしょうが無いだろう。2人の格好は酷い物だった。いくら野獣に遭遇する事はなくても、一日中馴れないジヤングルの中を歩き回り、どこかに引つ掛ける事もあつたろう。着ていたパジャマはボロボロになり、草の汁や泥で汚れに汚れていた。オマケに裸足で足からは所々流血し、武器も持たない様な子供がこんな所で生きて行ける筈が無い。

ティア「えっ？ ……」

アト「……………」

2人とも普段は如何に冷静沈着と言えども、命の危機に触れてすぐに平静を取り戻せないのは仕方の無いこと、そんな2人にもう一度剣士は声をかけた。

???「聞こえなかったのか？ 来いと言っている」

ティア「あつ……はい」

アト「……ええ」

~~~~~

ティア「さっきは助けてくれて、ありがとうございます」

今現在は、先程光が見えた場所に来ており、恩人の剣士がここで温かい食事を与えてくれた。

やはり見えた光は焚火であり、近くには食用サイズに切り刻まれた肉が置いてあった。その肉を軽く炙り、パンに挟んだ物はホントに美味しく、ここに来て初めて全てが満たされた様な気持ちになる。

「???」 気にするな、それより……お前達は何故ここにいる」

もつともな疑問、17〜18程の子供がこんな場所でボロボロになっ  
ていたのだ。

アト「それが、分からないんです……昨日私達は普通にベッドに入  
って寝ただけなのに、今日の朝起きたら海岸にいたんです……」

バカバカしい話である。こんな話をしても信じて貰える筈が無いと頭に入れながらも、説明をした。……が、この男は違った。

「……ふむ。聞いたことも無い事だ」

ティア「信じて貰えるんですか？」

信じて貰えた事が逆に驚きだった。

「……嘘をついてる者とそうでない者の区別くらいは出来る。お前達も混乱しているのだろう」

ティア「お見通しですね……これからどうすれば良いのかも分からなくて困っていた時にちょうど焚火が見えた物ですから……とにかく人に会いたくて、ここまで来ようとしたのですが……」

???「ふむ。まあ良い、お前達今日はここに寝て行け。寢床にも困っていたのだろう」

アト「助かります、1番困っていた事なんで……」

話し方自体は軽く威圧的な物があるが、人自体は思っていたよりも優しく面倒見の良い男で2人は安心し、完全に気を許して接している。

だが、今まで聞いていない大事な事を忘れていたのをパツと思出し、質問してみる。

ティア「あの、そういえば、名前は何と言つのですか?」

???「俺の名前はジュラキュール・ミホーク、ミホークで良い」



## 1話 始まり（後書き）

ミホークって事はばれてる事前提で書いてます（笑）

ミホークは面倒見が良いように見えるんですよ……皆さんはどうなんですよ



## 2話 稽古（前書き）

テスト近いのに何やってんだろ……（^ー^；）

## 2話 稽古

ティア「うーん……良く寝た」

現在ティアとアトはミHOOKに出会い、軽く話をした後、気持ち良く眠っていた所だった。

ティア「（アト……はまだ眠ってるか、無理もないね……）」

アトはティアのすぐ傍らで眠っており、未だ目覚める様子は無い。アトを起こさない様に体を起こし、少し伸びをすると、体中に血が巡るのが分かる。スッキリとした頭に浮かぶ事はやはり、全体もスッキリさせたい、そう、お風呂に入ってないのだ。昨日はジャングルを一日中歩き回った。そりゃ汗もかくし、泥んこも体中に、特に足元にこべり付いている。余裕が出来たのだろう、昨日は考えもしなかったが、湖で汚れを落とそうかと歩き出した瞬間に、向かおうとした方向から声がかかった。

ミホーク「どこへ行く？」

両手にタツプリと水を汲んだミホークが立っていた。そういえば、周りにいなかったなと思いながらも、質問に答える。

ティア「おはようございます、ミホークさん。体が汚れているので、湖で流せればって思いました」

ミホーク「そうか、今なら大丈夫だろう、行ってこい」

ティア「はい、行ってきます」

〜

ティア「ふう〜、冷たくて気持ちいな……」

体を流し終え、湖に足だけ浸かって、一休みしている所である。  
そこへ、人が来る気配がした……気配というか核心していた、人物も特定出来る。何故か少し前から気配の様な物を過敏に感じるが「生き残る為に勘が良くなったのかな？」何て軽く考え、また水に意識を集中させる。

アト「おはよう、ティア」

そう、後ろからやって来たのはアトである。目が覚めてすぐミホークにティアの居場所を聞き、ここにやって来た。

ティア「おはよう、良く眠れた？」

アト「ええ、あんなに熟睡したのは久しぶりだわ」

アトは湖に膝下まで浸かり、体の汚れを落としていく。その様子を何となく見ていたが、どうやら終わつたらしい、「戻りましょうか」と掛かる声に「うん」と答え、2人並んでミホークのもとへ歩いて行つた。

~~~~~

ミホーク「戻ったか、ちょうど朝食が出来た所だ」

さすがにここまでしてもらつてノウノウとしていられる程2人の神経は太く無い、その旨を伝えたが、一蹴され、結局は恩恵を受ける事になる。

しかし、朝食を食べ終えた後に2人で話し合った事がある。いつまでもミホークの恩恵を受けていては、自分達は自力で生きる力をつけられない、ミホーク自信も縛って仕舞う。このままはお互い良い事では無い。2人の話の結論をミホークに伝える事にした。

ティア「ミホークさん、僕達に稽古を付けて下さい」

せめてこの島で自立出来るくらいに、後もう少しだけミホークに助けて貰いたいと、誠意を込めて話した。ミホークも何も言わずに黙って聞いてくれていた。この島から連れ出してくれという話しも出たが、この世界はどこへ行ってもこの島のように危険な可能性がある。そこを考えると、一時的な凌ぎではいけない、ならば自分達で生きていける様になる方が良い。ミホークに手間をかけさせて仕舞うのが大分心苦しいが。

ミホークも10秒程考えるそぶりを見せるが、比較的早く決断し、口を開いた。

ミホーク「ふむ……良いだろう。ちょうど暇な所だった、ミツチリ
稽古を付けてやる」

ティア・アト「ありがとうございます！」

~~~~~

稽古の願いを出したその昼からミホークは相手をしてくれた。ち  
ようど近くに大きな鎌に似た形で折れた木があったので、アトはそ  
れを振り回してミホークと戦って見た。案外しっくりきたので、こ  
れからもそれを愛用する予定。ティアもアトと一緒に良い何て言っ  
て、鎌の様な木を探したかいがあり、同じ様な木を見つけられたの  
で、それで戦っていた。だが、所詮「木」耐久性も殆ど無いに等し  
いが、それでも折れないで戦い続けていられるのはミホークが上手  
くないなしてくれていたからだろう。

ミホークは普段こそ優しく接していたが、稽古となると一気に厳  
しくなった。平気で2人に辛辣な言葉を投げ付ける事も少なく無か  
ったが、稽古が終わるといつも通り優しいミホークに戻る。優しい

と言つても、他人から見ればそうは見えないだろうが、近くにいる人しか分からない物も沢山ある。

くくく

ミホークに稽古を付けて貰ってから、3日が経った。この日の稽古が終わってから、ミホークにある事を言われた。

ミホーク「ティア、アト、後ろを向いて目をつむれ」

最初は何を言っているか分からなかったが、取り合えず従う事にした。準備が終わると、ミホークにこんな事を言われた。

ミホーク「おれは今何本指を立てているか答えろ」



普通だったら分かるはずが無いだろうと思うが、2人は違った。

ティア・アト「3本」

ミホーク「(……やはりな)もういいぞ」

ティア「やっぱり、アトも見えたんだ」

アト「ええ……」

2人は後方にあるものをピタリと当てて見せた。あてずっぽうではなく、核心を持って。

ミホークには疑問に思っていた事があった。全くの素人が、ここ

に潜む野獣達に見付からないで島全体を探索出来るものか、結論は何も考えずともNOだ。この島は面積に見合わない程の野獣達が潜んでいる訳ではないが、十分に多いと言えるレベルだ、偶然にしても出来過ぎている。

ミホーク「（見聞色の覇気、一級品と言っても良いな……）」

そう、2人はただの勘で済ましてしまったが、実は見えていた、聞こえていた。偶然遭遇しなかったのではない、本能がサイレンを鳴らしていたのである。

ミホークも対峙して確信した。自分が剣を振る前に切っ先を見切られる事が多々あったのだ、未来が見えていなければ、説明がつかない程に早く。

この後ミホークは2人に見聞色の覇気について適当に説明したが、敢えて2人の覇気はまだまだだと言っておいた。

2人も納得していたようだが、自分達にそんな力があつたのだと、驚いていた。

~~~~~

あれから、一月程経過して、気付いた事がある。ミホークから前に辛い言葉を聞かなくなったのと、周りの野獣達が自分達を避ける様に動く様になったのと、それが分かる程に見聞色の覇気が強化された事、そして思いつ切り木の大鎌を振っているのに折れていない事。

ミホーク「(本来覇気は年単位でやっと身につく物……こいつ等の才能の成せる事、天賦の才か……武装色の覇気も身につけつつある……面白い)」

ミホークも本来ならこの島で自立出来る様になってすぐに稽古を終えるつもりだったが、2人の成長の速さにミホーク自身が楽しんでいる事を自覚してしまっている。

〃
〃
〃

あれから更にもう一月経過したころ、ティアとアトも武装色の覇気をほぼ身につけていた。

ミホークの心境にもある変化が現れた。ティアとアトの才能に確たる未来を期待仕出す様になったのだ。将来世界に多大な影響を与える器になると、将来は自分の好敵手になり得ると。

〃
〃
〃

そしてある日ミホークがこんな事を言い出した。

ミホーク「ティア、アト、この島を出るぞ」

ティア「え？ どうして行きなり……」

そう、何の前触れもなく唐突に言い出したのだから当然疑問に思う。

ミホーク「この世界は力が全て、この島ではそろそろ役不足だ」

鍛える気満々のミホークに2人とも軽い喜びを覚えながらも、行き先を尋ねる。

アト「じゃあ、どこへ行くんですか？」

ミホーク「エニエス・ロビーだ」

2話 稽古（後書き）

少し淡々とし過ぎてますかねー
（ - - - ）
” - - - ”
（ - - - ）

3話 マリンフォード（前書き）

ごめんなさい、前回のラストでミホークは『エニエス・ロビー』と言っていました、『マリンフォード』の間違いです。もっとちゃんと確認していれば良かったのですが、不足していた様です。

m () m

3話 マリンフォード

ティア「所で、マリンフォードってどんな所なんですか？」

そう、原作を全く知らないので、島の名前を出してもパツとしな
いのである。

ミホーク「マリンフォードは海軍本部が置かれた政府の島だ」

アト「何でいきなりそんな所へ？」

ミホーク「海軍には六式という特有の戦闘技術がある。おれも良く
知っているが、便利な物だ。覚えておけば何かと役立つだろう」

これまでミホークに稽古を付けてもらい、自分達でも分かる事がある。自分達はこの島で自立出来る程度に強くして欲しいと頼んだのだが、既にこの島に敵になる野獣はいない程の強さは手に入っている。それでも未だ稽古を付けてくれるミホークにその旨を聞いてみたら、こんな事を言ってきた。

ミホーク「確かに、この島ではお前達に敵はいないだろうが、やって来る海賊達はここの野獣達程優しく無いぞ。それに、お前達はここで一生を過ごすつもりでは無いのだろう、良い機会だ」

その後は、これからも宜しく願いしますと伝え、すぐにマリンフォードへ出られると思っていたが、1つ問題点があった。

ティア「ミホークさんの乗ってきた船って……これですか？」

そう、サイズが小さいのだ。普段は一匹狼のミホークの事だから、これで十分なのだが、今は3人いる。

ミホーク「そうだ」

アト「……乗れるかしら？」

ミホーク「試しに乗って見るか」

乗った。確かに狭い。常に誰かと接触しているが、乗れはした。

どう乗り込んだかと言うと、真ん中にミホーク、右側にティア、左側にアトの並びで収まっている。

アト「……一応は大丈夫ね」

ティア「そうだね……」

行き当たりばったりで、これからの航海が心配になるが、流石にこれからイカダを作ると言うのも面倒臭さ過ぎるし、辿り着けないという事も無いだろうと、航海を決行してしまうミホークだった。

くくく

あれから、半月が経過した。嵐やら海賊（身の程知らずが大半を占める）やらで、何だかんだ大変な航海になったが、水平線にマリオンフォードが見えた頃、こんな会話を交わす事になるとは思わなかった。

アト「そういえば、この格好で人前に出るのかしら……」

そう、2人はまだパジャマのままなのだ。ミホークが代えの服を持ってきていたが、ミホークは自分達よりも背が高く、サイズが全

く合わなかった。

ミホーク自身も2人の格好はあんまりだと思っていたので、普段より積極的に海賊船を潰して代わりの服を探して来たが、サイズが合わなかったり、女物は無かったりで結局はパジャマのままここまで来てしまった。

最悪、このまま服を買って、その後すぐに宿で一泊するのも無しでは無いが、こんな格好で街中を歩く事は、ミホークにとっても、2人にとっても、避けたい事であった。……が、そこで都合良く、目に入ったものがある。

ミホーク「……ちょうど良い、少し邪魔するでしょう」

海軍の軍艦が港から出港したのが見えたのだ。向こうもコチラに気付いているようだ、軍艦が少しざわついている。

軍艦Side

海兵「モモンガ中将！ ミホーク様の船が2時の方向に見えました！ ミホーク様はコチラにコンタクトを求めている様子です！ どうなされますか！」

ビシッと敬礼と起立を決め、報告をする海兵にモモンガ中将は視線を向け、少し考えるそぶりを見せ、答えて見せる。

モモンガ「ふむ……良いだろう、方向転換しろ」

~~~~~

現在、ミホークの船と軍艦を隣接し終え、軍艦に乗り込んでいる最中だ。ミホークが乗り込む瞬間に海兵達がざわつくのが見えたとし、先程からミホーク様ミホーク様と周りから聞こえて来る事から察す

るに、かなりの地位を確立しているのかなとティアとアトが考えながら、軍艦に一步足を踏み入れると、先程よりも更にざわつきが大きくなるのを感じた。

自分達の見なりに驚いてるのかと思ったが、どうやら違う様だ。

モモンガ「お前が連れを持つとは……珍しい事もあるものだな」

ミホーク「ある島で拾って以来共に行動している。ティアとアトだ」

ふむ、と顎に手を添えながらモモンガ中將がティアとアトを見ている。やはり見なりが気になる様だが、ミホークに用件を尋ね始めた。

モモンガ「それで、わざわざ呼び出した用件は何だ？」

ミホーク「2人にシャワーと服を提供して貰いたい」

分かったと相槌をうつモモンガにミホークは軽い礼を告げ、船に戻って行ってしまった。

モモンガ「誰か！ 2人をシャワー室に案内してやれ！」

海兵「はっ！」

あれよあれよと言う間に事は進み、2人はついていけないが、先程の海兵がやって来て、「コチラです」と案内してくれるので、そのまま従う事にした。

~~~~~


海兵「コチラにお着替えを置いておきますので」

アト「分かりました」

海兵「どうぞごゆっくり」

そう行つて海兵はもとの職場に戻つて行つた。2人はと言うと既にシャワーを浴びていて、話をしている。

アト「気持ち良い……」

今までずっと水浴びだけだっただけに、久しぶりの温かいモノで体を流せる事がここまで幸せに感じるのが新鮮だった。

ティア「やっぱり泡があるって良いね」

アト「ええ、凄く汚れが落ちてくのをを感じるわ……」

その後15分程度で体を洗い終え、現在着替えも終えた所である。

アト「海兵さんが着てた制服ね」

ティア「うん、何か変な感じがするや」

アト「でも、マリンフォードって海軍本部の島だって言ってたから、違和感はなさそうね」

この後、モモンガ中将に礼をして、ミホークのもとへ向かい、マリンフォードへ再び船を進めるのだった。

~~~~~

ティア「ここがマリンフォードかぁ……………」

アト「面白い形の島ね……………」

ティア「すぐそこに見える城が海軍本部ですか？」

ミホーク「そうだ、行くぞ」

歩き出したミホークの1歩後ろについて物珍しげにキョロキョロ

しながら海軍本部へ向かう。10分程度だったか、歩いていると海軍本部の入口にたどり着き、見張り番はミホークを見るやいなや即座に敬礼しだし、扉を開けた。中はと言うと、外見通りの和な造りで、海兵が世話しなく働いているのが目立つ。「何でこんな所にミホークが？」と言う視線が惜しみ無く注がれるが、華麗にスルーし、そそくさと歩き出す。どんどん上の階に上がって行き、ある扉を開くと、奥には海軍本部中將のガーブと海軍本部元帥のセンゴクがいた。

突然の来訪者に心底驚くセンゴクにガーブ、思いつ切り目を見開いている。

センゴク「ミ、ミホーク！？ 何故ここにおるのだ！？」

ガーブ「おお！ 久しぶりじゃのお、ミホーク！」

ガーブは相変わらずだが、センゴクの反応が普通だろう。

ミホーク「今日は1つだけ願いがあったな」

センゴク「ほう、お前に願いとは珍しいな……」

ミホーク「この2人に専属の師を付けて訓練をしてやって欲しい」

センゴクはかなり驚いている。そりやそうだ。王下七武海、しかもよりによってミホークからこんな事を頼まれる何て天地がひっくり返る事の次辺りに考えられない事だったのだ。まあ、それを実現させてしまうほど、ティアとアトの成長を楽しんでいるという事だが。

センゴクは頭を抱える様に悩んでいる。ミホークはシャンクス同様世界をどうこうしようという奴では無い事は分かっているが、ここまで予想外の事があったのだ、簡単に決断を下す事が出来る筈が無い。

ガーブ「ええぞ！　わしが直々に鍛えてやる！」

一瞬空気が固まった。悪気は無いが、センゴクが必死になって考えているのに、脳天気な一言がそれを踏みにじったのだから啞然としてしまうのも頷ける話し。しかし、センゴクも黙ってはいない。

センゴク「ガーブ！　お前何を言ってるのか分かってるのか！！」

ガーブ「分かっとる、大丈夫じゃ！　わしに任しとけ！」

こうなったガーブはもう止められない。センゴクもそれを重々承知している為、もう何も言わない事にしたが、代わりに頭痛がやって来る。

ティアとアトが話について行けず、黙っていると、目の前にガーブがやってきた。さっきまではただ大きいと思っていたが、いざ目の前に立たれると、後ずさりしそうになるほどの体つきに目を丸く

する。

ガープ「ガープじゃ！　これからお前達をみっちり鍛えてやる！  
覚悟しとけ！！」

そう言っで差し出して来た手を握り、それぞれ名前を教える。ガープは握手が終わると大笑いして2人をがっしりと掴み、こんな事を言ってきた。

ガープ「ちょうど良い、わしあ今暇だった所じゃ！　すぐに始めるぞ！」

ティア「…………えっ！？」

アト「…………えっ！？」

言うが早い、2人を引きずってそそくさと行ってしまった。ガ  
ープが出て行ってしまったのを見て、啞然として突っ立っているだ  
けだった2人だが、センゴクがあることに気付き、怒鳴り散らした。

センゴク「……はっ！？ ガ~~~~プ~~~~！！ 未だ報告書が山程残  
つとるだろ~~~~！！！」

叫び声も虚しく本人の耳を通り抜け、脳内に留まる事は無かった。



### 3話 マリンフォード（後書き）

やっぱり、文章が淡泊で淡々としていて展開速くてイケませんね……

直したいんだけどなあ……どなたか、文章に「こうした方が良いでしょう」や「こんなのは止めた方が良い」なんてのがあったらコメントでアドバイスして下さると嬉しいです。

#### 4話 ガープ（前書き）

文章力をつけたい、お金が欲しい、テストを切り抜ける頭が欲しい  
（ノ・。・）

## 4話 ガープ

海軍本部訓練所

ティア「……痛い」

アト「頭がズキズキするわ……」

ガープ「ぶわっはっはっはっは！ 2人共まだまだじゃ！」

ミホーク「……」

「一体どういう状況を説明しなくても分かると思うのですが、少し遡って説明します。」

前回のラストでガープに引きずられてやって来たのは、とにかくだだっ広く、周囲を囲む壁がやけに高い場所で、引きずれている事を忘れてしまう程に何か物々しい雰囲気を放つ所だった。

2人は未だ訓練所の方に気を取られているが、急に自分達を引っ張っていた力が急激に強くなり、2人は立たされた。不意に立たされた為、膝に力が入っておらず、転んでしまいそうになるが、何とか力を入れ、立て直す。そんな2人を見て再び大笑いし軽く謝っているガープだが、背中をバンバン叩きながらなので、ティアとアトはその痛みに顔を引き攣らしていた。

アト「（加減って言葉を知らないのかしらこの人……）」

ガープ「よし、遠慮はいらん！ 本気で来い！」

正直最初は躊躇ったが、しょうが無いと諦めアトを見ると、丁度目が合った。どちらともなく笑みを見せ、ガープを見据える。引き

ずられて来たので、愛用だった枝の大鎌は無いが、ミホークとの稽古によって、武器が手元に無いときの戦闘法も身につけており、問題は無い。

ティア「……行くよ」

アト「ええ」

走り出した。

流石に双子、合わせてはいないが、同時に地面を蹴った。

仁王立ちで構えたガープに、ティアは正面から顎に向けて掌底を放つが、アツサリと避けられてしまう。だが、見聞色の覇気は伊達では無かった。当然避ける方向が分かっている為に、アトが先に追撃の準備をしていた。

ガープ「（ほう、見聞色の覇気か、かなり先が見えとるな……）」

アトが膝でガープの顔面を狙う。しかし、ガープも伊達に中将はやっていない、難無くそれを避けてしまいが、それも先に見えている。ティアが更に溝口に拳を突き出すが、手で払いのけられてしまい、バランスを崩すが、すぐに体制を立て直し、更なる追撃に備え始めた。

ガープ「（キリが無いの……面倒臭くなってきたわい）」

この後も同じ様なやり取りを繰り返すが、単純作業に耐え切れる程に忍耐強いガープではない、だんだんとイライラが顔に出始めた。

ティアとアトもガープの表情が明らかに険しく成っていくのが、分かっていく。何故かは全く分からないが、当然の様に良い感じは微塵もしない。しかし、2人が何となくの悪い予感を感じ始めた時、ある物が見えた。

ティア「（まずい！　すぐ避けなきゃ！）」

アト「（……実現させたく無いわね）」

2人の頭に見えた物は、ガープの拳で吹き飛ばされる自身の未来。ただ、ガープのパンチの速度は非常に速く、回避しようと、後退した2人を軽々とぶっ飛ばしてしまうのだ。

2人は、見えた未来を実現させたく無いので、見えた物とは違う方向に避けた。ティアは真右に、アトは真左へ、正反対の方向へ回避する。これならやられるのは最低1人で済むかも知れないと思った矢先、2人の首筋を掴む大きな拳が合った。

ティア「グッ！？　首、呼吸が……」

アト「きゃっ！？　」

ガープ「捕まえたぞ……そりゃあああ！」

ティア「うわあああ」

アト「キャアア！」

2人は、首を捕まれたまま、ガープに思いっ切り投げられて壁にたたき付けられてしまった。まるで小石を投げるかの如く簡単に人を投げ飛ばす怪力に驚くが、正直今は痛みでそんな所に神経をやってる余裕は無い。

そして冒頭のシーン

ティア「……痛い」



アト「頭がズキズキするわ……」

ガープ「ぶわっはっはっはっは！ 2人共まだまだじゃ！」

ミホーク「……………」

いつからいたのか、ミホークはガープと2人の戦闘を見ていた。順当な結果に納得してはいるが「まあ、良くやったか方か……」何て意外と悪い評価ではなく、阿保だが、実力は折り紙つきのガープを師として迎える事に成った事は喜ぶべき事だと、内心素直に喜んでいた。

ティアとアトが疼くまっっていると、ガープがやって来て、2人を掴んで立たせた。未だ、痛みは抜けていないので、自然とふらついてしまっているが、ガープはお構い無しに話しだす。

ガープ「2人共まだまだじゃが、スジは悪くない！ 確実に強くなれる！ とりあえず、今日はここまでじゃが、明日からみっちり鍛えてやる！ 覚悟しておけ！」

そう言つて後ろ背に手を振り去つて行くが、ミホークとすれ違う時に短い言葉を掛ける。

ガープ「ええ人材を見つけたな……」

ミホーク「……………」

そのまま、訓練所から出て行つた。

ティア「凄く豪快な人だったね……………」

アト「ええ、ただ、全く歯が立たなかったわね……」

そんな事を話していると、2人のもとへミホークがやって来た。

ミホーク「これからは海軍の宿舎に寝泊まりする事になる。お前達で1室、おれで1室使うから、後で、場所案内をする。が、その前に、このままおれとの稽古だ」

ティアとアト愛用の枝大鎌を2人に渡し、首からぶら下げた短剣を抜き、2人に向ける。正直今日は勘弁して欲しい気持ちでいっぱいだったが、枝大鎌を手に取り、ミホークえ向かって行った。

~~~~~

ティア「今日が今までで1番辛かったかも……」

アト「私もだわ、体中筋肉痛になっちゃうわね……」

あの後、いつも通りの稽古を終えた後、ミホークに海軍本部内部を案内して貰い、現在は自室のベッドの上で2人並んで寝転びながら、話をしていた。

ティア「久しぶりのベッド、フカフカだ……」

アト「今まで満足に寝る事も出来なかったからね、凄く気持ち良いわ」

そりゃそうだ。島で地べたに寝れば、腰が痛い。狭い船で寝れば、体伸ばす事が出来ない。まともな睡眠環境など、この世界に来てから初めてなのだ、2人がこんな事を話題に出すのも自然の事だった。

しかも、2人の部屋は海兵達の使う部屋では無く、客室を使っている。海軍本部の客室なのだから、かなり豪華で広く、風呂もついている。ベッドもフカフカ、ミホークの力が伺える。

このまま、2人は話を続けるが、そのまま眠りに落ちてしまい、気付けば翌日の朝になっており、思っていた以上の疲れの大きさに驚かされる事になる。

4話 ガープ（後書き）

ガープ少し阿保過ぎるでしょうか、足りない気もするし、過ぎてる気もするし……（-”-；）

5話 影輝赤（前書き）

今回少し短いかな？

5話 影輝赤

ガープとの稽古を開始して、2週間が経過した。あれから、海軍の人にもある程度顔を覚えてもらい、会話をすることも増えた。下心丸見えの者も少なくは無いが、やはりそれでも嬉しいものだ。2人もやつとガープとの稽古を終えた後に、ミホークとのダブル稽古に馴れてきた所で、最初の頃の様に筋肉痛と怪我でまともに動けないという事も無くなった。そんなある日の事

ティア「ミホークさんが僕達を呼ぶって、何なんだろうね？」

アト「ええ、ほとんど無い事よね……」

そう、毎日稽古で合っているし、何かと一緒にいるので、わざわざ呼び出す必要が無いのだが、さっき1人の海兵を通じて、2人にある伝言が届いた。

海兵「先程、ミホーク様から伝言を承り、参りました。本日の夕食後、街の武器屋に来い。との事です」

ティア「えっ？ ……はい、分かりました。ありがとうございます」

海兵「それでは！」

ビシツと敬礼を決め、部屋から去って行った。その後、アトと相談したものの、思い当たる事は見つからず、とうとう何も分からなのまま武器屋の前まで来てしまったのだ。

アト「案外私達の武器を買ってくれるのかもね」

ティア「そうだと嬉しいな」

適当に冗談を一言一言交わし、武器屋の扉を開いた。

ミホーク「来たか」

ティア「どうしたんですか？ わざわざこんな所まで呼んで」

ミホーク「ああ、お前達に渡したい物が合ってな。おい、持ってきてくれ」

店主「あいよ！ ちと待ってな！」

ミホークに頼まれ、景気よく返事した後、店の奥へ走って行った。ティアとアトはと言うと、正直な所、もう予想はついている様で、落ち着いた物である。

店の奥の方からドタドタという足音が聞こえてきたすぐ直後に、2つの大鎌を抱えた店主が出て来た。1つの大鎌は真っ黒で、シルエットだけを見ているかと錯覚してしまう程、形を言うなら、刃の部分が広げた蝙蝠の羽の様な形をしており、先端が槍の様になっていて、突き刺しても使える形状になっている。もう片方は真っ白で、少し光を反射しており、ほんの少しだけ眩しいとさえ思える程、形は刃の部分が薔薇の花びらを縦に少し細長くした様な形をしており、それが左右に1つずつ付いていて、更に、先程と同じ様に先端が槍の様になっていて突き刺しても使える。

ティア「うわぁ、凄い……」

アト「凄い……」

ミホーク「……………」

彼等が今まで使っていた物（たまたま大鎌の形をした枝）が余りに酷かったが為に、余計感動しているのかもしれないが、そんな事を差し引いても2人は凄く感動しているのだろう。余り言葉は話さずに、ただ2つの大鎌を見つめていた。

ミホーク「ティア、アト、こっちに來い」

ティア「はい」

アト「ええ」

2人はミホークの前に並び、次の言葉を待っている。ミホークはティアとアトを軽く見据えた後、2つの大鎌を手に取り、黒の大鎌をティアに、白の大鎌をアトにそれぞれに渡した。2人が實際手に取り、感觸を確かめてる間に、ミホークが話し始めた。

ミホーク「ティア、お前の大鎌の名は、漆鉋大鎌の『影』。漆鉋石という、光をほぼ反射せず、ただ吸収し続ける鉋石を使用した大鎌だ。特異な性質だけでなく強度もかなりの物だ」

次にアトの白い大鎌を見て、名前を告げる。

ミホーク「アト、お前の大鎌の名は、発光大鎌の『輝赤』きせき漆鉱石と対を成す様に存在する発光石を使用した大鎌だ。光をほとんど吸収せずに、反射し続ける事が大きな特徴だ。こちらも強度はかなりの物だ。破損を気にしないで使えるだろう」

ティア「ミホークさん、これ本当に貰っても良いんですか？」

ミホーク「受けとって貰わねば困る。それとも、ずっと枝を使い続けるのか？」

この言葉を聞き、2人は大人しく大鎌を受け取る事にした。ミホークに感謝の言葉を伝えると、いつも通り「気にするな」と言ってくれた。この言葉を聞き、改めてこの大鎌は自分の物なんだと、実感した時、2人とも同じ事を考えていた。

ティア・アト「（試してみたい……）」

アトがティアに目をやると、ティアもちょうどこちらを見ていた。2人してニヤリと笑うと、ティアがミホークにこんな事を言った。

ティア「ミホークさん、今すぐに、この影を試したいです」

アト「相手して貰えませんか？」

ミホークは予想していたのだろう。言われた時も、反応は全く無かったが、少しだけ間を開けて、一瞬だけ笑みを見せると、2人に返事をした。

ミホーク「いいだろう、今すぐ訓練所へ向かうぞ」

ティア・アト「ありがとうございます！」

~~~~~

目の前には十時の短剣を構えたミホークがいる。こちらも先程貰った大鎌の「影」つ「輝赤」を構え、間を詰めていくが、相変わらず隙が見つからない。短剣をこちらに向けているだけなのに、その十数倍もある大鎌を持っているこちらの方が小さく感じてしまう程の威圧感。ただ、睨めっこしていてもしょうがない。2人同時に飛び出し、まずは普通に縦方向へ振り下ろしてみた。

ティア「（……重たい）」

2人の使っている大鎌は特別重たい訳ではないが、今までが今ま

でただけに普通の重さに対応出来ていないのである。その後も、しばらく大振りを続けるが、ある程度様子を見たミホークはもう確認する必要は無いと判断し、隙について2人の手元から大鎌を短剣ではじいてしまった。

ティアもアトも余りに不甲斐無い結果に、再度大鎌を持ち、ミホークに立ち向かう。ミホークも2人の感じている事が分かるので、あえて一喝する事はせずに、黙って2人の相手をしていた。



## 5話 影輝赤（後書き）

大鎌の名前が思い浮かばなくて苦しかった

## 6話 旅立ち（前書き）

少し急いだ感が滲み出てる気がするな（ - - ” - - ）

あと、大鎌の表示をサイズに変更しました。どうしても語呂に絞ま  
りを感じなくて……

## 6話 旅立ち

2人が『影』と『輝赤』をミホークから貰ってから3ヶ月が経過した。あれからも沢山の事があった。ミホークが現海賊であって何故ここを自由に動けるのか、という事も知った。ガープに連れられ3大将、センゴクと酒も飲み交わした（2人はオレンジジュースだった）。今ではすっかり仲良くなってしまい、暇な時は良く一緒に居る間柄だ。青雉に至ってはクザンと呼び捨てする程である。黄猿と赤犬に関しても、ティアとアトが海軍の人間では無い事と3大将を知らなかった事が良かったのだろう。常人ならば、3大将という事を知っている時点で普通に友人として接する事が出来るはずがなく、どこか壁を感じる事がほとんどだったのだ。ここまで普通の付き合いをしたのが久しぶりらしく仕切に2人に会いに来るし、稽古にも付き合ってくれる様になった。初めて黄猿の悪魔の実の力を目にした時は阿呆みたいに驚き、普段は冷静沈着な2人もこんなあからさまに驚くんだと面白がられもしたが、こんな力があるのならいつかは自分達も食いたいものだとして2人で話したりもした。

影と輝赤の重さにもなれ、普通に扱う事も出来る様にもなったし、2人に自覚は無いが、見聞色の覇気と、武装色の覇気にもより一層磨きがかかった。更に、海を航海する可能性も考え、航海術とグラウンドラインの気候についても勉強を重ねた。前の世界での成績もかなり良かった2人は、それらを理解し、自分の物にするのにたいした時間は掛からなかった。そんな時期に2人へある話しが持ち掛け

られた。

センゴク「ティアにアト、海軍に入らないか？」

ティア「えっ？」

そう、センゴク元帥直々に話しが来たのだ。2人とも、強くなつて何をしようという事を考えてはいたが答えを出せないまま、今日に至る。そんな時にこんな話しが来たのだから、このまま海軍になつてしまつても良いなど、思いもしたが、答えはNoだった。センゴクは驚く様子を見せずに、訳を問う。

センゴク「何故だ？」

アト「私達はこの世界の海をまだ何も知らないんです」

ティア「海賊達の怖さも、世界の現状も。自分達の目で少しでも見てから、改めて考え、答えを出します」

これを聞いたセンゴクは少し笑みを見せ、軽く頷いた。

センゴク「そうか。ならば、いつかまた君達に声をかけさせて貰おう」

ティア「はい。その頃にはお望みの答えを出せると思います」

センゴクに海軍入りを誘われ、改めて2人は考えさせられた。いつまでも、人に養われ、迷惑をかけていてもいい筈が無い。ならばどうするか、考えても2人が知っているのは、ティアとアトがいた無人島と、このマリンフォードだけである。無人島は平和とまではいかないが、海賊達の恐怖とはほとんど無縁。マリンフォードに至っては、海軍本部の拠点である、そんな場所を襲う馬鹿等いるはずが無い、平和そのものだ。そんな恐怖を知らない2人が正義を掲げる事は問題こそ無いが、どこか後ろめたい気持ちがある。ならばどうするか、考えられるだけの情報が無いのだ。文字や声ではある程

度の情報が入ってきているが、視覚にいれなければ、信用するに値しない。そんな2人がある答えを出した。

ミホーク「何だ？」

ティア「僕達、2人で旅に出てみようと思っんです」

自分達はまだこの世界をほとんど知らず、海軍に誘われたが、断った事、自分達の力がどこまで通用するかを知りたい、等の事を説明して、ミホークの返事を待った。

ミホーク「ふむ、ならば双子岬に行くと良いだろう」

ティア「双子岬？」

ミホーク「グランドラインで1番始めに留まる事になるだろう所だ」

双子岬でグランドラインの航路が決まる事、クロツカスという、海賊王の元船医がいる事、ログポースやエターナルポースの事を説明してくれた後に、「お前達はもう十分にグランドラインを渡れる力を持っている」と、かなりに自信を持てる言葉をくれた。更には、船の手配等もしてくれる事になり、稽古の仕上げ等、諸々の事を考慮し、出港は1月後に決定した。

ティア「ミホークさんには本当にお世話になったね」

アト「ええ、いくら感謝しても足りないわ……」

後1月しかこの島にいられないと思うと、これからの期待も強いが、やはり寂しさの方が強い事を急に実感する。ミホークは言うまでもなく、1番に迷惑を掛け、1番に感謝している人物。ガープも我が儘だが、海軍に入ってわしの下で働けとよく誘ってくれていた。3大將は、知り合ってから1番一緒に時間を過ごしただろう人達で、気兼ねも無しに話す事が出来た限られた人達で。振り返ると、本当に自分達は愛されていたのだと思う。

~~~~~

あれから、代わり映えした生活を送る事は無かったが、やはり1日1日を大事に過ごした。今までとは、全ての景色や人や在り来りな出来事が少し違う顔を見せるがやっぱりいつも通りだ何て考えて過ごすうちに、とうとう出港前日になってしまった。

現在は街の酒場にいるが、目の前には酒を飲んで暴れるガープや、相変わらず酔うと2人に絡む癖が出来てしまった黄猿と青雉、……にそれを止める赤犬、黙って酒を飲むミホークや、海兵の一同（全員は入らないので、ある程度仲良くなった者限定）。明日出港という事で、皆が集まって宴を開いてくれたのだ。

やはり、嬉しかった。自分達の為にこんなに人が集まってくれんだと感動さえしていた。

ガープが箸を鼻と口にツッコミ、ドジョウ踊りをしたり、集まっ

た者皆で歌ったり、青雉と黄猿に絡まれたり、激励の言葉を貰ったりと、楽しく賑やかな時間を過ごしたが、そんな時間はあつという間に過ぎ去ってしまい、皆が酔い潰れ、眠ってしまい、気付けば起きているのは2人だけになっていた。

ティア「今日は楽しかったね……」

アト「ええ、最後に皆がこんな事を企画してくれて嬉しかったわ……」

ティア「半端は出来なくなっちゃったや……」

アト「あら、半端する予定だったの？」

アトが意地悪な顔で聞いてくる。ティアは少し微笑み、「そんな訳無いよ」と答える。その後は特に話す事はせずに、黙って周りの皆の顔を見たり、無意味にアトと視線を交えたりと何気ない事をしている内に2人も寝てしまっていて、気付けば鳥が囀る爽やかな朝

だった。

~~~~~

ティア「……おはよう」

アト「おはよう……」

周りの皆はまだ寝ている。2人は体を伸ばし、体に血を巡らせると、外に出て、眩しい日差しを浴びに行った。まだ、眩しい物に目が馴れておらず、手で光を遮るが、それでも十分な程に強い光が顔を温める。何となくそのまま太陽を見ていると、中からガープが出て来て2人に話し掛けてきた。

ガープ「出港日和の朝じゃ。ティア、アト、わし等はお前達を待っている。ゆっくりとじっくりとこの世界を見てこい、そしていつか

は一緒に戦うぞ！」

ガープが両手を2人に出して来る。ガープは、2人がその手を取り、力強く、はいと答えたのを確認すると、酒場でまだ寝ている海兵等を得意の大声とげんこつで叩きお越しに酒場へ戻って行った。2人もそれを見て軽く笑うと、残った出港の準備をしに、部屋へ戻って行った。

~~~~~

ミホーク「これが、ログポース、こちらがマリンフォードと双子岬のエターナルポースだ、戻って来たければ、いつでもこれで戻れるだろう、そして、コイツが電伝虫と、お前達が親しくなった者達と連絡をとる為のメモだ」

現在は出港直前の船の上でミホークに最後の贈り物を貰っている所。他にも酒場で共に騒いだ面々が大集合しているが、内心では「この人達仕事大丈夫か」とも思った事は秘密だ。

その後も、改めて3大将、ガープ、ミホークと軽く言葉を交わした後、帆を張り、出港の準備を完了させた。

ティア「それじゃ、行ってくるよ！ また、いつか！」

集団からは、「頑張れよ」だの「元気でな！」だのと聞こえて来るが、いつまでも聞いている訳にもいかず、碇を上げ船を進めた。

アト「必ず帰って来るわ！ それまでね！ 貴方達も元気で！」

2人が大きく手を振り、皆に答える。

ミホーク「……………」

ガープ「気をつけるんじゃないぞ!? 必ず帰って来るんじゃないぞ!?」

赤犬「たまには連絡を寄越すんじゃないぞ?」

青雉「まあ、適当にやんな。帰って来たらまた飲もうや」

一同の最後の言葉を聞き、少し出港をしたく無くなる気持ちが出て来るが、それを振り切り、本当に最後の言葉を投げかける。

ティア「皆々! 今までありがとう! また、会おう!」

アト「……………」

アトはと言うと、何も言えなかった。やはり、感慨深かったのだろう、ティアがアトの方を見ると、涙ぐんで声を出せる状態では無かったらしい、右薬指で涙を拭い、

俯いているのが見えた。あえて何も触れる事はせずに、船の帆に描かれた双子の人間と2つサイズのシルエットを見て、声を上げた。

ティア「出港〜！ ジーニオス・ジェミニ号！」

6話 旅立ち（後書き）

ジーニオス・ジェミニ号

適当に考えました。

名前の意味を調べれば、「この作者アホだ」と思っただけで
しょう（笑）

7話 ジョット（前書き）

初戦闘！

私の文章力があらわにされた回でござるでござんす！

7話 ジョット

赤犬「行つたの……」

黄猿「また、しばらくは暇つぶしに困るね」

青雉「ん、ま、あいつらなら大丈夫でしょ、気長に待ちましょ
うや」

ティアとアトの船が見えなくなるまでとは言わないが、かなりの
時間見届けていた

一方ミホークはというと、2人が出港した後すぐに棺桶船でマリ
ンフォードを出た。ミホークがマリンフォードに留まっていた訳は
ティアとアトの訓練だったのだから、いなくなる時点でマリンフォ
ードに留まる理由が無いのだ。とにかく今は、不本意に出来てしま

った大きな暇をどう潰すかに悩みそはフル稼働中で、行き先は決めず流されるままに海を渡ってみる事にしたので、舵などは全く取らずに海を見つめていた。

~~~~~

ティア「ねえ、あれ何に見える？」

アト「海賊船」

ティア「やっと、出会えたね」

アト「ええ」

現在、2人はマリンフォードから、双子岬を目指して航海中であ

る。2人はとりあえず、培った自慢の戦闘スキルを賞金稼ぎで活かして、生計を立てる事は、出港した時点で決めていたが、何も情報のない様な海賊船を襲う短絡脳では無い。目の前に見える海賊船の帆を確認し、手元の資料と参照させた。この資料とは、海軍から特別に送られる物と、一般に配達される新聞や雑誌の事である。

アト「海軍にコネがあると、これだから便利ね」

ティア「やっぱり、一般誌よりは細かく書いてるね」

アト「『ジョット海賊団』船長のジョットを中心に構成された芸術家肌の多い海賊団。ジョットは元カリスマ画家と呼ばれていて、彼の魅力に惹かれた者が集まり、海賊団として活動している」

ティア「懸賞金がついてるのは『彩色ジョット』の2800万ベリーと、『碎骨ボンドーネ』の1700万ベリーの2人だね」

アト「パツと見た感じ、大きくないから人数も知れた物ね」

ティア「行っちゃうか」

アト「ええ」

2人はジョット海賊団の船に向かって帆を進めた。向こうに気付かれない様に進む事は正直不可能なので、真つ正面から向かって行くが、全くの無策ではなく、大樽いっぱい海水を入れていく。

ティア「さ、入ったね」

アト「ええ、後は戦うだけね」

今回はあえてごり押しで行く。実は、2人にとっての初めての海賊との戦闘なので、下手な策など取らずに実力のみで戦うと決めた。

)))

下っ端「ジョット船長！ 前方から何やら怪しい船が来てます！」

ジョット「……分かった。今行くから少し待て、この絵を完成させてから……」

ここはジョット海賊団の船長室兼アトリエである。現在ジョットは目の前に積みさった宝を描いており、進行は3割と言った所で、とても完成させられるとは思えないので、下っ端も反論せざるを得ない。

下っ端「し、しかし、絵を描いてる時間等ありません！ もう、目の前まで近付いて来ております！」

ジヨット「分かった分かった……分かったからデカイ声を出すな。  
ったく、落ち着いて絵も描けないのか……。おい、ボンドーネも起  
こして連れて来い」

下っ端「分かりました」

~~~~~

鉄砲や大砲を撃つ音が聞こえて来る。面倒臭い等と口にしながら、
甲板に出てみると、船員が勇ましく叫んでいた。

船員1「撃て〜！」

船員2「玉持ってこ〜い！」

船員3「何してやがる、早く沈めちまえ〜！」

元気な船員の肩を掴んで一言質問をした。

ジョット「おい、問題の船って言うのはあの船か？」

船員4「はい」

目の前には少し小ぶりの船が海賊でも海軍でも無い帆を掲げ、悠々と近付いて来ているのが見えた。

ジョット「（ん〜、見たこと無い帆だな、賞金稼ぎか？ ま、海賊に近付いて来る船にろくなもんは無いか……戦うしか無いな。にしても、コイツ等の射撃センスはどうなってんだ、一発も掠りすらし

てないじゃないか……）」

ジョットが1人黙って考えていると、後方から筋肉質で体のデカイ男が話し掛けてきた。

「どうなってんだ、ジョット？」

ジョット「ん？ 起きたかボンドーネ、あれだ」

ジョットがジーニオス・ジェミニ二号を指差して見せる。

ボンドーネ「戦闘か？」

ジョット「ああ」

戦闘と聞いたボンドーネはニヤリと笑い、ジーニオス・ジェミニ号を見据えた。

くくく

ティア「どうしたら、あんな所に弾が飛ぶんだろう……」

アト「射撃センスは壊滅的ね……あの船」

大樽に海水を汲み終わり、ジョット海賊団ともほぼ隣接させた所で、相変わらずな射撃について2人で呑気に話していた。

うおおおおおおおおおおお！！！！

ジーニオス・ジェミニ二号に海賊下っ端達がなだれ込んできた。2
人は冷静に影と輝赤を構え、群れに突っ込んだ。

ティア「やっぱり、訓練とは違うな」

アト「皆本当に殺す気で来てるものね」

初めての实战でどこかシミジミと感想を漏らすティアにアトだが、
周りには斬られて動けなくなっ苦しいでいる海賊達が倒れている。
ざっと見て45〜55人程度

アト「……来なくなったわね」

ティア「僕達から乗り込んで見るか」

アト「そうね」

~~~~~

船員5「船長！ 全く歯が立ちません！」

ボンドーネ「ふん、情けない……」

ジョット「全くだ、だが、わざわざ無駄に船員を浪費したくはない  
……止まれ……！！ 俺達が行く……！」

船員は黙って言うことを聞き、甲板に戻った。

ボンドーネ「さあ、早く来い！」

ジヨット「つたく、戦闘のどこが楽しいんだか……」

船で2人が来るのを待つジヨットとボンドーネに、周りを囲む様に集まった船員達。かなり強い事は容易に想像出来る為、ジヨットにボンドーネも集中している。

~~~~~

ティア「うわゝ、凄いね」

アト「ええ……！ あいつ等ね、ジヨットとボンドーネって」

中央に立っている2人の男を見つけ、いよいよ賞金稼ぎらしくなってきた何て考えてた。

ティア「本当だ。それじゃ、僕がジヨットとやるよ」

アト「分かったわ」

こんな状態でも呑気な2人に呆れている者もいる。

ジヨット「ん、どんな巨漢かと思ったら餓鬼2人じゃないか……ま、見た目に反する事なんてこの海じゃ日常茶飯事だな」

ボンドーネ「ジヨット、俺はもう行くぜ！」

ジョット「ああ」

ジョットが言い終わる前に飛び出したボンドーネが、どこから持ち出したのか、大きな木槌を2人に振り下ろす。だが、2人とも軽く避けて、ティアは最後に『またね』と言ってジョットのもとへ歩いて言った。それを逃がさないと木槌を振り回そうとしたが、木槌を踏んで阻止された。その方向を見ると、木槌に足をかけたアトが立っていた。

ボンドーネ「ちっ、弱そうな方が来たな……」

やはり女ではなく男とやり合いたかったらしいボンドーネは少し残念そうな顔をする。

アト「あら、差別は良くないわよ?」

言って『クス』っと笑ったアトに、ボンドーネが腹を立て、木槌を無理矢理肩に構え、アトに向け、横に払った。が……

ボンドーネ「なっ!？」

ざわざわ

周りがざわつく。無理も無い、ボンドーネの体の2分の1あるかと疑う程に細身の女の子が木槌を片手で軽く止めていたのだ。そりゃ、ガープに鍛えられたのだ、女の子と言えど、馬鹿見たいな力についてしまった。

アト「こんな物かしら?」

ボンドーネ「くそ！ うおおおおお！！」

逆上したボンドーネが木槌を更に払おうとしたが、それが叶う事は無かった。

ズシン

アト「うふふ、ただの棒になっちゃったわね」

輝赤でボンドーネの木槌を切ってしまったのだ。ボンドーネは変わり果てた木槌を見て「勝てない」と頭を一瞬よぎるが、それを振り切り、棒を投げ捨てると、叫んでアトに向け巨大な拳で殴り掛かった。

「諦めなさい」ボンドーネが最後に見た物はこう言って微笑んだアトだった。

どさっ

ボンドーネが倒れた。アトが拳を軽く避け、ボンドーネの後方に回ると、手刀で首を叩き、気絶させたのだ。周りの船員は啞然として固まっている。かなり強いと思っていたボンドーネが軽くあやされ倒されたのだ、衝撃は半端な物では無いだろう。

アト「さ、縄持ってこなきゃ」

いっ言ってアトは船へ戻って行った。

~~~~~

ジョット「（ボンドーネが餓鬼にあんなにも簡単にやられるのか！  
？ まずい、俺に向かって来るって事はあの女よりもこの男の方が  
強い可能性が高い……）」

ティア「アト〜！ こっちの分もお願い！」

アト「分かったわ〜！」

すでに自分達の船へ移動していたアトだったが、すぐ隣だった為  
に簡単に声は届いており、返事はすぐに聞こえて来た。

目の前で自分を縛る縄の話をされ、逆上しそうになりながらも、  
冷静を保っているジョットだが、それを実現させているのは、アト  
とボンドーネの戦闘を見て、自分に本当の危機が迫っている事を察  
したからだ。

ジョット「（まずい、俺はこの餓鬼共に勝てるのか？ いや、勝たなきゃ終わりだ……）」

腹を決めた様で、先程の迷いきった目ではなく、キッチリ据わった目でティアを睨む。ジョットは着ているローブの中から武器であるキャンパスと筆を取り出し、構えた。

ジョットは何も言わず、ティアに向け、キャンパスに沢山蓄えられた色の内の紫色を筆につけ、飛ばしてきた。ティアは何でも無いと、簡単に避けてジョットに突っ込んだが、後ろから凄いい音が聞こえてきた。

ジュワアア

ティア「……！？ 毒か！？」

ジヨット「そう。俺が『彩色ジヨット』何て呼ばれている由縁は、このキャンパスに蓄えた色とりどりの猛毒を使い、相手を毒殺した頃には、鮮やかに彩られている事からだ」

ティア「へー、危なかった……」

ジヨット「簡単に避けたやつが嘘をつくな」

ティア「ばれた？」

このふざけたティアにジヨットは更に、鮮やかな毒を次々と投げ込むが、ことごとく避け続けられる。

ジヨット「（ダメだ、当たらない……なら！）」

ジョットは筆をただ振り回し、猛毒の水滴をティアに飛び散らした。周りの船員数名にもこの猛毒が当たり、苦しんでいるが、ジョットは海賊団自体の危機に数名の犠牲も止む無しと諦めて、筆を振り回し続ける。

これを見たティアは、簡単に避ける事は出来るが、目的は2人のみ、余計な犠牲は出すことは無いという考えであるから、すぐにジョットの後ろに回り込み、手刀で気絶させた。

ジョット「（これまでか。せめて、絵を完成させたかった……）」

~~~~~

カツ カツ

アトが縄を持って海賊船に戻って来た足音だ。アトが来る少し前

にジョットは気絶しており、ティアはその傍らで座ってアトを待っていた。

アト「……お疲れ様」

ティア「ありがとう」

アトがティアに縄を渡して言った。ティアは即座にジョットをきつく縛り、ボンドーネと一緒に自分達の船へ運び込む時、残りの海賊達に言った。

ティア「それじゃ、バイバイ」

残された者達は、何が起こったのか分からない様な顔でたた立ち尽くしていた。だが、1つだけ確信した事がある。ジョット海賊団はもう壊滅したのだという事だ

〜

その後は、ジョットの手首についていたログポースの指し示す方へ帆を進め、3日かけて到着した島の街で2人を差し出し、賞金を手にした。いざ、目の前に詰まされると、4500万は凄い量なんだと思う。重いのだ、こんなに重いお金を持つのは2人とも初めてだったし、持つこともあると思わなかった。

ティア「指名手配で簡単に2800万ベリーとか書いてるけど、凄い量だね……」

アト「ええ、これでしたらくはお金を気にしないで航海出来るわ。この街で少し買物したらすぐにまた双子岬を目指しましょ」

ティア「そうだね」

2人はこの街で、使い道に困るほどの大金で服や食糧を買い、夜中にはホテルで一泊し、翌日の昼には双子岬を目指し出港していた

7話 ジョット（後書き）

どうしても納得出来る文章が書けない（- - ;）

なんか変（- - ;）

（- - ;）
（- - ;）
（- - ;）

8話 双子岬（前書き）

今回は普段と書き方を少しだけ変えました。
気付かない程度かもしれませんがね

8話 双子岬

アト「何かしらあれ……」

ティア「……鯨？」

アト「頭に海賊のマークが描いてあるけど、凄く下手ね……」

ティア「麦藁帽子を被ってるのかな……？」

目の前には超がつく程巨大な鯨が海面から頭を出していた。

アト「30……35mくらいかしら？」

ティア「あんな大きい鯨いるんだね……」

アト「食用にしたらどのくらいの期間持つのかしら……」

ティア「年単位かかるね……あれは」

軽くブラッくなユーモアが出たが、気を取り直して説明をば！
たった今双子岬に到着した2人の目の前にはレッドラインの高い壁
があったのだが、いきなり黒い物が海から立ち上るし、それには海
賊のマークが入ってるしで頭のなかは「????????????????」
こんな状態である。

ティア「とりあえず、ここにはクロツカスさんって人がいるはず何
けど……あの家かな？」

アト「行ってみましょ」

コンコン

ティア「すいませ〜ん！ クロツカスさん！ 居ますか〜！」

……

アト「いない見たいね……」

ティア「しょうがないね、とりあえずログがたまるまではここでゆ
っくりしていこうよ」

アト「そうね」

~~~~~

ティア「たまっちゃった……どうする？」

アト「クロツカスさんって人にあってみたかったけど、仕方ないわね……行きましようか」

ティア「まず、生きてるのかな……？」

アト「今はあの鯨の中とかね」

「としても飛び出た軽いブラックなユーモアだが、あながち間違っちゃいない所が恐ろしい物だ。」

ティア「うん、しょうがないね、出発しようか……」

アト「ええ、久しぶりに陸でゆっくり出来たからよしとするわ……」

ティア「……ん!？」

2人が船へ戻ろうと後ろに振り向くと、頭に何やら花びらの様な物を数枚つけた老人が立っていた。

ティア「……………」

アト「……………」

「……………」

パサッ

何と、目が合い数秒間見続けていたのに、近くにあった椅子に腰掛け新聞を開いてしまったのだ。

ティア「……………何だったんだ？」

アト「……………あの、灯台守のクロツカスさんって方を知りませんか？」

「……………人に質問する時はまず自分から名乗るのが礼儀ってものじゃないのか？」



アト「え、ええ……そうね。ごめんなさい」

「私の名はクロツカス、双子岬の灯台守をやっている、歳は71才、双子座のAB型だ」

ティア「……………」

アト「（言ってる事とやっている事がめちゃくちゃね……………」

クロツカス「それで、私に何のようだ？」

アト「いえ、大した用は無くて、ただ海賊王の船医だったという貴方であって見たかっただけなんです」

クロツカス「!? その話をどこで!?」

ティア「僕達の戦いの師はガープさんとミホークさんです。僕達が船出したいとミホークさんに言った時に、出発点は双子岬が良いと、そしてそこにはクロッカスさんが居るって教えてくれたんです」

クロッカス「……ふむ。そうか、ガープが師匠か、ふんっ、懐かしいものだ。と言うことは、お前達もグランドラインを航海するのか？」

アト「ええ。ただ、もうかなり航海してますけどね、マリンフォードからここまでやって来たんです」

クロッカス「マリンフォードからだ！？ たった2人でか！？」

ティア「そうです。やっぱりきつかったけど、何とか到着出来ました」

クロッカス「（めちゃくちゃだ……普通はきついで済まされるはずがない、2人でこの海を渡るなんて。途中で特殊な気候にやられるか海賊にやられるかのどちらかだ……ミホークとガープの弟子か、

随分な才能だ」

アト「そういえば、あの鯨はいつもここに居るんですか？」

まだ少し驚きが抜けていなかったが、アトの質問で我に帰り、返答する

クロツカス「ああ、あのクジラは『アイランドクジラ』ウエストブルーにのみ生息する世界一デカイ種のクジラだ、名前はラブーン」

ティア「へえ、ラブーンって言うんだ。あの、頭に描いてある麦藁帽子を被った海賊のマークは一体何なんですか？」

クロツカス「ああ、少し前にやって来た海賊達が描いていったのだ。ラブーンの命の恩人達だ」

アト「ラブーンに何かあったんですか？」

クロツカス「先程、ラブーンはウエストブルーにのみ生息する種だと言ったな」

ティア「はい」

クロツカス「ある日、私がいつもの様に灯台守をしていると、気のいい海賊どもがリヴァース・マウンテンを下ってきた。そしつ、その船を追う様に小さなクジラが一頭、それがラブーンだ」

クロツカス「ウエストブルーではラブーンと共に旅をしていたらしいが、今回の航海は危険極まるとウエストブルーに置いてきたはずだった」

クロツカス「本来アイランドクジラは仲間と群れをなして泳ぐ動物だが、ラブーンにとっての仲間はその仲間達だったのだ。船は故障して岬に数ヶ月停泊していたから、私も彼らとは随分仲良くなっていた」

クロツカス「そして、出発の日、私は船長にこう頼まれた『こいつをここで2・3年預かっててくれないか。必ず世界を1周しここへ戻る』と。ラブーンもそれを理解し、私達は待った。この場所ですとな」

アト「でも、あの大きさだと……」

クロツカス「そう、彼らは逃げ出したのだ、このグランドラインから……もう50年も前の話しになる」

ティア「可愛そうな話だわ……」

アト「ラブーンは知ってるんですか？」

クロツカス「言ったさ、包み隠さず全部な……だが聞かん。それ以来ラブーンはリヴァース・マウンテンに向かって吠えはじめ、レツドラインに自分の体をぶつけ始めたのだ。まるで、今にも彼らはあの壁の向こうから帰って来るんだと主張するかの様に……その後も

何度も海賊達のことを伝えようとしたが、ラブーンは事実を決して受け入れようとしない」

アト「あの頭の傷はその……」

クロツカス「そう、あんな大きな傷を作り続ければ間違い無くラブーンは死ぬ所だった」

ティア「そして、ラブーンの恩人がやって来たんですね」

クロツカス「そう。ラブーンは彼らに裏切られ、待つ意味を無くした。ラブーンにとって最も恐い事は待つ意味を無くす事、私の言葉を拒み続ける理由だ。先日やって来た恩人……海賊達の船長は何とも不思議な空気をもつ男だった。いきなりラブーンの頭に自分達の海賊船のメインマストを突き刺したのだ」

アト「えっ!？」

ティア「それじゃ、悪化させただけじゃ!？」

クロツカス「その後だ、頭にメインマストを刺されて怒ったラブーンが彼を押し潰してしまったのだが、彼は反撃し、ラブーンといきなりケンカを始めてしまったが、途中で彼が言った言葉がラブーンを救ったのだ」

アト「一体何と？」

クロツカス「引き分けだ!! 俺は強いだろうが!! おれとお前の勝負はまだついてないから、おれ達はまた戦わなきゃならないんだ!! お前の仲間は死んだけど、おれはお前のライバルだ。おれ達がグランドラインを一周したら、またお前に会いに来るから、したらまたケンカしよう!!」

アト「素敵な話ね……」

クロツカス「その後、ラブーンの頭に彼らの海賊旗のマークを描き『戦いの約束』と名付け、頭をぶつけてマークを消さない様にと約束をしてくれた。彼らがラブーンに再び待つ意味を与えてくれたの

だ」

ティア「あの海賊旗が……」

クロツカス「その後はピタリとリヴァース・マウンテンに向かって叫ぶ事も、レッドラインに頭をぶつける事も止めた。しかし、癖になっちゃったんだろう、ああやって頭を出して直立する事は今も続けている」

アト「その海賊達の名前は一体何て言うんですか？」

クロツカス「麦藁の一味、船長の名はルフィと言った」

ティア「麦藁の一味、知ってるよ。初頭金額が異例の3000万ベリで話題の海賊だ」

アト「ふふ、世間のお騒がせ者は悪いのばかりでも無いのね」



クロツカス「彼らは、ただ純粹に海賊王を目指すだけ、一般人に害は与えはしないだろう」

アト「ふふ、面白いわね」

~~~~~

その後、ティアとアトはラブーンとしばらく接した後に、クロツカスの家に泊まり、ここからグランドラインを進むにあたって7つの航路を選ぶことが出来る事、麦藁の一味がどの航路を選んだか、最終的にたどり着く島がラフテルである事等の説明を聞き、一夜を過ごした。

~~~~~

クロツカス「もう、出るのか？」

アト「ええ、久しぶりに人とお話が出来て楽しかったわ、ありがとうございますね、クロツカスさん」

ティア「いろいろ説明してくれてありがとうございました」

クロツカス「いや、私も楽しかった。それより、ログポースの進路はどこにしたのだ？」

アト「最初はウィスキーピークを指してたけど、フリッシュ島に決めたわ」

クロツカス「麦藁の一味とは違う航路に行くのか」

ティア「はい、彼らの冒険は新聞で楽しみにしておきます」

クロツカス「そうか、なら行ってこい」

アト「ええ、またいつか会いましょう」

ティア「それでは」

クロツカスに手を振り、フリッシュ島目指して双子岬を出発した  
2人の背中にラブーンの声が最後に聞こえた。

アト「ふふ、かわいいクジラだったわね」

ティア「また、クロツカスさんとラブーンに会いに来たいね」

## 8話 双子岬（後書き）

変化に気付く方はいらっしゃるでしょうか…  
（ - - ; ）

フリッシュ島は僕のオリジナルな島です

## 9話 フリッシュ島（前書き）

記念！

PV1万HITです！！

ユニーク2000HITです！！

いや、まさかこんなに早く1万行けると思いませんでした！

何か企画やってみたいとも思っていますが、残念ながらそれほどの知名度が無いのが現状（-”-；）

いつか人気になればにします！

皆さん、本当にこんな拙い文章を読んでくれてありがとうございます！

後、今回から一気にオリジナル要素が強くなります、嫌いな人は嫌いかも……（-”-；）

## 9話 フリッシュ島

ティア「ここがフリッシュ島か」

アト「大きい木ね」

2人が双子岬を出発して5日経過したお昼頃の事、たった今フリッシュ島と思われる島に着陸した所で、辺りをキョロキョロと見渡している。

島の1/3くらいの面積を日陰にしてしまう程に枝が広がった木が立っている。その木で出来た日陰の部分と日向のちょうど境に石の堀が建てられており、内側に王宮が、外側に一般人の生活区とで分けられている。生活区の町並みは、石造りの建物が並び、噴水が至る所に設置していて、常に水を噴出している。

ティア「凄く綺麗な町並みは良いんだけど、暑いな……」

アト「ええ、少し体調が変だわ……暑くて倒れそう」

ティア「見て、アト……」

アト「うそ……」

ティアが視線の先にある広場に建っていた大きな体温計に指を指し、アトへ見るよう促す。

アト「61・2度!？」

ティア「あちこちの噴水が常に水を出してる理由が分かった気がするよ……」

アト「何で皆普通にしていられるのかしら……」

「随分参つとる見たいやな？」

「お前達今来たばかりだな？」

すると、2人の同い年ぐらいの男達がティアとアトに話し掛けて来た。

アト「貴方達は？」

「俺はプルチだ！」



「俺はウィンフリー！　島長の息子だ！」

ティア「僕はティア、こっちはアト、双子なんだ。よろしくね」

アトも挨拶がわりに軽く微笑みかける。

プルチ「ほ……随分とルックスのええ双子もおったもんや」

ウィンフリー「本当だな……羨ましい！」

ティア「まあね」

プルチ・ウィンフリー「アッサリ認めた！？」

アト「だって、認めなきゃ皆に失礼でしょ？ 周りの人より少しは容姿が良いなんて自覚してるわ、こういう時の謙遜は嫌われるものよ?。」

プルチ「……その通りですね」

ウィンフリー「……もっともです……」

アト「ふふ、貴方達かわいいわね」

プルチ「か、かわ……」

ウィンフリー「いい……?。」

ティア「2人と居るとたのしそうだね」

アト「そうね、そういえば2人は何で声を掛けてくれたの？」

ブルチ「せやった！」

ウィンフリー「いやな、この島は馴れない奴がフラフラしてるとすぐに熱中症で倒れちまうんだ。そこで、金はあるか？」

ティア「あるよ、正直余ってるぐらいに……」

ブルチ「なら話は早いわ、服を変え！」

アト「服？」

ウィンフリー「ああ、この島は夏島で、しかも今は夏だ。普通の服なんか着てらんないぜ？　まあ、冬でも40度行くけど……」

ティア「何が違うの？」

プルチ「冷水草って知つとるか？」

アト「いえ、聞いたこと無いわ」

プルチ「冷水草ってのは、この島の特産物なんやけども、あのでっかい木あるだろ？」

ティア「うん」

プルチ「モンキーポッドって言うんだが、あの木を囲む様に湖が広がっていて、そこにしか冷水草は生えないんだ。その冷水草の成分は何をしても10度以上に上がらないって変わった性質を持つとつて、その冷水草を混ぜた水もまたその性質を持つんや」

アト「へえ、面白い草ね……」

ウィンフリー「それで、これ見て？」

ウィンフリーがジッパーをおろし、服の内側を見せて来た。

ティア「服の中を水が通ってる」

ウィンフリー「そう、服の内側に冷水草を混ぜた水を通わせて、俺達は何とか暑さに耐えてるってわけだ」

アト「なるほど、それで皆着てるものが暑苦しくても関係無いのね？」

ブルチ「せや、むしろ変に肌なんてだしたら日焼けするわ、病気になるわで大変なんや」

ティア「それで、あの木陰を全て王宮がしめてるの?」

プルチ「……ああ」

ウィンフリー「………」

アト「……ごめんなさい、何かマズイ事言っちゃったかしら……」

プルチ「い、いや! 気にせんでくれ、あんたは悪く無い! こっちの話や……」

ウィンフリー「ってか悪い! 暑いよな、服屋紹介するからついて来いよ!」

アト「え、ええ」

ティア「よろしくね……」

〵〵〵

プルチ「ここや!」

アト「へえ、中々大きいわね」

ウィンフリー「この辺では1番大きいからな、大概の物は揃ってるぜ!」

ティア「それじゃ、行こうかアト」

アト「ええ」

プルチ「……………」

ウィンフリー「……………」

プルチ「あいつらホンマに双子か？ 手え繋いで行きやがった」

ウィンフリー「何か、限りなく夫婦に近い恋人って感じだね……羨ましい！」

プルチ「うわ、服の選びっこ何かやつとる……段々腹たってきたわ」

ウィンフリー「嫉妬は醜いぞプルチ……」

プルチ「やかまし！」

ウィンフリー「……？ 2人共選り終わった見たいだね。手を振っ



てる」

プルチ「行くか」

~~~~~

アト「私これにしたわ」

ウィンフリー「うん、凄く似合ってるよ」

ティア「僕はどう？」

プルチ「お前の服のセンスって可愛いな……女の子か？」

ティア「違うよ！　ただ、たまに言われる……」

ウィンフリー「うん、着てる服はメンズなのに何で可愛くなるんだろ、どっかに可愛い要素があるんだろうな……」

プルチ「まあ、ええか。会計行こつや」

~~~~~

店員「え、36000ベリーが御一つ、24000ベリーが御一つ、15000ベリーが御一つ、29000ベリーが御一つ、26000ベリーが御一つ、18000ベリーが御一つで合計296000ベリーでございます」

アト「何で……」

プルチ「何でや……」

アト「何で296000ベリーもするの？ 合計は148000ベリーのはずよ？」

プルチ「（何でその額を躊躇い無く会計に持っていけたんや……）」

店員「え、もしかしてこの島にいらしたばかりでしょうか？」

アト「ええ、さつき着いたばかりよ」

店員「なるほど、そうでしたか……実は、この島の税率なんです、100%なのです」

プルチ「……………」



プルチ「（賞金稼ぎ……）」

アト「ただいま、さあ、出ましょ？」

プルチ「……せやな」

〵〵〵

ティア「暑く無い……」

アト「この服気持ちいいわ……」

ウィンフリー「だろ！」

アト「にしても、税率が100%って高すぎないかしら？」

ティア「そうだね、初めて聞いたよ100%なんて……」

ウィンフリー「ああ……皆腹減らないか！」

アト「そうね、気付けばもう昼なのね……どこか紹介してくれるのかしら？」

ウィンフリー「ああ！　うまい店紹介してや

男「海賊だ……！！　港に海賊が出た……！！」

プルチ「またか！？」

アト「また？」

ウィンフリー「ここはグランドラインに入って最初にたどり着く事になる島の1つだから海賊が来るのは日常茶飯事なのさ……」

ティア「僕達も行こう！」

アト「ええ！」

〃  
〃  
〃

バーン

ティア「銃声！？ 海賊はどこだ！？」

ウィンフリー「あっちだ！」

アト「あれは……『白眼のジューム』<sup>はくがん</sup>」

プルチ「白眼のジューム？ 強いんか？」

ティア「懸賞金5800万ベリー、残虐で有名な海賊だよ、殺しに躊躇う事は無い！ 急がなきゃ！ 女の子が狙われてる！」

ウィンフリー「え！？ おい！ 行っちゃった、大丈夫なのか！？」

プルチ「5800万ベリー……」

~~~~~


ジューム「何だお前等は……邪魔すんなら殺すぞ？ こいつがおれの事じろじろ見てきて腹立つから消す所だ、どけ！」

女の子「……………」

目尻に涙を溜めて恐怖で動けない女の子の前に2人が踊り出たのだ

アト「どけて見たら？ か弱い女の子1人退けるくらい簡単でしょ？」

ジューム「何！？ お前おれが誰だか分かって言ってるんだろぅな！？」

ティア「分かってるよ？ 白目しめのジュームでしょ？」

ザワザワ

後ろの海賊達も何やら騒いでいる。

ウィンフリー「おいおい！ 大丈夫なんだろうな！？」

ジューム「てめえ……もう許さねえ！ 死ね！」

ティアとアトの挑発にまんまと引つ掛かりジュームが持っていたサーベルでティアに斬り掛かって来た。

ティア「……鉄塊」

キーン

ジューム「な、何！？　サーベルが折れた！？　お前、悪魔の実の能力者か！？」

ティア「違うよ？」

ブルチ「な、何やあれ……！？」

ジューム「じゃあ、どうしたってんだ！」

ティア「カんだ」

ジューム「ふ、ふざけんなー！！」

すると、ジュームの右腕がバズーカになり、ティアに向けて狙いを定めた。

ジューム「おれは『バズバズの実』を食べたバズーカ人間！ 体中をバズーカに出来る！ これで死ねや〜！」

ティア「わお……」

ヒュッ

ジュームがティア目掛けバズーカを放とうとした瞬間何かがジュームのもとへ凄い早さで接近した

アト「酷いわね……私の事は忘れちゃったの？」

『剃』で近付いたアトが右腕のバズーカをジュームの顔に方向転換させた

ジューム「や、やめろ！？ それは……」

ドカーン！！

ティア「ジャストミート」

周りの見物客達が面白いくらいに固まっているのが分かる。 पुलチにウインフリーも啞然として口をパクパクとさせてはいるが、声になっていない

アト「うふふ、もう大丈夫よ？ ママの所へ帰りなさい？」

女の子「あ……ありがとう！ バイバイ、お兄ちゃん！ お姉ちゃん！」

ジュームに怯えていた女の子だったが、最後には手を振って元気よく駆けて行った

ティア「良かった、銃声が聞こえた時は間に合わなかったと思ったけど……」

アト「あれは威嚇射撃だった見たいね……」

ジューム「う、うう……くそっ、こんな所で捕まってたまるか！」

自分のバズーカを諸に顔面に直撃し、倒れていたジュームだったが、執念深いのだろう、捕まりたく無い一心で再び起き上がった

ティア「しぶといなあ〜」

アト「縄にかけてもバズーカ打てるからね、気絶させるしかないわね……」

ティアが気絶させようとジュームに近づくと、何とジュームが体中をバズーカにして、周りの人達を無差別に襲おうとした

ジューム「うおおおおおおお！！！！！！」

ティア「マズイ！」

ティアがジュームを気絶させる為に首を叩いた瞬間……

バーン

ティア「え……？」

アト「……………」

ウィンフリー「……………」

プルチ「……………」

プルチとウィンフリーが銃でジュームをいぬいていた……

9話 フリッシュ島（後書き）

はい、2人の初『六式』です！

『白眼のジューム』『グランドラインの入口で5800万ベリー』『最弱の海イーストブルー』で3000万が出て来るので、どこか違う海ならこのくらい出てきてもおかしくないと思います。

まあ、この程度ならまだまだ余裕ですね……

（^ー^；）

正直後悔してます……強くし過ぎた（笑）

10話 プルチ（前書き）

やはり、完全オリジナルの島とかやってると話のつじつまがあって
いるかとか、色々と恐くなりますね……（-”-；）

心臓に悪い……

10話 プルチ

アト「……………」

ティア「……………」

プルチ「……………」

ウィンフリー「……………」

……………」

プルチ・ウィンフリー「……………」怖かった……!」

プルチ「うわ、人撃っちゃった！」

ウィンフリー「何か、何か気持ち悪い！ うわ、何か気持ち悪い！」

ティア「（せっかく少しカッコイイかもって思ったのに、勿体ない……）」

アト「クスクス……」

その後、急所は外れていたらしい、ティアとアトがジュームは生きている事を確認し、プルチ・ウィンフリーと共に懸賞金を受け取りに行った。

ティア「ほら、服のお金なんてはした金でしょ？」

ウィンフリー「本当に良いのか？ ジュームの懸賞金は山分けで…」

アト「良いも何も、とどめは貴方達でしょ？」

プルチ「でも、これは……1450万もあるで？」

ティア「僕達の船には1億以上あるよ」

プルチ「……………」

ウィンフリー「……………」

プルチ・ウィンフリー「……………」頂きます」

ティア「それによろしい！」

アト「ふふ……やっぱり可愛いわ」

ウィンフリー「そうだ、家に来ねえ？ 宿代浮くぜ？」

ティア「いいの？」

プルチ「全然Okや！」

ウィンフリー「何でお前が言っんだよ！ まあ、気にすんな、俺達だって暇しないし」

プルチ「おれも泊まってええか？」

ウィンフリー「ああ、全然気にすんな、ダメ！」

プルチ「分かった。行くわ」

ウィンフリー「……あいよ」

~~~~~

アト「大きい家ねえ」

ウィンフリー「言っただろ？ おれの親父はこの島の長だった」

ティア「いや、思ったよりも大きいから少し驚いちゃったな……」



プルチ「ハハハ、まあええ、入れ入れ！」

ウィンフリー「だから何でお前が言っただよ！　まあ、言っ通りだ、入れ入れ！」

アト「ふふ、お邪魔するわね」

ティア「お邪魔します」

~~~~~

ウィンフリー「親父！　帰ったぞ！」

親父「おお、帰ったか、お帰り。ん？　今日の客は見慣れないな、新しい友達かな？」

ティア「始めまして、ティアです」

アト「アトです。今日この島に着いた時に2人と知り合いました」

親父「なるほど、ようこそフリッツシュ島へ、あまり大きくはないが、とても良い島だよ。是非楽しんでくれ」

ティア「はい、今日はお世話になります」

親父「よし、立ち話もなんだ、入ってくれ」

アト「はい、お邪魔します」

~~~~~

親父「そついえば、自己紹介がまだだったね、私はセドン、フリッ  
シュ島の島長であり、自警団の団長だ」

ティア「自警団？ この島は軍隊を持たないのですか？」

セドン「……………」

ウィンフリー「……………」

プルチ「……………」

アト「（王国が絡むとやけに口を詰まらせるわね、何かしら……………」

セドン「……………軍隊は持っている。だが、一般人を守る為に動いてく

れないのだ、故に自警団が必要になってくる」

ティア「国王を守る為だけに……ですか？」

セドン「そう、だが、もう1つある。急に国王がモンキーポッドの頂上を目指して軍隊の半分の活動をそちらに集中させたのだ……」

アト「何故？」

セドン「それが分からないのだ、いきなり、何の前触れも無しに……」

ティア「何かあるんでしょうか……？」

セドン「分からないが、モンキーポッドの頂上を目指し初めてからは沢山の死者が出ている……」

アト「ただの木登りがそんなに危険なのかしら？」

セドン「確かに、いかにモンキーポッドが大きいと言えどただの木登りに過ぎない……が、モンキーポッドには『守護鳥ゲニウス』がいるのだ」

ティア「守護鳥？」

セドン「普段は大人しくモンキーポッドの中で生活しているが、モンキーポッドを登る者が現れると必ずゲニウスは襲って来るのだ。まるでモンキーポッドの頂上に誰も近づけないようにしているかの様に、何かを守るかの様に」

ティア「雛がいるのでは？」

セドン「守護鳥に雛は存在しない……500年前からあの固体しか観測されていないのだ」

アト「そんなに長い間生き続けているのですか!？」

セドン「私も小さい頃からゲニウスを見ているが、何も変化が見られない。それどころか私の祖父も同じ事を言っていたのだ、『何も変わらない』と」

ティア「しかし、単なる縄張り意識という事は考えられないのですか？」

セドン「その可能性は低いと思う。ゲニウスも時折街に降りてきて市民と接しているのだ」

アト「え……?」

セドン「500年以上もこの島で生活しているのだ。ゲニウス程に理性的な生物なら人間と触れ合う様になっても何も不思議ではない」

アト「誰も怯えないのですか？」

セドン「小さい頃からいるからな、気付けば生活に盛り込まれていたよ」

ティア「そうですね、そんなゲニウスが無駄に人を襲う事は考えにくい……」

アト「でも、そうなると一番に不可解なのは国王ね、そこまでしても欲しい物がモンキーポッドにあるのかしら……」

セドン「分からない。だが、いつまでもこんな好き勝手はさせられない……。君達、服を買った時の値段に驚いただろう？ 税率100%というのも、国王がモンキーポッドを目指してからいきなり跳ね上がったものだ。国王は集まった金の大半をモンキーポッドに登る為の軍資金として使用しているだろう。更に、いくら軍資金が入ろうと人材には限りがある。そこで、国王は男女問わずに徴兵制を開始させた」

アト「酷い事をするわ……」

セドン「国王も昔はまだマシだった。良い国王とは言えなかったかもしれないが、人を無駄に殺す事まではしなかった」

ティア「国王を止めようと動いた事は無いのですか？」

セドン「1度だけある。国王を打ち取ろうと自警団を集結させて立ち向かったのだが、国王は身を守る為に軍隊をつけるだけでは飽きたらず、選りすぐりの傭兵を3人雇っていたのだ。彼らは3人共悪魔の実の能力者を身につけていて全く歯が立たなかった。結局、私達は尊い犠牲を出したただだったのだ……」

アト「それで今は黙って従うしか出来い……」

セドン「不甲斐無くてしょうがない……。自警団を名乗っておきながら一般人の平和な生活も守れやしないのだ……」

ティア「……いや、悪魔の実を相手に生身の人間が相手するのは無



理があります。仕方の無いことですよ」

セドン「ならば、ずっと国王の身勝手を無視し、兵に連れていかれて死ぬのを待っていると言っのか！！……すまない、驚かせたね、気にしないでくれ」

ウィンフリー「……………」

プルチ「……………」

ティアとアトが目を合わせ、少しの間だけ考えていたようだが、すぐに結論は出た様で、すぐに微笑みあい、セドンに声をかける

ティア「今日の港での海賊騒ぎを聞きましたか？」

セドン「え？ ああ、聞いたも何も私が向かうはずだったのだ。それが、私が到着した頃には既に、被害者無しで解決していたんだ。」

アト「あの騒ぎを解決したのは私達です」

セドン「何！？ 信じられない！ 白眼のジュームを子供2人で捕まえただと！？」

ティア「信じてもらえないのは分かっていました。証拠をお見せします。プルチ・ウィンフリー、お金を」

ウィンフリー「あ、ああ！」

プルチ「分かった！」

ドサッ ドサッ

セドン「…これは……」

アト「5800万ベリー。白眼のジュームの懸賞金です」

セドンは啞然として声を出せない。お金が本物かどうかを確認するために1つ1つパラパラと中身を見ている

セドン「（信じられない、5800万ベリーの賞金首を倒したというのか……しかも、服に争った様な後が一切見当たらない……それ程に早く、それ程一方的に打ち取ったのか！？……彼らが味方についてくれればあの国王を倒せる可能性が……。いや、無関係な彼らを醜い争いに巻き込む訳にはいかない。それに、彼らはまだ年端もいかない子供なのだ……）」

ティア「お手伝いしましょう！」

セドン「……え？」

アト「止めても無駄ですよ？ 私達だけで行っちゃいますから」

セドン「し、しかし！」

ウィンフリー「親父！ …… プルチ、良いのか？」

プルチ「かまわん。おれだつてずっと我慢してきた。あいつは今止めるしかない、最後のチャンスや……」

ウィンフリー「プルチ……。分かった！ おれも戦うぞ親父！」

セドン「ウィンフリー！？」

ウィンフリー「おれだつてずっと見てきたんだ！ 1人で辛そうにしてるプルチを、1人で背負う必要の無い責任を感じて生きて来た

んだ！ おれだって戦いたい。行かせてくれよ！」

セドン「ウィンフリー……分かった！ お前もいつまでも子供じゃないよな……一緒に戦うぞ！ ただ、約束してくれ。マズイと思ったら絶対に逃げるんだ」

ウィンフリー「分かった」

ティア「あの……プルチが何かあるんですか？」

ウィンフリー「本当なら最後まで言わないつもりだったんだけどな……良いよな？」

プルチ「ああ……」

ウィンフリー「プルチは国王の息子、つまりは王子だ……」

ティア「え？」

アト「王子……。国王の話が絡む度に様子が変わるのさそういう事だったのね……」

プルチ「悪いな、かくしてて……。あまり話したい事じゃなくてな……」

ティア「いや、隠したい事なんて普通はあるもんだよ。気にしないで」

プルチ「サンキューな」

アト「それで、貴方も参加するの？」

プルチ「もちろんや！ あいつは絶対におれが止める」

ティア「分かった」

セドン「君達には本当に感謝する！これから、自警団の団員を集めて作戦会議を始める。準備にも時間がかかるだろう。作戦決行までに最低でも5日は掛かると思う。それまで君達は体を休めて準備をしていてくれ！」

ティア「分かりました」

アト「ええ」

ウィンフリー「分かった！」

プルチ「……………」

その後は、意外にも綺麗に片付いたウィンフリーの部屋でこれらの事を話し合い、そのまま深い眠りについた

~~~~~

「依頼していた物を持ってきたぞ……」

「良くやった。これをあいつに食べさせれば無駄に金を使う必要は無くなる……。くくく」

「親とは思えない発言だな……」

「なに、あいつなんて利用するただけに産んだだけ、愛情何て微塵も感じないな……」

「ふんっ、……あの女は殺すのか？」

「いや、まだ利用価値がある。殺すにはまだ惜しいのでな、今は牢屋で黙らせている……」

「まあ良い。これからもごひいきを頼むぜ……」

「ああ、あてにしているぞ……くくく」

10話 プルチ（後書き）

オリジナルだと本当に自信を持ってない……いや、今までだって自信があつた訳では……いや、でも皆さんに自信の無いものを提供していたという訳では……いや、でも……ごめんなさい

11話 トロス オブラ（前書き）

人生マツタリ……これが1番やね（
）

11話 トロス オブラ

ティア「にしてもさ、何で王子がこんな自由に出来るの？」

プルチ「あ？ ああ、いくら王子ってたって、親父が放任主義やからな……。まあ、おれの事何かどうでも良いってのが本音やろっけどな」

アト「それでも、勝手に友達の家泊まっても大丈夫なの？」

ウィンフリー「こいつ、前は一週間ずっと泊まって行ったぜ？」

ティア「凄いね……」

プルチ「ま、流石に王宮の中では軽く騒ぎになってたけどな……」

アト「街の皆は貴方が王子って知ってるの？」

プルチ「ああ、皆知つとるで？」

ティア「それにしても皆フレンドリーだね」

プルチ「おれが皆に言つとるからな、『普通の庶民として接しろ』
つて。何か苦手なんや。敬れる感じがどうも……。まあ、皆も最初
は躊躇いもあったみたいやけど、今はもう馴れたもんで、街にいる
ときのおれはただの庶民と何ら変わらんで？」

アト「ふふ、貴方らしいわね」

前回でウィンフリーの家に泊まり、現在は起床して身の周りの準備を終え、ウィンフリーの部屋でマッタリと話をしていた。

ティア「でも、本当に良いの？ お父さんと戦う何て……？」

プルチ「ああ、全然ええよ？」

ティア「（軽いな……）」

プルチ「親父ってたって、一緒にいたのは食事ぐらいやしな……。街の皆様と一緒にいた時間は長いで？」

ウィンフリー「そうだな、言われてみると、お前ってほとんど街にいるな……」

プルチ「だから正直、親父よりも街の皆様がおれにとっては大事なんだ」

ティア「そっか……。そういえば、プルチって何で関西弁が中途半端に混ざってるの？」

プルチ「話の方向が急に変わったな……。それはな、一時期おれが漫才にはまっとって、ウィンフリーとコンビ組んどった時の癖がまだ残っとるだけや」

ティア「ツツコミ？」

プルチ「ツツコミ！」

アト「ボケ？」

ウィンフリー「ボケ？」

ティア「何となく納得だや……」

アト「えっと、貴方は1回王宮に帰るのかしら」

プルチ「ああ、今日は帰るで？　最後に顔くらいは見とこ思てな」

アト「そう……」

ウィンフリー「そうだ、おれ思ってた事あるんだけど、まだ少し日数あるからそれまでおれ達を鍛えてくれないか？」

ティア「え？」

プルチ「おれも考えてはおったで？　お前達は間違いなくそんじやそこらの海賊何かよりもずっと強い！　鍛えて貰うにはもってこいやろ？」

アト「まあ、貴方達も戦うものね、全くかまわないわよ？」

ウィンフリー「ありがとうな！　だけど、とりあえずは朝飯だ！　食べたらすぐに始めるぞ！」

プルチ「えと、おれは王宮で食ってくるわ。少し準備もあるし、これからもしばらく出てるって事は一応伝えんな」

ティア「分かった。そんじゃ、また後でだね」

プルチ「ああ。それじゃ、早速戻るわ、また後でな」

アト「ええ、それじゃね」

十王宮十

プルチ「帰ったで〜！」

執事「おお、お帰りなさいませ。またウィンフリーの家に行つたのですか？」

プルチ「ああ、帰ってきて早々なんやけど、朝飯だけ食べたらずぐにまたでるから。すぐには帰って来ないから」

執事「承知しました。お食事の用意はすぐに出来ますので、テーブルに着いてお待ち下さい」

プルチ「おう！」

執事「（プルチ様、お許し下さい……）」

~~~~~

プルチ「帰ったで〜！」

国王「おお、帰ったかプルチ。さあ、座れ座れ」

女王「お帰りプルチ」

プルチ「ああ」

国王「またウィンフリーの所に行ってたのか？」

プルチ「ああ。ただ、朝飯食べたらまたしばらく行ってくるわ」

女王「あら、そうなの？」

プルチ「ああ、一週間くらいだと思っけどな」

国王「そうか、遊ぶのも良いが、程々にな？」

がちゃっ

執事「お食事をお持ちしました」

国王「並べろ」

カチャ カチャ

執事が豪華な料理を並べ終え、『どうぞごゆっくり』と言って出ていく。おいしそうな臭いが立ち込め、3人がスプーンに手をとる

国王「うむ、今日の食事も上手いな」

プルチ「…………マズイ！　なんやこのエグ過ぎる味は！？　吐きそうや…………」

プルチがメインディッシュの横に添えられていた真っ白なフルーツを口にした瞬間口の中に信じられない程に強いエグ味がやって来て吐き出そうと思ったが、驚きのあまりつい飲み込んでしまった。

ドクン　ドクン

プルチ「（なんや、心臓が有り得ないくらいドクンドクン言ってる…………）」

国王「（くくく、飲み込んだか…………）」

女王「大丈夫？　顔色が冴えないわよ？」

プルチ「ああ、大丈夫や……」

〃  
〃  
〃

ウィンフリー「何やってんだ？　あいつ……」

ティア「もう昼すぎだね……」

アト「何かあったのかしら……」

ウィンフリー「プルチ……」

十王室十

プルチ「何や？ 出掛ける前に少し話があるって？」

国王「……………」

プルチ「（何や？ 黙りこくって……………」

国王「……………」

プルチ「……………うっ！？ やめっ

パン

プルチ「……………」

国王「くくく、早く起きろよ……プルチ『君』」

ドサッ

プルチ「（な、何や、痛くない……？ ……？ 雪、何でこんなとこに雪があるんや？ ……んな！ 体が雪になつとるのか！？）」

国王「自然系 悪魔の実」

プルチ「悪魔の実！？ 父さんまさか、何か知つとるのか！？」

国王「くくく、知ってるも何も、お前をそんなにしたのはおれだ」



プルチ「さっき悪魔の実って言ったよな！？ おれは何の実を食ったんや！？」

国王「くくく、大丈夫だ、変な実じゃない……むしろ喜ぶべきものだ。お前が食べたのは自然系 悪魔の実 ユキユキの実だ」

プルチ「ユキユキの実！？ ……まさか！ あの時食べたクソまずいフルーツか！」

国王「そうだ、察しが良いな。その悪魔の実は、体から自由に雪を発生させる事が可能になるうえ、ありとあらゆる攻撃を無効化させる……ただし、例外はあるがな」

プルチ「何でおれにそんな物を食わしたんや」

国王「くくく、お前から聞いてくれるか、おい！ 入れる！」

プルチ「……？」

が  
ち  
ゃ

プルチ「……んな！ 母さん！？」

女王「プルチ……」

「お連れしました！ 『トロス王』！」

トロス王「くくく、ご苦労」

プルチ「な、何で母さんが檻なんかに閉じ込められてんだ！」

トロス「くくく、『オプラ』を閉じ込めたのは人質だ」

プルチ「人質やと！？ どういう事や！？」

トロス「おれが少し前からモンキーポッドの頂上を目指している事は知ってるな？」

プルチ「当然だ」

トロス「モンキーポッドの頂上には、『ある物』が眠っている。おれはそれが欲しいだけだ」

プルチ「こんな事をしてまで欲しい物なのか父さん！？」

トロス「くくく、それさえあれば何もいらないと断言出来るくらい欲しい物だな」

プルチ「分かったで……おれにこの力を与えてモンキーポッドを登らせる気なんやな!？」

トロス「くくく、相変わらず鋭いな、そうだ。ロギア的能力さえあればあの忌ま忌ましい『鳥』に殺される事はまず無くなる。このまま無駄に兵力を失う訳にはいけないからな、痛すぎる出費だったが、悪魔の実オークションで手に入れたユキユキの実をお前に食わせて行かせる事にしたのさ」

プルチ「まさか、あの高すぎる税率は悪魔の実を買ったためだったのか!？」

トロス「そう、悪魔の実オークションは、出展する実を1年前には公開する。ロギア系の名前が出るのを一体何十年待ったか事か……。いくら小さいと言えども、1つの国が1年もかければロギア系の実を落札する額は十分に集まるものだ」

プルチ「ふんっ！自分で食べなかったのはゲニウスに殺される可能性は0では無いからな……死ぬのが怖かったからやる？」

トロス「くくく、何とでも言え、おれには余りにも大きな問題だ。手段を選んでは暇は無い。それで、行くのか？　まあ、お前なら行かないって言った瞬間どうなるか分かってるよな？」

カチャリ

オプラ女王「ひっ！？」

プルチ「やめろ！　母さんに拳銃を向けるな！」

トロス「違う違う、オプラから拳銃を退けて貰いたい時は『僕が行きます』だろ？」

オプラ女王「プルチ！　絶対に行つてはなりません！　私は大丈夫です！　トロスの思い通りにしてはなりません！」

トロス「くくく、どうするんだ？」

プルチ「……アホか？ おれに力を与えたのはお前やぞ、『トロス』。おれが母さんを守って、先にお前を倒せば良い話しや！」

トロス「……………。くくく、やれるものならやって見ろよ」

プルチ「ああ！ 何も言えなくなるくらいにギタギタにしたる！  
おらあああああ！！！」

トロスに目掛けて、プルチが腕から雪を放出した

ドサッ

「……………」

「  
.....」

「  
.....」

プルチ「くっ.....！」

トロス「くくく、アホはお前じゃないのか？ 能力を与えた時点で、反抗してくる事は分かってるんだよ」

オプラ「プルチ.....」

プルチ「何や.....力が入らん！？」

トロス「悔楼石の手錠は嵌めたな？」

「ああ」

トロス「くくく、ご苦労だったな、下がっていいぞ」  
デル「バンダ」  
「バンダ」

デル「分かった……」

ブバル「承知」

バンダ「……………」

3人はすたすたと王室を出て行った

プルチ「ちい！ 監視がいたのか！」



トロス「くくく、さあ、これで何て言えば良いかがハッキリした  
る？ プルチ君？」

プルチ「……くっ！ ……………おれが行ってくる」

## 11話 トロス オブラ（後書き）

まあ、全然予想できる範囲内だったでしょうな……（＾|＾；）

## 12話 フロックス・レポルト（前書き）

今回、何か文章がばらついた感じがして何回か直しましたが、まだばらついた感じが無くならない……（-”-;）

もしも100万円で文章力とアイデアを得られるならば、私はフカフカのベッドを買います（-）

## 12話 フロックス・レポルト

セドン「何？ プルチが帰って来ない？」

ウィンフリー「ああ、朝飯食べたらずくに帰って来るって話しだつたんだけど、もうすぐで日が傾くぜ！？」

セドン「タイミングが良すぎる、作戦が悟られたか……？」

ティア「もしそうだとしたら……」

アト「作戦や準備なんて言ってられないわね……」

セドン「すぐに出発しなければいけないかもしれないな……」

ウィンフリー「プルチ……」

十モンキーポッド十

プルチ「いつも見とるけど、いざ登るとなると更に大きく見えるな……」

父親が何を企んでいるかは今だに見えて来ないが、あんな強攻策をとる奴の事だ、ロクな事では無いだろうと諦め、モンキーポッドの頂上を見据える

プルチ「さあ、登るか……」

雪をモンキーポッドの側面に固定して、自分の登る道を確保する

プルチ「（何となくこの力の使い勝手が分かってきたわ。手に入れた方法が方法やから、素直に喜べんが、正直便利なもんやわ……）」

自分の作った道を歩き、ゆっくりとモンキーポッドを登っていく

プルチ「はあ、ゲニウスと戦うんか、嫌やわ……」

「ウィンフリー家」

セドン「出発しよう、プルチに何かがある前に助けてあげなければ……」

ティア「でも、もしも思い違いだった場合は？」

セドン「例え思い違いでも、国王を討つチャンスだ。そのまま国王を目指す」

アト「分かりました」

ウィンフリー「もう出るのか？」

セドン「いや、急遽突撃の旨を団員に連絡しなければいけない。私は少し遅れるが、君達は先に行ってくれ、私達もすぐに向かう」

ティア「分かりました。じゃ、行こう！」

ウィンフリー「ああ！」

セドン「健闘を祈る、皆……」

〵〵〵

アト「……！？ あれを見て」

ウィンフリー「あれは！？ ゲニウス！？」

ティア「あれがゲニウス！？」

ウィンフリー「ああ、もう戦ってる見たいだ！ ティア、アト、急ぐぞ！？ 王宮はもうすぐだ！」

アト「ええ！」



＋モンキーポッド＋

プルチ「ふう、思ったより早いやないかい、ゲニウス……」

ゲニウス「ぐぎややややややや！ー！」

プルチ「へ、お前も守らんとアカンのやろうけどな、おれも守るものがあんな。力づくやけど通して貰うで！？」

ゲニウス「ぐぎやややや！ー！」

＋王室＋

トロス「（ゲニウス……）」

執事「……………」

〵〵〵

ウィンフリー「よし！ モンキーポッドはこの塀の奥だ！」

ティア「うん！」

十？？？十

「デイル様、本日中には手に入るかと……」

ディモル「ジュフフフ……そうか、今から向かおう。ご苦労だった……」

「はっ！ それでは」

ぷー……ぷー

「これでおれも……」

†ウィンフリー†

ウィンフリー「おい、そこを退けよ……」

バンダ「無理だな……」

ウィンフリー「だろうと思ったよ……雇われた3人の傭兵の内の1人ってのはお前の事何だろ？」

バンダ「何故そう思う……？」

ウィンフリー「何か雑魚じゃない雰囲気かぶんぶんするから」

ティア「（何て適当な……）」

バンダ「ふん、面白いな、咄嗟の勘は生存率を跳ね上げる……」

ウィンフリー「んで、何でおれ達に気付いた」

バンダ「監視役がない訳が無いだろ？ お前達はずっと前から気付かれている」

ティア「まあ、当然よね……」

バンダ「目的は何だ？ 事によっては戦わなければいけなくなる……」

ウィンフリー「プルチ奪還！」

バンダ「そうか、残念だ……やるしかないな」

ウィンフリー「おれはやだ！ お前には絶対に瞬殺される雰囲気がぶんぶんする！ ティア・アトどっちか行ってくれないか！」

アト「私が戦っわ」

バンダ「ほう、強いな……」

アト「あら、貴方にも『咄嗟の勘』はある見たいね」

バンダ「よく言う……」

アト「2人共行つて、時間が無いわよ？」

ウィンフリー「サンキュー！ 気をつけろよ！」

ティア「また後でね！」

アト「ええ、また後で」

バンダ「ふっ、お気楽だな……」

アト「あら心外、これでも大真面目なのよ？」

バンダ「そうか、悪かったな……」

＋セドン＋

セドン「よし、集まりは1/3と言った所か……」

セドンの目の前には集まった団員達がきおついで整列している

セドン「皆！今日は急な収集にに応じてくれて感謝している。先程も連絡した通り、これから王宮を攻め立て、『プルチ奪還』及び『トロス国王の拘束』が最終目的になる！我々に与えられた役目は、軍隊をティア・アト・ウィンフリーの元へ送り着かせぬ様食い止め

る事、皆速やかに行動するように！」

↑王室↑

トロス「……………」

コン コン

トロス「……………入れ」

が  
ち  
ゃ



執事「失礼致します」

トロス「ああ、『ペディ』か……何だ？」

ペディ執事「トロス様………本当に、よろしかったのですか？」

トロス「……何の事だ？」

ペディ「何故わざわざブルチ様に押し付けなければいけなかったのですか……？」

トロス「あいつはおれが利用する為だけに産んだ奴だ。使い捨てるのには1番良い人材だろ？」

ペディ「しかし、先程からトロス様がどこか辛そうに見えますが……」

トロス「……気のせいだ」

ペディ「しかし、トロ

トロス「もう止める！ 止めてくれ……ペディ……」

ペディ「トロス様……」

トロス「プルチ……」

†ティア†

ウィンフリー「またか……」

ブバル「貴様等か、プルチを奪還しに来たという侵入者は」

ティア「何でそれを？」

ブバル「城門で軍隊と自警団が騒ぎを起こしはじめた所だ。『プルチ奪還』だの『トロス拘束』だのと騒ぐ馬鹿がいたからな」

ウィンフリー「そうか、自警団はもう到着してたか……」

ブバル「さあ、余り話すことは好きじゃないんだ、とつと始めてとつと終わらせよう」

ティア「ウィンフリー！ コイツは僕が相手するから君は早くプルチの元へ！」

ウィンフリー「悪い、任せた！ 気をつけろよ！ じゃあ！」

ブバル「全く、別れたか、面倒な事を……」

ティア「さあ、僕も早くウィンフリーを追わなきゃね。とつとと始めてとつとと終わらせようよ」

ブバル「貴様……」

十????十

デイモル「ジュフフフ、着いたな……」

フォセカ「熱いな……」

「お待ちしていました、デイモル様にフォセカ様……」

ディモル「おお、デルか！ 早くおれを『物』の在りかへ案内しろ」

デル「はい、ただ今。ただ、お約束はお忘れ無く……」

フォセカ「分かっている……もしも『物』が本物であつた場合はお前を我等が組織『フロックス・レボルト』の幹部の座を与える」

12話 フロックス・レポルト（後書き）

（ ） 1番使う顔文字です

? 1番使う絵文字です

### 13話 バンダ（前書き）

今回は少し短いです

（ ・ ・ ）

### 13話 バンダ

バンダ「…………お前達はプルチを救い出すと言ったな？」

アト「ええ、言ったわ？」

バンダ「そうか……」

アト「どうかしたのかしら？」

バンダ「いや、確認したかったただけだ……。さあ、おれも仕事を果たさなければな、行くぞ！」

バンダはアトに急接近して、膝蹴りを仕掛ける。しかしアトは、なんでも無いと簡単に避けた後、輝赤でバンダに切り掛かるが、そ



れをギリギリで避けられてしまった。

バンダ「速いな……」

冷や汗を腕で拭い、想像以上の動きに、つい口に出してしまう

アト「あら、褒めてくれるの？」

バンダ「ああ、ジュームを倒すだけの事はある……」

アト「私達の事を知ってるの？」

頭では分かっているながらも、あえて聞いてみる事にした

バンダ「知らない方がおかしいだろう。あれだけの事をすれば1日も経つと皆の耳に入る……」

アト「ま、そうよね」

バンダ「（手をぬいた状態では、とてもじゃないが敵わないな……）」

一切顔に出てはいないが、内心穏やかではないバンダも、次の瞬間に頭の中は綺麗に整理された

バンダ「（殺す気で行かなければやられる）」

アト「（雰囲気が変わった。何かしてくるわね……）」

言い知れぬ雰囲気警戒を強めたアトだが、次に起こる初めての経験について驚きを表にしまった

バンダの体がぼこぼこ膨張し、更に毛でミッシリと被われて行く

バンダ「クマクマの実 モデル『グリズリー』……」

体格は人間のそれと大差は無いが、体中が毛で被われ、顔は顎を残して他は熊そのもの。更に爪が野太くなり、腕も少し長くなった様だ

アト「ゾオン系、初めて見たわ……」

バンダ「ふむ、ならば、私の動きについては来れまいな……」

言うが早い、バンダが地面を強く蹴った

アト「……！？」

キーン

バンダ「ほう……」

バンダの爪を輝赤で何とか受け止めたアト

アト「思ったよりも早くて驚いたわ……」

軽く焦りはしたが、いつものポーカーフェイスを崩さずにバンダ

へ声を掛けた

バンダ「傷ついたよ、まさか無傷で止められるとはな……」

こちらにも相変わらず無表情で言うので、心理は簡単に知ることには難しい

アト「あら、傷ついたわ？ あれで私を倒そうとしてたなんて」

悪戯っ子の様に言うアトに、バンダも腹立たしい感情は沸かないが、やはりまだ幼い一面がチラチラと見える事がバンダに躊躇いを無意識で生んでいる

バンダ「ふん、相変わらぬ減らず口だな」

軽く呆れた様に帰すバンダにアトはクスクスと笑っている

アト「ええ、たまに言われるわ。大人にね」

バンダ「ふん、やんちゃ娘め……」

バンダもアトとの会話をほんの少しだが楽しんでいるようだ。顔付きがちょっとだけ柔らかくなっている

ぐぎややややややや……！！！！！！

ふと遠くから聞こえたゲニウスの鳴き声で、2人の間を流れたほんのささやかな時間が吹き飛んで行ってしまった

アト「早く迎えに行つてあげなきゃね……」

バンダ「そうだな、私も仕事を忘れていた様だ……。さて、行くぞ！」

アトの懷に素早く潜り込み、爪でアトを裂こうと振り下ろすが、輝赤で受け止められた

バンダ「何！？」

アト「少しだけ、危なかったわ……」

流石のバンダも驚きが顔に出ってしまった。人獣型であるバンダの一撃をアトが受け止めたのだ。無理も無い

バンダ「（何だと！？ 1撃目の小手調べとは違う！ 本気だったはず！ 能力者ではない、しかも女の子に受け止められたのか！？）」

アト「行くわよ?」

不適な微笑みでアトが告げる

バンダ「(……消えた!?)」

アトが剃でバンダの前から姿を消した

バンダ「(ど、どこだ!?)」

バンダは分かりやすくキョロキョロとしている。やはり先程の出来事での動揺は後を引いている様で、自分でも良い対処方法が見つからず、ただ不安を和らげる為だけにアトを探す事に夢中になっている

アト「(分かりやすく挙動不審ね……)」



アトはと言うと、『月歩』を使いバンダの頭上で浮遊していた

スタっ

バンダ「そ、そこか!？」

アトがバンダの後方の地面に降り立った音をあえて大きく出して  
自分の居場所を示した

アト「剃」

バンダ「ま、また消え……」

しかし、再び剃によって姿を消してしまったアトにバンダは『完全に遊ばれている事』を自覚し、恐怖を感じる様になった

アト「(ゾオン系は純粹に体が強化されるって聞いたわ。相手に攻撃を気付かれる前に当てなきゃ多分倒せない……)」

アトも別に遊んでいる訳では無い。強化されたバンダを1撃で倒すには自分の攻撃を認知されない状態で決めるしかないと判断したための『剃での攪乱』だ。大体今はプルチ奪還の為に遊んでいる暇は無い。さっきお喋りしていたが……

バンダ「(フルーツ……ムニエル……ステーキ……)」

バンダも冷静を保とうと、頭の中で好きな食べ物を考えている。もちろん注意は散漫にならない様にはしているが

ヒュッ

無音だった。アトが地面に足を付けた瞬間は……

アト「剃」

ズバッ      ズドッ

バンダ「んぐ……！？」

どさっ

アト「早く行かなきゃね……。さようなら、熊さん」

背後からバンダの背中を輝赤で斬りつけた後、後頭部を棒の部分で撲ったのだ。

バンダはなす術も無く無抵抗に倒れてしまった。死んではいない。気絶しているだけだが、その恐怖の混じった表情を見てアトは消え入りそうな程に小さな声で『ごめんなさい』と言った

アト「貴方が『輝赤』何て名前をつけられた訳が分かったわ……」

『輝赤』を見て語りかける様に話し出す

アト「貴方自身が少し発光しているから、人を斬った時についた血が輝いて見えるのね……」

本当に、本当に綺麗な赤の輝きを放つ『輝赤』を見てアトは少しだけ微笑みを見せた後、モンキーポッドに向けて歩き出した……

### 13話 バンダ（後書き）

どうでしょうか？

一応は文章を改善したつもりなのですが……

自分じゃイマイチ分らないのが難しい（-”-；）

ちなみに、これからもう少し短いのは続くと思います

## 14話 ブバル(前書き)

風邪を引いた……

(――;)

頭が痛い、喉が痛い……腰が痛い(――;)

## 14話 ブバル

＋ティア＋

ティア「僕は急いでるから、行くよ!」

ブバル「やれるのならやるが良いさ!」

ティアが剃でブバルの腹を『影』で斬りつけようとしたが、軽かわされ、掌で『影』を触ってきた

ブバル「サイズを使うとは、珍しいものだな……」

ティア「うん、オーダーメイドさ。……ん!？」



ブバル「やっと気付いたか……」

ティア「『影』が動かない……？」

ティアが『影』を再び振ろうとしたが、全く動かない。別に握っている訳では無い、ただ掌で触れているだけなのだ

ティアが少し動揺しているのをブバルが確認すると、ニヤリと笑って見せた

ティア「そういえば、能力者だったね……」

ブバル「ふふふ、知っていたか。どんな能力かは知らない見たいだな」

ティア「まあ、何となくの検討はついてるけどねえ」

少しだけ得意気な顔でブバルに言う

ブバル「別段難しい能力ではないからな、ばれるのはいつも時間の問題だ」

ティア「もう少し観察しないと特定は出来ないね。とりあえず『くつつける』事は出来る見たいだね」

ブバル「ふふふ、どの程度で分かるかな」

からかう様な、馬鹿にした様な態度で言う

ティア「すぐに解明してあげるよ」

言った後、ブバルの頭の右横を本気で蹴った

ブバル「ぶほっ！？ んぐっ……ハアハア……。何て強い蹴りだ……意識が飛ぶかと思ったぞ……！」

ティア「やっぱり……」

ティアの右のすねがブバルの頭にくっついてしまっている。ブバルはふふふと笑い、ティアはティアで予想通りと笑顔を見せている

ブバル「ふふふ、笑っているが、そんな状態で何ができるんだ？」

ティア「殴る」

ブバル「ぶへっ！……う……くっ！ 普通に殴るとは流石に思わなかった……！？」

ティアはブバルの顔面をおもいつきし左で殴った。右足を持って行かれている以上右で殴っても力を溜め難いからだ。案の定左もブバルの顔面にくっついてしまっているが、ティアがただで転ぶ訳が無い

ブバル「貴様、目が……！」

ティア「もしかして、こんな事された事無い？　だとしても、自分で気付けない何で、凄く頭悪いの？」

ティアは殴った左で目をすっぽりと隠してしまっていた

ティア「見えない恐怖は人を一気に臆病にする……さあ、次は何をしようかなあ」

脅す様に、挑発する様に軽い口調でブバルに言う

ブバル「（どうする、目を潰されては何も出来ぬ……。だが、コイツを自由に解放しては私が不利になる……）」

正直な所、ブバルは恐怖を感じて固まっているが、先程のダメー  
ジはかなりデカイので、もし解放した場合に機動力を活かした戦い  
をされればついていける自信は無い

ティア「よし、じゃ、デコピンにしよう」

ブバル「（デコピンだと！？　ハッターだな……。コイツ、何を  
する気だ？）」

バチーン！

ブバル「うぐ！？」

デコピンしました。残った右手で思いっきりと。ただ、一言でデコピンと言っても、『指銃』修得者のデコピンだ。威力は普通のデコピンとは別次元の物。

ティア「お！ 離れた」

ブバル「（くそ、衝撃でつい放してしまった……）」

ティア「……ん？」

とうとう解放されたティアだが、歩きだそうと足を上げようとしたが、上がらない

ティア「足が離れない……。そうか、自身の体じゃなくてもくっつける事が出来るのか……」

ブバル「（よし、はまってくれたな……）」

すると、ブバルが懷から拳銃を出し、両足がくっついて動けない  
ティアに目掛け、発砲した

ブバル「元々、私の戦い方は相手の動きを封じて、遠距離から安全  
に攻撃を仕掛ける物だ。近距離戦は専門外」

パン

カキン

ブバル「何!？」

ティア「痛……」

鉄塊で拳銃の弾を弾いてしまった。ブバルの驚きは普通ではない。それはそうだ。生身の人間を撃って聞こえた音が『カキーン』なのだ。驚かない方が無理と言うもの

ブバル「貴、貴様！ 能力者か！？」

ティア「違うよ？」

ブバル「な、ならばどうしたと言うの

ティア「嵐脚」

ブバル「ぐあっ……何をし

ティア「嵐脚」



どさっ

ティア「ゴメンね。説明するの面倒臭いし、何よりそんな時間は無いんだ」

履いていた靴を脱ぎ、自由になった右足で嵐脚を繰り返した。攻撃がやって来るとは思いもしなかったブバルは嵐脚を諸に喰らい、2撃目で完全に意識を放してしまった

ティア「（怖い力だった……相手がもう少し賢かったら凄く厄介だったかもしれないな）」

十中心街十

ディモル「ったく。うるさくてしょうがないぜ……」

フォセオ「仕方ないさ、海賊である以上静かに暮らす事は求めるな……」

デル「どう致しますか？」

3人の目の前には自警団が集まっている。港に海賊が現れたと、戦闘指揮中のセドンの携帯電伝虫に連絡が入ったので、城門前にまだ集まれなかった残りの自警団に『港の海賊を向かい討て』指令を出したのだ。

ディモル「面倒臭い……とっととやっちまって行くよ！」

フォセオ「そうだな、どっちにしろ、早いか遅いかの問題だ」

デル「そうですね」

自警団も3人を向かい討とういきり立っている。『ここは通さん！』だの『覚悟しろ！』だのと叫んでいる。

ディモル「全く……。行くぜええ！」

## 14話 ブバル（後書き）

ペタペタの実

粘着人間になる

自身の触れた部分を粘着テープの様な、強い粘着力を与えてしまう。  
もちろんどこにも作用させる事が出来るため、相手を貼付けて、  
行動を制限することが出来る。

賢い奴が使ったらかなり強い力だと思います。賢い奴だったら（  
^ | ^ ; ）

ブバルはムッツリ馬鹿です（笑）

15話 共闘（前書き）

今までで一番短いですね

（ ・ ・ ）

## 15話 共闘

＋セドン＋

プルプルプルプルプルプルプルプルプル

セドン「もしもし、セドンだ。何かあつ

自警団「セ、セドンさん！ 避難して下さい！ とても敵いません！  
こちら全滅しか『おらあ！ 連絡なんか取ってんじゃねえぞ、  
面倒くせえ！』」

グサッ

ぐわああああああ！！！！

セドン「ど、どうしたんだ!? 反応しろ! おい!」

懸命に声を掛けたが、セドンの耳に響くのは電伝虫の向こうから聞こえる悲惨な叫び声と、残酷な怒声のみ

セドン「まずい! あちらの部隊は全滅か!? どうする、このままでは街を救う事が……」

↑王室↑

バーン!

兵隊「トロス王! 緊急事態です!」

王室のドアを荒々しく開け放ち、緊急事態だと告げる兵隊に一瞬は怒鳴ろうとしたトロスだったが、余りに切羽詰まった顔なので、一先ずは抑え、素直に用件を聞く事にした

トロス「何だ。何があった」

兵隊「海賊がやって来て、現在街を進撃中です！」

トロス「何だと？ 誰だ！？ 賞金首か？」

兵隊「『デイモル』と『フォセカ』と『デル』の3名です！」

トロス「何！？ 『デイモル』と『フォセカ』だと！？ 間違いは無いのか！」

兵隊「はい！ 間違いありません！」



トロス「くっ……！ 『デル』は『フロックス・レボルト』のス  
パイだったのか！？」

しばらく考えた様子を見せ、兵隊に命令を下した

トロス「軍隊はディモルとフォセ力を止めるのだ！」

兵隊「し、しかし！ 自警団の反乱によってほとんどの戦力をそち  
らに当ててしまっていますか！？」

トロス「自警団にも街へ向かう様に伝えろ！ いくら俺を討ちたい  
と言っただけようが、奴らの実力を知れば優先事項が『俺を討つ事』  
ではないぐらい馬鹿でも分かるはず」

兵隊「はっ！」

しかし、駆け足で戻ろうとした兵隊をトロスが止めた

トロス「これを持って行け」

トロスが引き出しから出した2枚の紙を兵隊に渡す

兵隊「こ、これは!？」

†モンキーポッド†

プルチ「らああああああ!!!!!!」

ゲニウス「ぐぎやややややや!!!!!!」

プルチが自分の右腕を雪に変え、ゲニウスを包み込んでしまうが、

やはり得たばかりの能力だ。細かい動きや、単純にパワーが足りない。雪に包まれたゲニウスだが、すぐに雪を壊してプルチ目掛けて飛んでくる

どさあ

ゲニウスが口にくわえようとしたのを何とか避けたが、プルチが足場になっている雪の足場がほとんど崩れ落ちてしまった

プルチ「おわ！？　しまっ……！？」

足場が崩れ落ちた為にバランスを崩して真っ逆さまに落ちてしまった

プルチ「くそ！？　このままやと下の湖に落ちる！　らああああ！  
！」

何とか落ちまいと腕を雪にして、モンキーポッドにやっとしがみ



今さっきまで激しく戦っていた軍隊の皆がパツと戦意を見せなくなったのだ

セドンが状況を理解出来ないでいる中、軍の兵隊が1人セドンのもとへやって来た

兵隊「自警団長セドン！ トロス国王より、今すぐに街の海賊共を我等軍隊と共に向かい討てとの命令が出ている！」

セドン「（攻撃を止めたのはその為か！？ それにしても何故急に国民を守る様に……）」

兵隊「それと、これはトロス国王より預かった物だ！」

先程トロス国王から預かった2枚の紙をセドンに渡す

セドン「ま、まさか……。今島を襲っているのはコイツ等だと言っ  
のか!？」

『静寂のディモル』

460'000'000ベリ

『昏々のフォセカ』

370'000'000ベリ

『暗黙のデル』

92'000'000ベリ

15話 共闘（後書き）

異名を考えるのが1番辛いよ）――（；）

## 16話 お披露目（前書き）

ごめんなさい（；；）

更新が遅れました。

ただ今、ストーリーを軽く変更している最中でありまして、見直すのに時間をくってしまったました。次の更新にも軽く時間を要する予定です、また間が空いてしまふと思われます



## 16話 お披露目

十街十

ディモル「まったく何だっただよ。おれはただ静かに過ごしたいだけだっただよ……」

フォセカ「静かに過ごせなくなったのはお前が海賊を始めたからだ、自業自得もいいところだな……」

ディモル「んなことあ、分かってんだよ。だが、こんなもん見たら愚痴りたくなるのも同情出来るだろう？」

フォセカ「分からんでもないな……」

『ディモル』『フォセカ』『デル』の3人は、先程立ち塞がった自警団を片付け終わり、しばらく歩いてそろそろ王宮だと言つ所ま

で来ていたのだが、今日の前には軍隊と自警団が新たに3人の前に立ち塞がっているのだ。もちろん、その中セドンの姿も見える

ディモル「まったく面倒くせえな……」

フォセカ「全くだ……」

↑モンキーポッド↑

ウィンフリー「ハア…ハア……やっと着いた」

やっとモンキーポッドに到着したウィンフリーだが、先程からゲニウスの姿が見えないので、プルチに何かあったか、無事でっぺんに登り、既にここにはいないかのどちらかなのだが、ウィンフリーの希望をボロボロに打ち砕く光景を目にしまった

ウィンフリー「プルチ!？」

湖に沈んだプルチである。ウィンフリーは即座にプルチのもとへ駆け付け、地面に寝かせた

ウィンフリー「どうしたんだよ!？ 溺れる様な深さじゃないだろ!？」

確かにウィンフリーの  
体で濡れているのはへその辺りまでと、腕だけである

プルチもどうやら落ちてから時間はほとんど経っていないらしく、意識はハッキリとあった

プルチ「ハア……ハア……助かったわ……サンキューな、ウィンフリー……」

ウィンフリー「よかった……本当によかった……何があったんだ!

？」

プルチ「ゲニウスに上から落とされた。湖に落ちた時に頭を強く撃って動けなかっただけや……」

体が雪だから大概の打撃は通用しないが、現在プルチの体は水を吸って固まってしまっている為に、落ちた瞬間の衝撃を受けてしまったのだ。ただ、常人のそれよりは衝撃を和らげている為に、軽い脳震盪程度ですんではいるのだが

ウィンフリー「どうしてお前がモンキーポッドを登ってんだよ！？  
今まではただの兵隊達だったじゃないかよ！ 何で王子の、息子のお前何だよ！？」

悲痛な叫びで、目尻に涙を貯めながらも必死にプルチに聞いてくる

プルチ「父さんは、おれに悪魔の実を食べさせてモンキーポッドのてっぺんまで登らせようとしてたんや……」

ウィンフリー「悪魔の実だと!? 何を食べたんだ!」

プルチ「ユキユキの実、体が雪になるみたいや。雪だからなんやろな……体が少し固まって動きにくい」

ウィンフリー「ゴメン、不謹慎だけど、羨ましいな……それ」

端から聞いたら『何言つてんだコイツ』と言われてしまうかも知れない事だが、この2人の仲なら全然あり、プルチも驚く様子無しに

プルチ「やる?」

と返す

こんな言い合いをした後、どちらとも無く笑い出して2人の空気は少し和んだ

プルチ「そーいや、あの恋人兄妹はどうした？」

いつの間にか出来上がってしまった変なあだ名だが、ウィンフリーも迷う事無しにティアとアトだと分かり、すぐに答える

ウィンフリー「あいつ等は今戦ってる最中だ。ここまで来るのに国王の傭兵達が来て、2人が相手をしてくれたんだ」

プルチ「そうか……」

はつくしゅん！

プルチ「お前、湖に入ってすっかり体冷えてんじゃねえか！？とにかく、どこかで着替える！おれの部屋から服を持ってきて良いから」

ウィンフリー「そうだな、この湖なら洒落にならねえな、分かった……ってか、お前の分は？」

プルチ「ああ、多分雪だからだな、全く寒くねえから良いわ」

ウィンフリー「寒くねえのか！……益々羨ましいなお前！まあ、良いわ。寒く無いって言ったってお前もべしゃべしゃだから2着持ってきて来るわ」

プルチ「気をつけろよ。いくらお前が王宮の顔なじみだからって、今は何があるか分からねえぞ」

ウィンフリー「分かってる。誰にも見つからないぐらいの気持ちで行ってくるぜ」

プルチ「おれは大丈夫だ。おれを殺したりする理由が全く見つからんからな、むしろ保護されるかもしれない」

ウィンフリー「分かった！ んじゃ、ひとつ走り行ってくる！」

プルチ「じゃあな」

ウィンフリーは王宮のある方向へ走って行った。残されたプルチはそのまま横たわって仲間を待つ事にした

プルチ「（大丈夫だよな、ティア・アト……？ 心なしか、少しだけ体が動く様になったな、これなら誰か来た時は普通に動ける様になつとるやろ……）」

十城門十

デイモル「まったく、やっと着いたぜ……」



フォセカ「途中で随分と邪魔されたからな……」

デル「全くです。おかげで無駄に時間をくってしまいましたね……」

デイモル「さあ、じゃあお邪魔するか、懐かしいフリッツシュ王宮へ……」

フォセカ「もう、そろそろ20年も経つのだな……」

デイモル「つたく、時間が経つのは早過ぎるもんだな……。このままじゃ、おれが静かに過ごせる様になる前にじじいになって死んじゃうぜ！ ジュフフフフ！」

フォセカ「静かに過ごす前に『殺される』何て事は考えないのか？」

ディモル「ジュフフフフ！　　ったく、有り得ねえ事言い出しやがる！　おれ様が殺される訳ねえだろ！　　ジュフフフフ！」

フォセカ「ふっ、そうだな」

足取りは軽く、城門を開け放ち、3人が王宮へと踏み込んだ所を見ていた者がいた。

ペディ執事「ついに来たか……」

＋プルチ＋

プルチ「乾いたんやろか？　　かなり体が動く様になったな……」

1人残ったプルチは、腕を回したり、首を回したりしてこう呟いていた

プルチ「にしても、水吸うと体が固まってまうんか……。ま、溶けないのと、少し動きにくい気がする程度なもんやからええか」

プルチが1人で自分の能力について考えているといきなり近くに2人分の足音が聞こえた

しゅたっ

ティア「あ、プルチ！ 無事で良かった」

アト「……こんな所で寝てどうしたの？」

突然の登場に中々驚いているプルチだが、とりあえず2人にかすり傷さえ見つからない事で安堵する

プルチ「おお、お前等か！ 無事そうで何よりや！」

ティア「プルチ今までどうしてたの？」

プルチ「ああ、モンキーポッドに登ったんやけど、ゲニウスに落とされてたんだ」

アト「よく大丈夫だったわね……」

プルチ「実はな、さっきおれ悪魔の実を食わされたんや」

ティア「悪魔の実！？ ……能力は？」

プルチ「これだ」

プルチが腕を雪に変え、ティアに攻撃をした。当然ティアはかなり驚きはしたがすぐさま雪を避けようとしてその場から移動する。だが、それ以上に驚いていたのはプルチだった

プルチ「……………」

ティア「凄い！ ロギア系の実を食べたの！？」

プルチ「……………あ、ああ。そうや、ユキユキの実って父さんは言ってた」

アト「どうかしたの？ 何か浮かない顔してるわよ？」

ブルチ「いや、何でも無い（成る程、これならもしかするとゼニウ  
スを倒せるかも知れんな……）」

16話 お披露目（後書き）

プルチの閃き

??キラー???

17話 20年（前書き）

今回から過去に入りますや（・・）



17話 20年

十王宮十

デイモル「まったく懐かしいぜ、中身は全く変わらねえな……」

フォセカ「ふむ、やはり20年経ってもそう変わるものではないな……」

デル「そうですか。昔もここはこのままだったのか……」

デイモルとフォセカは王宮内服の全く代わり映えのしない様子に懐かしんでいるが、傭兵としてここ2、3年の間にやって来たデルにはあまり感じる物は無い様だ

ディモルとフォセカが王宮内服をジロジロと見てみると、目の前  
にある大きな階段の上から足音が2人分聞こえたので、3人はそち  
らを見た

ディモル「まさか、お前はトロスカ？」

トロス「久しぶりだな。ディモル、フォセカ……貴様はフロックス・  
デボルトのスパイだったんだな？ デル……」

デル「スパイ何てたいそれた物でも無いが、同じ様なもんだな……」

ディモル「つたく、すっかり大人だねえ……『トロス君』？」

トロス「貴様等も20年で大出世した見たいじゃないか……少なくとも  
とも幹部辺りにはいるのか？」

トロスはディモルとフォセカのデルからの対応を見て、2人の職位を何となく予想した

フォセカ「ふむ、惜しいな……。残念ながらハズレ、『大幹部』だ」

トロス「ふむ。なら『ボロニア』は『最高幹部』か？」

ディモル「当たりだ。つたく、相変わらず懐かしい名前だな『ボロニア』か……」

またもや懐かしんでいるディモルにトロスが質問をする

トロス「もう共には行動してないのだな？」

フォセカ「ふむ、当時はおれ達が『幹部候補』でボロニア様が『最

下級幹部』だったから……。おれ達に作戦指揮をとっていたのが  
ボロニア様だっただけの話だ……」

トロス「そうか……。で、今日ここにやって来た理由は何だ？ 貴  
様等がこんな小さな島に来る理由は無いですだ」

デイモル「ジュフフフフ！ その事だな……。『忘れ物』を取り  
に来たんだ。20年前のな……」

トロス「な、何！？ ……何の事だ？」

なにやら心当たりがある様だ。一瞬だけ慌てた様子を見せるが、  
悟られてはいけないと、すぐに平静を装うも、哀しくもデイモルと  
フォセカの目を騙す事は出来なかった

デイモル「ジュフフフフ！ ったく、どうやらあの様子だと本  
当らしいぜ！ デルの最下級幹部への昇進は確実だな」

フォセカ「全く、盲点だった……」

デイモル「まったく、本当だぜ……おかげでフロックス・レボルトの計画が20年も遅れちゃった。なあ、あるんだろ？ 『あの実が』……」

にたゝ、とトロスに問い掛けるデイモルにトロスは何も言えなかった。

トロス「（ダメだ……ここまで特定されていては場所も特定されているはずだ。……頼む……プルチよ、早くモンキーポッドを登って私に渡してくれ！）」

~~~~~

＋？？？＋

「ただいま〜！」

「おお、お帰りになりましたか。トロス様」

トロス「おお！ 久しぶり、ペディ！」

今は過去……約20年前のフリッシュ島。当時でトロスはまだやんちゃ坊主の16歳、ペディが執事になって3年のまだまだ新米37歳の時代

ペディ「また街で遊んでいらしたのですか？ 1月も……」

トロス「そうだ！　ずっと友達の家に行った！」

ペディ「そうでしたか、後で御礼に何か届けさせて頂く事にしましょう」

トロス「そうだ、父さんは王室にいるか？」

ペディ「ええ、『アルトロ様』は王室にいらっしゃいますよ？」

トロス「分かった。ありがとうな！　それじゃ」

ペディ「いえいえ」

ペディに軽く手を振り王室に走っていくトロスを見てペディは微笑んでいた

〃
〃
〃

「父さ〜ん！　今帰りました〜！」

アルトロ「おお、帰ったかトロス」

トロス「久しぶりだな父さん、１月ぶり！」

アルトロ「ん？　そうか、もう１月経つのか？　久しぶりトロス」

トロスの放任主義はプルチがどうでも良いとかでは無く、この父親の呑気さから来たものである。現に１月経過しているにも関わらずトロスの事は頭に一切あらず、今帰ってきてトロスを思い出したのだ。しかし、トロスを愛していない訳ではなく、出来る限りの愛情は注いでいて、トロス自身も自覚している為に１月経過して忘れ

られていても、いつもの事と軽く流せるのだ。

トロス「帰ってきてそうそうだけど、明日また出掛けるから」

アルトロ「おお、そうか。くれぐれも怪我はしない様にな」

トロス「あいよ」

アルトロ「もう少しでディナーの時間だから、どこかで適当に休んで下さい」

トロス「ああ、自分の部屋にいるよ」

アルトロ「分かった」

軽くアルトロに手を振り、自分の部屋へ行くトロスを見てアルトロは『1ヶ月か……』何てぼやいていた。

十港十

住民「海賊だっ！！」

この頃は大海賊時代が幕をあけてまだほとんど時間が時間が経過していない為、海賊が現れる頻度が劇的に高まり、住民にも馴れてしまった者と、馴れる事の出来ない者とが混在している混乱の時代である。

ある者は「また海賊か……」と冷静に対処し、またある者はギャーギャーと喚いてでたために逃げ惑う者がいる。

海賊達も住民を襲うつもりが初めから無くとも、ここまで騒がれ

ればあまりの煩さに殺意が湧いてしまい、逃げ惑う適当な住民を殺してしまう為、無差別の殺傷事件というのも最近じゃよく耳にする言葉となっていました

今回も例外では無く、海賊船からおりた2人の男達はイライラとしていた

「まったく、ここまで煩くされちゃ殺意も湧くって事に住民の奴らは気付かないのかね……」

「仕方ないだろう。パニック状態の人間は理屈ではないのだ……」

ブルブルブルブル

ここで、片方の男が懐に入れていた携帯電話伝虫がなった

「デイモル・フォセカ……くれぐれもここでは騒ぎを起こすなよ？」

デイモル「つたく、でも騒がしいったらありやしないぜ？　これ…
…ボロニア様」

デイモル

当時19歳

懸賞金

78,000,000ペリー

ボロニア「『でも』も『糞』もあるか。ここで騒ぎを起こせば一気に面倒になる」

フォセカ「もう騒ぎ自体は起きてるがな……」

フォセカ

当時19歳

懸賞金

65,000,000ベリ

ボロニア「実害を出すのと、向こうをただ慌てさせるのじゃ天地の差だ」

デイモル「まったく、分かりやしたよ……」

デイモルは左手に構えかけていた拳銃をしまい、ボロニアの言う事を黙って聞く事にした

フォセカ「このまま王宮に向かえば良いんですね……?」

ボロニア「そうだ。しくじるなよ？ この国の王『アルトロ』は我々の計画に必要不可欠の存在だから……」

17話 20年（後書き）

1つの島でここまで長くなるとは思いもしなかったや……（^| ^ ;
）

18話 ミエミエ（前書き）

前回から時間が空いてしまいましたね……

今から宣言します

私情により、次の更新までまた少し間が空いてしまいます（ - - ; ）
（ - - ; ）

18話 〓〓〓〓〓

十城門十

プシュッ プシュッ

ドサッ ドサッ

デイモル「まったく、王宮を守る門番がこんな簡単にオネンネしちゃって良いのかよ……」

フォセカ「おかげで楽にすんだから良かったじゃないか……」

半ば呆れた様に呟くディモル。

現在2人は王宮に入る為、門番に吹き矢で即効性睡眠薬を撃ち込んだ所である。

普段なら王宮に一般人もほぼ自由に出入り出来るのだが、何せフリッシュ島に海賊が入り込んだと噂が立っている今はそう簡単に人を入れる訳も無く、ディモルとフォセカが『さっき入島したから国王に挨拶をしたい』などと門番に言っても、『今は無理だ！ 後にしろ！』の一点張り

ならば、門番を眠らせようと簡単に答えが出たのだ。何故『即効性睡眠薬仕込みの吹き矢』を持っていたかと言うと、この展開が予想出来ていたからとしか言いようが無い

ディモル「さて、フリッシュ王宮にお邪魔させて頂きますか……」

フォセカ「ちょうど食事時だからな、面倒なんだ……」

城門を開け、軽く『お邪魔します』と囁きながら王宮に入って行く2人

見られた。明らかに怪しいと言つか、初めて見る顔だな何て思っているのが手に取る様に分かりやすい顔で見られた

デイモル「つたく、流石に歓迎はして貰えないよね」

フォセカ「当然だ……」

軽く話をしてると、2人に執事が近づいて来た

ペディ「え、本日はフリッシュ王宮に何かご用でも？」

フォセカ「先程この島にやって来まして、是非アルトロ国王に一度お目にかかりたいと思ひまして……」

正直流れる空気はかなり変なものだった。この2人がどこと無く特殊な雰囲気放っているのだ。普段やって来る一般人とは明らかに違うのだが、門番がこの2人を通したのなら大丈夫とは完全に思わず、半信半疑の状態でありあえずは国王のもとへ通す事にした。当然ペデイが目を光らせた状態ではあるが……

ペデイ「……なるほど。そういう事でしたか、どうぞコチラへ」

デイモル「ありがとうございます（完全に怪しまれてるな……）」

その後、ペデイ先導でアルトロのもとへ向かった。目の前にあった大きな階段を上ると、アルトロを描いた大きな油絵が飾っており、『意外とハンサムな王だな……』等と2人は考え、絵を見つめた

ペディ「……おや？ どうされましたか？」

フオセカ「いえ、素晴らしい絵なのでつい見取れてしまいました……」

ペディ「ああ、この絵はある国で高名な『ジヨット』と言う画家の方に依頼して描いていただいた物でございます。アルトロ様も大変大事にされているのですよ？」

デイモル「『ジヨット』……聞いた事あるな……」

ペディ「ほお、ご存知でしたか。ですが、何も不思議な事では無いのかも知れませんね……彼の絵は世の芸術に革命を起こしたと言われる程の物ですからね」

飾ってあった絵画について話していると、気付けばアルトロがい

ると言う部屋の扉の前に到着していた。

ペディ「アルトロ様はこの広間にいらっしやいます」

言い終えた後、すぐに扉をゆっくりと開くと、非常に広い空間が広がっていて、真ん中にはレッドカーペットが敷かれており、その奥に視線をやると、大きく豪華な椅子にドツカリと座っているアルトロがいた

ペディ「アルトロ様、アルトロ様にお会いしたいと言うお客様をお連れしました」

アルトロ「ご苦労様、2人共よくフリッシュ島に来てくれたね」

ディモル「お初お目に掛かります。ディモルと申します」

フォセカ「私はフォセカと申します」

アルトロ「そうかそうか、よろしくね」

『何てまあ国王らしくない国王だ』何て考えていると、1つのくだらない疑問が浮かんだので、直接聞いてみる事にした

デイモル「ところで、こんな大きな広間に1人椅子に座ってらっしゃいますが……一体何を？」

アルトロ「ああ、この椅子が1番柔らかくて気持ちいいし、凄く落ち着くんだ」

デイモル「（つたく、めちやくちや単純じゃないか……）」

何か理由があるのかと思って聞きはしたが、あまりに単純な理由に呆れてしまった

フォセカ「それはそうと、アルトロ王。本日私達が参上させていた理由には実を言いますと、もう一つございます」

フォセカの言い出した言葉を聞き、アルトロは『ん？ 何だい？ 何て優しい言葉を、ペディは『何だ、挨拶だけじゃ無いのか』等と頭をよぎり、ほんの少し警戒体制に入り、デイモルに関して言えば、やっとか何て顔をしている

デイモル「我々には是非ご協力願いたいです。……『アルトロ』」

アルトロ「……えっ!？」

ペディ「……!」

カチャリ

ディモルが懷から拳銃を出してアルトロに向けた

アルトロ「な、何を……！？」

アルトロは驚きで固まってしまっている。ペディはアルトロの身を守りたいが、自分が動けばディモルが発砲してしまう可能性がある為にうごけないでいる

ディモル「つたく、ここまで来るのに面倒だったぜ……。別段大変な事は無かったがな」

アルトロ「き、協力とは何の事だ……？」

ディモル「自分で分かってるんだろう？ アルトロ国王様？」

アルトロ「無理だよ……こんな日は来ると思っていたから以前から決めていたんだ……」

フォセカ「何をだ……？」

アルトロ「自殺するよ」

カチャリ

何とアルトロが懷から拳銃を取り出し、自分の頭にあて、引き金

に指をかけた……が、ディモルがにたと不適な笑みを浮かべた

アルトロ「何を笑ってる……？」

ディモル「ジュフフフフ！　　ったく、正義感の強いこって……だが、残念だな、お前が引き金を引く事は出来ない」

アルトロ「どういう事だ……？」

ディモル「ジュフフフフ！　　こう言えば分かるか？」ト・ロ・ス・君」

アルトロ「何！？　まさか、お前！」

ペディ「ト、トロス様！？」

デイル「ジュフフフフ！　　たく、良いねえ、察しが良くて
！　　そう、トロス王子に監視をつけた。もし、お前が引き金を引け
ば……BAN！　　ってな！？」

アルトロ「くっ……！　　分かった……協力する……」

ペディ「アルトロ様……」

デイル「ジュフフフフ！　　よし、成立だ！　　これからその
『ミエミエの実』の力を我々の為に使え！　　ジュフフフフフ！」

18話 ミエミエ（後書き）

『吹き矢』

何か凄くひかれます（笑）

フレンドパークの吹き矢が気持ち良さそうだからでしょうか（^
^ ; ;）
|

19話 塞（前書き）

やはりこの時期はあまり携帯をいじれませんね……（^―^；）

多分年明け後なら安定して投稿出来ると思いますので、今はご勘弁してください？

19話 塞

ディモル「ジュフフフフ！　こんなにアツサリ行くとは思わなかったぜ」

ディモル「強い正義感も息子がかかれば形無しだな……」

現在ここはディモルとフォセカが乗ってきた船の上

ディモル「ジュフフフフ！　これで俺達の組織が大きな躍進を遂げたぜ」

フォセカ「『ミエミエの実』か……」

＋三三三三三の実＋

この実を食べると、悪魔の実の場所を感じ取る事が出来るようになる（距離は馴れ等によって伸ばす事が可能）。

アルトロの場合は島に入るだけで、悪魔の実の存在を感じ取る事が出来る（場所の特定は、アルトロを中心に半径3Km内に悪魔の実が入ると可能になる）。

更には、その悪魔の実を食べる事によって得られる力も知る事が出来る。

~~~~~

デイモル「ジュフフフフ！ 悪魔の実の確保は最重要事項の1つ。アルトロの存在は誰もが喉から両手が出る程欲しいから……。おれ達で確保出来て良かったぜ……」



十王室十

アルトロ「私は一体何をやっているんだ……」

ペディ「アルトロ様……あの場合は致し方ありません。トロス様の命を握られては……」

アルトロは王宮に残っていた。デイモルもフォセカもアルトロをフロックス・レボルートに勧誘しに来たが、例え小さいとは言え、一国の王がある日を境に突然消えた何て話題になる様な馬鹿はしたくないのである。アルトロがいなくなっても何ら不思議な事が無い様な状態にまで環境を整えるまでアルトロを連れ出す事は出来ないのだ。

ペディ「アルトロ様、海軍に連絡をしましょう」

アルトロ「し、しかし……この島にあった電伝虫は全て奴らに捕られてしまった」

そう、ディモルとフォセカはアルトロが助けを呼べない様に連絡の手段を絶っていたのだ。

ペディ「近くの海軍支部へ兵を派遣致しましょう」

アルトロ「だが、海も奴等に見張られているだろう。一体どうやって……」

ペディ「鳥です。鳥に文を運んで貰いましょう」

アルトロ「なるほど、すっかり忘れてたな、その方法は……。よし、私は文を書いてくる。ペディは文を運ばせる鳥の準備をしてくれるか？」

ペディ「承知致しました」

~~~~~

アルトロ「よし、この時間帯ならそうそう見つけられる事はないだろう」

現在は、辺りも真っ暗で、何かを見ようとすれば目を細めてしまっただろう程の夜である

ペディ「鳥も黒を選びました。余程の事が無ければ必ず海軍まで文を届けてくれるでしょう」

アルトロ「ふむ、なら、早速飛ばそうよ」

ペディ「承知致しました」

バサバサ

ペディが両掌で包んでいた黒い鳥を天に向けて高く掲げた。軽く
2、3羽ばたいた後に、ペディの腕の重みは無くなり、腕を降ろした

331

アルトロ「無事にたどり着いてくれよ……」

ペディ「アルトロ様、風が出てきました。お部屋へ戻りましょう」

アルトロ「うん」

十船十

ディモル「ジュフフフフ！ やっぱりな……」

パーン

ドサッ

フォセカ「やはり、応援を呼ばうとするか……」

ディモルとフォセカの目の前には、撃ち落とされ、既に息絶えた黒い鳥が無惨に倒れていた

デイモル「ジュフフフフ！　　たく、いくら夜に紛れようったつておれの『目』は胡麻かせないぜ？　ジュフフフフ！」

フォセカ「おい！　誰でも良い！　　一人来い……！」

フォセカが適当な船員を一人呼び出した。

船員「はい！　　何でしょうか船長？」

フォセカ「この鳥を城門の前に置いてこい……」

船員「分かりやした。すぐに行ってきやす」

黒い鳥を適当な袋に詰め、一言のメッセージを付けて、船員が船を降り、王宮の方向へ歩いて行く

ディモル「ジュフフフフ！　　ったく、やる事がエグいねえ」

†王宮†

アルトロ「……………」

ペディ「こんな……………」

『次は無い』

黒い鳥を飛ばした翌朝の事。城門前の掃除に出たメイドが何か袋を見つけ、執事であるペディにその袋を渡した。ペディは嫌な予感を感じ、すぐにアルトロのいる王室へ向かってその袋の中身を共に見た所である

袋に詰められた無惨な死体に白で書かれた簡潔な文字が、2人に信じ難い現実を突き付ける

アルトロ「まさか、あの暗闇で正確にこの鳥を撃ち抜いたのか!？」

ペディ「彼等の力は我々が思う以上なのでしょうが……」

自分の推した案がここまでアッサリと破られたペディは何とも言えない顔をしている

アルトロ「私は彼等の言う事を聞くしか無いのか……?」

海軍に応援も呼べない。1つの海賊を相手にする力もあると言え
ばあるが、正直な所ディモルとフォセカには何故か軍隊を総動員さ
せても勝てる様子が全く想像出来ない不吉さがある。それに、下手
に盾突いてトロスや島を襲われればそれこそ本末転倒である

ペディ「アルト様……」

これから2人は打開策が思い付かず、何も身動きが取れないまま、
悪戯に日数を過ごしてしまう事になる

19話 塞（後書き）

今回の話は少し焦った感じが出てる気がします……（^| ^;）

……少し……いや……かなり……か？

20話 遺（前書き）

えと、ごめんなさい。

私学生でありまして、更に冬休み中でありまして、更に宿題がたつぷりと出ていまして、更に宿題がまだ全然終わっていない訳で……？

つまり、翻訳すると……宿題に専念するので、しばらく更新出来ません？

量、多かったです今回……

20話 遺

十王室十

アルトロ「ペディ、私は島を捨てる……」

ペディ「……………」

黒い鳥に海軍宛ての文章を届けて貰う事に失敗してから、5日が経過していた

身動きが取れずにただ燻っていたが、2人の頭にはいつも最悪な2択が浮かんでいた

『世界を取るか』

『この島を取るか』

ディモルとフォセカの素性は一切判明しないが、これだけは言える。悪魔の実を大量に、確実に確保出来る上、その実の能力を事前知ることが出来る為、強力な悪魔の実だけを厳選して能力を手に入れる様になる時点で、その『海賊団』又は『組織』は著しく拡大化する。

そして、拡大化した者達が考える事はたかが知れている。

まず間違いなく世界に多大な悪影響を及ぼすだろう。

そこで、アルトロの考えていた『自殺』だが、これを実行に移したならば、ディモルとフォセカは逆上してこのフリッシュ島を襲撃してしまう可能性が多大にある。間違いなくトロスも殺されるだろう。

余りに重過ぎる2択にがんじ絡め状態だったが、たった今アルト

口がどちらかを選択したのだ。

アルトロ「ペディ、『トロス』を頼んだよ？ それと、トロスに渡したい物があるから、代わりにそれを渡してくれないか？」

ペディ「……はっ！ 承知……致しました………」

アルトロの言葉の意味する所を察したペディは絶え絶えとした返事になってしまっているが、凜々しく、力強い言葉を返す

「最期にトロスに会わないのか？」と、質問したい気持ちも湧きはしたが、会えば決心が鈍ると判断しての事だと言うのは予想が出来たので、口には出さず、胸にしまい込んだ

アルトロ「ありがとうね、ペディ………」

〜

十後日十

トロス「ただいま〜！ 皆久しぶりだな〜！」

元気に声を上げ、約10日ぶりに帰ってきたトロスに、メイドは皆複雑な表情で挨拶をする。

トロス「（……なんだ？ 皆何か表情が固いな……？）」

トロスがちよつとした違和感を感じ、困惑していると、1回の階段横にあるペディの私室から、ペディがトロスのもとへやって来た。

ペディ「お帰りなさいませ、トロス様」

トロス「久しぶり、ペディ。何か皆少し変なんだけど、何かあったのか……？」

無邪気に聞いて来るトロスにペディも躊躇いを隠す事は出来ないが、ペディはトロスを王室へ行く様に促した

ペディ「トロス様、私と共に王室へいらして下さいませんか？」

トロス「ん？ ん、ああ……」

ペディ「では、参りましょう」

アルトロの自殺の件を、メイド達には、ペディが直々に伝えた。
『不慮の事故』として。

デイモルとフォセカから圧力を掛けられている事と、アルトロの『ミエミエの実』の能力を有する事実を知っているのは、ペディとアルトロのみ。説明するにしても、どこから噂が流れて島民に伝わってしまう事はあまり望ましくない事。

それなら、無難な話にすり替えて皆に知らせてしまった方が、騒ぎは小さいだろうと予測して、王宮の者には既に知らせているのだ。

ただ、当然ながら、わざわざデイモルとフォセカにアルトロの死を伝える様な馬鹿はするはずも無く、まだ王宮内部のみの者にしか知ることは許していない。もしも、誰かが他言した場合は死刑とまで言つて、情報が漏れる事を防いでいるが、正直な所島民に知られるのは時間の問題だろうと思うし、デイモルとフォセカが察するのは更に早いだろう。なにせ、中々小刻みにやって来るのだから。

~~~~~

トロス「……う、嘘だろ……？」

ペディ「残念ながら、事実でございます……」

王室にやって来たトロスにペディはアルトロからの手紙を渡したのだ。しかし、手紙と言うには余りに短く、更に、書かれていた内容は『ゴメン』『おどろいたよね？』等、あまり内容があるとは思えない事ばかりが書かれていた。

トロス「どういう事だよ……？　こんな手紙を残したってことは、自殺なのか！？」

まさか、メイド達から感じる違和感の正体がここまで自分にシヨックを与える物とは想像も出来なかったトロスだが、父親が自分に

残した物はこれだけかと、辺りをキョロキョロと見渡している。

ペディ「トロス様、コチラを……」

ペディがトロスに紙を渡した。

トロス「これは、海図か……？」

ペディ「はい、ですが……ただの海図ではありません」

トロス「何かメモが書いてあるな……」

アルトロが残した物は海図だった。しかし、海図と呼ぶにはあまりに杜撰な作りで、寸法も糞も無い、悪戯書きの様な物だったが、

アルトロのメモによって、これの価値

は跳ね上がった。

トロス「このメモってもしかして、悪魔の実の名前か……？」

ペディ「はい、アルトロ様が発見された悪魔の実の場所を示した海図でございます」

トロス「父さんが発見した……？ 1個や2個じゃないぞ！？ こんなにバンバン見つかるもんじゃ無いだろ！？ 悪魔の実ってのは！？」

疑問に思うのも仕方ない話で、示された悪魔の実は10個近くもあったのだ。言われるだろうと予想していたペディは、アルトロのミエミエの実の能力と、自殺しなければいけなくなったいきさつをトロスに説明する。

〜

ペディの説明の最中、かなり驚いた様子を見せていたトロスだったが、黙って聞いていた。

トロス「……………」

突然のアルトロの死に、まだ実感が沸いていなかったトロスだったが、ペディの説明を聞き、急激にアルトロの死を感じたのだろう。ペディの話が終わる頃には、声も出さずに目尻から涙が伝っていた。

ペディ「トロス様……………」

トロスの涙を見て、何とも言い難い嫌な気持ちになったペディが、

つい声を掛けるが、何も言える事は見つからずに2人を沈黙が包んだ。

トロス「ペディおれは部屋に戻る……」

沈黙を破ったのはトロスの声で、言い終わらない内に扉へ歩きだしていたトロスに、ペディは黙って頭を下げて見送っていた

## 20話 遺（後書き）

まずい……頭の中で構想していた『話』が、書いてる内に自然と変わって行つて全くの別物になつてきている？

まあ、これはこれで面白そうな感じはしますが……

## 21話 海図（前書き）

お久しぶりです。

やっと普通に投稿出来る様になりそうです

（^ー^；）



## 21話 海図

十船十

デイモル「何？ 演説でアルトロが出てこなかった？ ったく、やっぱしな……」

報告を終えた船員はデイモルに「下がって良いぜ？」と言われ、敬礼して自分の定位置に戻って行った。

アルトロは何の用事も無くても月に2度は民衆の前で演説を行っていたのだ。正直な所無駄話が多くを占めていたのだが、そんな王だからこそ人気は高かった。

フォセカ「アルトロの代わりにトロスがねえ……」

デイモル「死んだな……」

デイモルはこうなる事は予想していた。最高の1例として

デイモル「ジュフフフフフ！ これで敵対する勢力の拡大は無いな」

「フロックス・レボルト」の勢力はかなりの物なのだろう。フロックス・レボルトの勢力拡大よりも敵対する勢力拡大を防ぐのがどちらかと言えば2人の目的だったのだ。

デイモル「恐らくだがなく、アルトロは自身が発見した悪魔の実を記した何かを残したはず。今からそいつを頂きに行くぜ？ 無きや無いで暴れようぜ」

フォセカ「何か当たりの実があれば良いがな……」

2人して重い腰を上げ「あゝ、怠い……」なんて呟きながら王宮へ歩きだした。

＋王宮＋

ペディ「先程の演説でアルト口様が御出席ならなかった事で、奴らには感ずかれた事でしよう……。早ければ今すぐにでもここにやって来るかもしれません」

トロス「ああ……そうだな。まあ、おれは逃げるから、ペディもついて来てくれ」

ペディ「承知致しました」

トロス「ディモルとフォセカを迎え討ちたい気持ちは十分にあるけど、今のおれじゃ海賊相手に戦う力なんか全く無い。あいつ等に復讐するのは今じゃない」

とりあえず、今トロスの頭の大半を占める思考は、間接的とは言え、父親を殺された事に対する復讐がほとんどだ

ほとんど交流の無かった父親だったが、いざいなくなってしまうとその存在の大きさに気付かされるものだと言って考えていた

しかし、頭は冷静に働いている。逃げると言っただけは良いが、彼等に見つからずに隠れる事など出来る自信は到底ない。

島を出ることは出来ない。文を届ける為の黒い鳥が射殺されるほどガツチリと監視されているからだ。かと言って島の中で逃げ回っていてはいつかは必ず見付かる。当然戦うなんてのは論外だ。

トロス「（どうすりゃ良いのかね。八方塞がりだ……）」

頭に手の甲を当て、悩むトロスだが、困った物で解決策はサツパリと浮かばない。半分無意識にペディへ目をやるが、同じく悩んでいる様子。期待通りの答えは望めそうにない

だからといって諦めは出来ない。父親の復讐を決意したトロスは、厳しい表情で爪噛んでいた。

トロス「　　っ痛！」

指先に感じる鋭い痛みと共に鉄に似た味が口の中に広がる。知らぬ間に時間は経っていたらしい。親指の爪は短くなり、肉を食いちぎってしまった様だ。自分に爪を噛む癖は無いと思っていたが、どうやら本当に悩んでいる時は口元に指が行くらしいと、どうでもいい事ばかりが頭をよぎる。

頭を働かせる事に疲れたのかも知れない。どんどんと投げやりな思考になっていき、いつそ真正面から歯向かって顔に傷一つ付けて殺されようかなんて危な過ぎる物が最終的に頭に残った。

いけない　いけない　と頭を軽く叩いて正気に戻ろうとするが、そんなことで簡単に頭が冴えるなら苦労はしない。結局は軽い頭痛を残して腕を降ろした脱力感と同時に床に座り込みそうになるのを、少し体に力を込めて防いだきり、再び立ち尽くすだけになってしまった。

ペディ「トロス様……ゲニウスに助けを求めましょう」

トロス「ゲニウスに!？」

心底驚いた様だ。目を張り、固まっている。

トロス「でも、どうやってゲニウスに助けを!？」

当然ゲニウスが自分達を助ける義理は無い。利益も無いし、自分達を助けたいと考える程の交流も無い。第一ゲニウスは守護鳥と呼ばれる程度には特別で人語を理解してもいるようだが、それでも鳥は鳥だ。どうしても自分達の助けになってくれるとは考え難い。

ペディ「奴らにモンキーポッドを攻撃させるのです」

トロス「それは……!？」

軽く盲点だった。ゲニウスに直接守ってもらわなくても、デイモルとフォセカをモンキーポッドに害を与える存在だと認識させれば、それはもうゲニウスを味方につけたも同然の話。真っ暗だった世界に1つの眩しい光が真つすぐと注した様な気になるが、あくまでか細い光、少しでも不手際があれば簡単に再び暗闇の世界に戻って仕

舞うだろう事は百も承知、多少緩む類とは正反対にガッチリと引き締まる『氣』をひしひしと感じていた。そうと決まればトロスはすぐさまモンキーポッドの元へ向かうとペディに伝えた。

ペディもすぐさま頭を下げ、最低限の準備をするから10分だけ時間をくれとトロスに伝え、私室の方向へ走って行った。

トロスも多少出来た時間に何かをしようと思ったは良いが、正直な所することが無いため、結局はアルトロの残した手紙と海図を眺める事にした。

↑モンキーポッド↑

あれから2人は準備を終えてモンキーポッドの回りを囲む湖の辺りへ来ていた。

太陽の陽射しのほとんどをカットしてしまう程にびっしりと枝を広げているために、モンキーポッドの真下は暗めになっているが、



流石に多少の木漏れ日は注しているため、湖に反射した光がキラキラと輝き、2人の目を軽く刺激している。

相当地綺麗な光景なのだが、今の2人の状況下ではそんな事を考える余裕は無い。2人の目に入るのはただ悠然と立ち続ける立派な大木のみである。

トロス「にしても、本当に来るのか？ あいつらは……ただ来るって思い込んでるだけの気もしてきたぜ……」

確かにそうだ。ディモルとフォセカが来るというのは2人のただの推測なのだ。ディモルとフォセカに何か動きがあったと確認したわけでは無いのだ。

ペディ「来なければ来ないで助かったと思いませんか」

トロス「そうだな」

ペディの言う通りだと心から思った。やはり奴らの事を憎む気持ちも十分本物なのだが、怯えている気持ちも十分に本物なのだと少し思った。これを実感した時にトロスは来ないで欲しいという気持ちが始めて沸いて来たのだが

プスっ！

トロスとペディの間を縫う様に何かが飛んでいき、モンキーポッドに小さな穴が空いた。

トロス「な、何だ！？」

ペディが即座にモンキーポッドに穴を開けた物を確認する。

ペディ「弾です。拳銃の……」

トロス「弾……あいつ等か!？」

トロスが焦って周りをキョロキョロと見渡すが誰もいない。

「ジュフフフフフ！　　ったく、拳銃とは違うな……俺はスナイパーだ」

「スナイパーとは少し言い難いかな……」

2人は焦って声のした方を見た。

トロス「あいつらか！？ デイモルとフォセカってのは！？ なん  
でだ！ さっき見渡した時はいなかったぞ！？」

そう。モンキーポッドと湖ぐらいしか見当たらない開けた場所だ  
から数秒目を離れたからといってそんなにポンと現れる事など出来  
る物ではない

デイモル「ジュフフフフフ！ たたく、そんな怖い顔するなっ  
て。おれ達はただ欲しい物があるだけ何だから」

何でかはわからない。わからないけど2人はすぐに察した。デイ  
モルとフォセカは『海図』を狙っていると

「ぐぎゃ ああああ ああ！！！！！」



## 21話 海図（後書き）

後書きで書くこといつも迷います（^ー^；）

無いと寂しい気がするので、空けたくは無いのですが、何分書くことが……

## 22話 斬（前書き）

少し前にある小説を買いました。

やはり、文章の力をつけるなら小説を読んで参考にするのが1番に決まってる！

って感じで読んで見ましたが……いや、自分の文章の拙さを改めて実感させられました（^ー^；）

## 22話 斬

デイモル「ジュフフフフフ！　　ったく、お前達は嘘をつけないタイプだな？　はつきり出てるぜ？　顔に『あります』ってな」

フォセカ「ふんっ、デイモルに隠し事を出来ると思わない方がいい……。こいつは異常だ……」

適当な発言ではない。普段の会話では全く表情を変えないフォセカだが、今までの嫌な思いでも頭に浮かんだのだろう。眉が密かにぴくぴくとしているのが何とか確認出来た。余程見透かされるのだろう。

トロス「……おれ達は何のようだ？」



聞く必要性もほぼ無いが、この質問はこういうシチュエーションでの定石ってものだ。深いことは考えずにただ単に聞いてみた。

デイモルはトロスの質問に気怠そうにしながらも答える事はした。

デイモル「ったく、分かってんだろ……？ 死んだお前の親父が何か残したはずだよな？ 悪魔の実のありかを記した『何か』をな……。戴きに來たぜ？ その何かをな……」

やはり、事前にはれている事を察知していたからであろう。驚きはしたものの、大きな物では無かった。一切表情は変えずにごまかす事にした。ただ、ごまかせるとは端から思っていない。とりあえず決まり文句として『何の事だ？』と言ってやった。

デイモル「ジュフフフフフ！ ったく、嘘はいけないな……。『それ』さえ渡せばお前達に害は加えないから、な？ こつちに渡せば」

不吉に笑いながら言うディモルは何か悍ましい雰囲気醸し出してた。しかし、これは本音である。船上では暴れよう等と言ったものの、正直それやってみようとリスクしかないのだ。ここを去る時点でフリッシュ島の監視は解かれる。つまりを言うと、海軍に連絡し放題である。ディモルとフォセカも別に海軍に追われる自体は慣れているし、返り討ちにすることも難しくは無い。だが、フロックス・レボルトの存在を海軍に感づかれて仕舞うのが怖いのだ。確かに非常に大きな組織であるのだが、表立った活動自体は何もしていない為、海軍もフロックス・レボルトのしっぽを見つけたは良いが、本体の確認に手を拱いている状態なのである。それを自分達が原因で、海軍にフロックス・レボルトの存在を確かな物にして仕舞うのは避けたい自体である。つまりは、手出ししないのではなく、出来ないのだ。今2人が捕まると、フロックス・レボルトの存在を裏付ける証拠がダッブリなのだ。

トロス「親父の仇にわざわざプレゼントする馬鹿がどこにいるんだよ!？」 絶対にお前等には渡さないからな!」

ディモル「だあ、吠えんなよ鬱陶しい……。つたく、ま、お前の言う通りだわな、わざわざおれ等何かにプレゼントしてくれる訳が無い。だ・か・ら、こつちだって素敵な条件を出したじゃないかよ。『何もしない』ってな……」

又もや不吉な笑みで語りかけるディモル。トロスはこの笑みが苦手らしい。この笑みを見る度に体中の肌がゾワリと震えるのを感じていた。

トロス「確かに素敵な条件だけどな、信憑性の無い言葉は信じらんねえな……」

冷静を装って毅然としてはいるが、内面はと言うと蛇に睨まれた蛙状態である。しかし、これは致し方ない事だろう。逆に言うなら、今まで平和に暮らしていた子供がいきなり海賊の前で形だけとは言え、堂々としていられる事こそが異常な事態であるだろう。

ディモル「まったく、面倒だな。用心深い奴つてのは……ま、いつか。2人なら殺しちゃっても……な？」

トロス「……!？」

ディモルの言葉にトロスとペディは体の震えを禁じ得なかった。まるで、万の蜘蛛が一斉に体中をはいずり回ったかのような悍ましい寒気が2人を襲った後は何も出来なかった。情けなくも、2人共腰を抜かし、地べたに尻をくっつけてしまったのだ。立とうとしても膝のは笑いは止まらない。

ディモル「ジュフフフフフ！　　ったく、ちょこつとびびらしたらこの様だぜ？　情けないね」

フォセカ「無理を言うな、並の海賊もお前の言葉にこの様になる奴は珍しくないだろう……」

ディモル「ジュフフフフフ！　まあな、そろそろイジメも止めにして楽にしてやるか。殺しても適当に隠してやりや失踪で済むだろ」

改めて2人の顔を見たディモルは一呼吸おいて懷から拳銃を取り出した。ディモルが引き金に指を当て、2人へ向けた時にトロスは

つい目を閉じて最後を覚悟した

「ぐぎゃあああああ！……！」

ディモル「な、何だあいつ！ うお！？」

フォセカ「な、ディモル！」

目をつぶっていたため何が起きたか最初は分からなかったが、すぐに分かった。聞こえていた音・声が何からはっせられているかを理解したのだ。その瞬間から体を蝕んだ恐怖は和らぎ、代わりにほんの少しの安堵が訪れると、自然に固く閉じられた瞼を見開いていた。

トロス「ゲニウス！」

目に映った光景を軽く説明すると、ゲニウスに襲われ慌てふためいているデイモルと、そのデイモルの手から放り出され、ちょうど宙を舞っている拳銃に、啞然としたフォセカに、今だ固まっているペディ。

恐らくゲニウスに2人を助けられているという考えは無いだろう。デイモルが再び拳銃を出した為、完全に『モンキーポッドへ害を為す者』として認識したから排除する。そのみであろう。

ただ、ゲニウスが与えてくれたこの最大のチャンスを逃すことは出来ない。

先程宙を舞った拳銃のもとヘトロスが走った。

トロス「っしやあ！」

トロスが拳銃を手にした瞬間、フォセカはトロ스에気付いた様だ。腰に挿した刀を抜き、トロス目掛け走って来た。

フォセカのやらんとしている事を察したペディは、フォセカ目掛け体ごとぶつけに行った。トロスはそれを尻目にまだゲニウスに襲われているデイモルに照準を合わせようと拳銃を震えた腕で構える。

デイモル「何だこの鳥は!？」

ゲニウスの爪に引つ搔かれ体中の服は破れ生傷だらけになっている。普段のデイモルならここまで一方的にやられる事はないのだから、なにせ唐突過ぎた。半ばパニックに陥りかけているため、拳銃を構えたトロ스에気付くのが一瞬遅れた。

デイモル「(……!？　しまっ！　あいつ、何構えてやがる!)」

ゲニウスに襲われている事は目もくれず、トロスに向かって走って来るディモルにビビりながらも、引き金にかけた指に力を込めるが、ついディモルの恐怖に一瞬だけ飲み込まれてしまった間に、あまりにも大きな問題を頭から放り出してしまっていた。

フォセカ「うおおおおおおお！！！！！」

トロス「な！？」

そう、ペディに突っ込まれ、一瞬だけ体制を崩したフォセカだったが、すぐに腕で払い、トロスに突っ込んで来ていた。

トロス「（しまった！　まずい！　早く撃たなきゃ！）」

フォセカ「うおおおおおおお！！！！！」



ズ  
バ  
ッ  
！

パ  
ー  
ン

## 22話 斬（後書き）

うん……もっと文章に説得力や分かりやすさが欲しい（^| ^ ;  
）

## 23話 再会（前書き）

ほんの少しだけ文章の書き方を変えました。

多分、前よりは見やすいんじゃないかなあ……？

## 23話 再会

十王宮十

トロス「……………白いなあ……………」

ペディ「おお！ お目覚めになられましたか！ 良かった……………」

トロス「……………ペディ？ ここは、ベッド……………？ ………………医務室か？」

トロスは今ベッドに横になっており、真っ白い天井を見上げる形になっている。

トロス「ペディ……………どうなったんだ？ あの後は……………？」

トロスがペディの方向に首だけを傾けて尋ねる。

ペディは向いていた林檎の手を止め、ほんの少し固まった後、再び林檎を回しだした。

ペディ「その後、トロス様の放った拳銃の弾は見事ディモルの腹部に命中しました。弾によって怯んだディモルは襲われていたゲニウスによって致命傷とも言える傷を負い、この島を去りました。ゲニウスは彼等の船を追って行ったみたいです……」

トロスが無我夢中で放った弾はディモルの右腹部をえぐり、一瞬の隙を生んだ。その隙にゲニウスがディモルの体を爪で串刺しにした。急所は外れていたが、そんなことは関係無いと、溢れる血が警告していた。すぐに治療をしないと出血多量で死に陥って仕舞うのは、素人目にも明らかだったから。

トロス「そうか……それで、おれがフォセカに斬られたんだな……」

ペディ「申し訳ございません……私が不甲斐無いばかりに……」

トロス「気にすんな、命があるだけ儲けもんだ」

拳を握りしめ、頭を下げるペディにトロスは手をヒラヒラと振って言葉を返す。少しでもペディに掛かる心の負担を軽減するために、語調は低くも明るくもせず、面倒臭そうな・適当な感じで答えてやり、違う話題を振った。

トロス「んで、おれはどんくらい寝てたんだ？」

ペディ「3日間です」

トロス「3日!?　もしかして、危なかった?　おれ……?」

目を丸くして尋ねる。まさか、日を跨いでるとは思っていなかった様だ。

ペディ「はい。一時は覚悟までしました……」

トロス「……そっか………あの後、あいつらは何もしないで帰ったのか?」

少し自分達が生きてる事に疑問を覚えたトロスがペディに聞く。

ペディ「はい。ディモルの命を優先したでしょう。私達など目もくれずに帰って行きました」

トロス「おれ達を殺す暇が無いほどだったのか?」

ペディ「はい。複数ヶ所から流れ出ていました。あの勢いなら船に戻っても助かるかどうかは分かりません」

トロス「なら……もう、安心していいのか?」

ペディ「恐らくは大丈夫です。この島ではすでに大々的に指名手配しておりますので、医者に訪ねても治療は受けられないでしょう」

トロス は自分の発した言葉に少し驚いていたが、すぐに納得する。

トロス（なんだよ……復讐の失敗なんかより、自分が助かった事の嬉しさの方が圧倒的に強いんじゃないか……）

自分の本音に気付いて自嘲気味に笑うトロスにペディは疑問符を浮かべたが、触れない方が良くと判断し、そっとしておくことにした。

トロス（だが、必ず復讐は果たすぞ……今のおれじゃ何も出来ない。準備が必要だ……）

十 船十

デイモル「……つたく、酔ったぜ……」

フォセカ「3日前の怪我から随分と船酔いになりやすくなったな……」

[illegible]

「フオセカ「うおっ！？」  
かけるな！？」

。 滝の様に流れ出るデイモルのゲ。

ディモル「はあ……はあ……」  
フォセカ「くせえ……」

「……」

フォセカ「ん、動物の爪や牙なんかには細菌が大量に住み着いて  
いるらしいが……あたったか……？」

「デイル、まったく、洒落なんねえぜ……何だ、病気か？ おれは……」

軽くうんざりとした表情を浮かべながら言うディモルだが、フォセ力は割と真面目な顔になっている。

フオセカ「まだ決まった訳じゃ無いが、用心した方が良い。内面の崩壊は知らず知らずに進むものだ……」

デイル「まったく、とりあえずは……毎日牛乳か……？」



おおおおええええええええええ！！！！！！

$$\begin{array}{c} \sim \\ \sim \\ \sim \end{array}$$

十王宮

「デイル、まったく、大変だったんだぜ？　あの後ゲニウスから感染したばい菌にやられて4年も活動出来なかったんだ」

フォセカ「その間のディモルはゲ 臭くて仕方なかった……」

トロス「ふん、人の父親殺しとしてそんなもんで大変なんて言われ  
ても同情は出来ないな」

表情に怒りは見えないが、腹の中は煮え躁り返っているトロス。20年ぶりの仇に再開したのだから内心は穏やかなはずがない。

自分の息子も復讐の道具として扱って仕舞うほどの、深い恨みなのだ。それでも、ただ力任せの方法を取らなかったのは、直に対峙して知ったデイモルの圧倒的な恐怖と、僅かの理性によるものだろう。

デイモル「ジュフフフフフ！　　まったく、連れないな、トロス君。これでもまだ船酔いしやすいのは治っちゃいないんだぜ？」

一種の癖なのだろう。相変わらず「にた」っと言う嫌な笑顔を浮かべながら声をかける。

フォセカ「一時期に比べると随分とマシにはなったがな……」

デイモル「ジュフフフフフ！　あの頃は吐きすぎで死ぬかと思っただぜ！」

冗談にしては軽く重い話をするデイモルに対し、フォセカが少しだけ顔を引き締め、トロスに言った。

フォセカ「そういえば、デルから聞いたぞ？　お前の息子『プルチ』が今モンキーポッドを登っていると……」

デイモル「ジュフフフフフ！　これじゃあ、場所を聞かなくとも教えてくれるようなもんだな！　例の実はモンキーポッドの

上にあるんだよなあ？」

トロスは諦めた様な顔を浮かべ、横に並んだペディは黙ってデイモルのにやけ顔を見ていた。

「モンキーポッド」

ぐぎややややややや！！！！！

ブルチ「……戻って来てやったで、なあ、ゲニウス？ 次は負けんぞ、覚悟しろや？ ちゃんと策はあるからなあ……」

ぐぎややややややや！！！！！

## 23話 再会（後書き）

濡れ髪のカリブー

個人的には凄く気に入ってます。何なら仲間になってほしいと思う程に。ただ、この話をするに十中八九「えゝ!？」やだ」何て言われるので、多分少数派ですね（^ー^；）

24話 邂逅（前書き）

$$\left( \begin{array}{c} \wedge \\ | \\ \wedge \\ \vdots \\ i \end{array} \right)$$

ごめんなさい ( ; )

## 24話 邂逅

プルチ「らああ！」

ゲニウス「グギャヤヤヤヤヤヤヤ！！！！」

プルチ「ちい！ 流石に雪ぶっかけるだけならダメージは小さいか！！」

プルチがモンキーポッド登りを再開し、約半分を少し越した所で、頭上からゲニウスの鳴き声が聞こえた。何だと思い、上を見上げると、ゲニウスが襲って来ていたので、応戦中である。

プルチ「喰らえ！」

プルチが腕から真つ白な雪をゲニウスに向けて放った。雪は綺麗にゲニウスに直撃し、雪だるまの様に丸めて固めてしまった。

ゲニウス「グギャヤヤヤヤヤヤヤ！！！！」

頭と足のみを残し、雪に埋もれてしまっている為、真っ逆さまに墜ちていくゲニウスだが、落下の途中に雪を割って再びプルチに向かって来るのを先程繰り返し返しているのだ。

プルチ「ちい！ やっぱし、やらかいか！ 面倒や」

言い終わると、何とプルチは自分の服をズタズタに引き裂いた。

プルチ「はあ、疲れた。丈夫なんも今ばっかしは有り難みも無いわ……うし、準備完了や！」

服を破き終わったプルチは、切れ端からピロピロと垂れ下がっている透明のチャープを引っ抜き、肩にかけた。

ふと下を覗くと、ゲニウスが凄い速度でコチラに向かって来ていたが、まだ少し余裕は持てる程度の距離はあった。

確認し終わったプルチは、肩にかけていたチューブの端っこを口に持って行き、噛みちぎって中に入っていた水を自分の体にかけた。

プルチ「ああ、青臭……」

冷水草の混じった水の為、多少青臭い味がする。体に水をかけて、

動き難くなった体に嫌気がさしながらも、再び下を確認してみると、今すぐに対処しなければならぬ程にゲニウスは接近していた。

ゲニウス「グギャヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ！！！！！」

プルチ「ちい！　らああ！」

自分の方向に向かって飛んで来るゲニウスに対してプルチは再び雪を放った。しかし、もうそれは見飽きたと言わんばかりの馴れた動きで軽くかわされた。

プルチ「だらあ糞っ！　かわされたか！」

雪をかわしたゲニウスは、即座にプルチの真正面にやって来て、その大きな爪で、雪の足場を破壊してしまった。

大きくバランスを崩したプルチだが、流石に2回目だ。すぐに、新しい足場をモンキーポッドに作り、即座にゲニウスへ反撃する。

プルチ「ホワイト・ブロー！」

自分の右腕を雪で巨大化させた後、ゲニウスを握り潰しにかかった。

えっ？　誰かさんと技の名前が被ってる？　　ノーコメン



トで……

自身の爪で雪の足場を壊したばかりのゲニウスに、今のプルチの攻撃をかわすだけの余裕は無かった。

ゲニウス「グギャヤヤヤヤヤヤヤヤ！！！！」

雪で巨大化されたプルチの右腕は簡単にゲニウスの体を覆い隠し、  
またも体を丸めてしまった。

真つ逆さまに落ちていく最中、ゲニウスは再び雪を割つての脱出を試みたが、今度はびくともしなかった。『何故だ！？』何て思いつながらもがきつつけるが、無情にも下に見える湖は拡大し続けていく。

落ちていくゲニウスをモンキーポッドから眺めていたプルチが、  
まるでゲニウスに語りかけるかの様に、独り言を囁いていた。

プルチ「どうやら、普段のおれの体は『さら雪』で出来とるらしくてな、そのまま攻撃しても対したダメージは与えられんみたいなんや……」

『さら雪』 多分方言なので、聞き覚えは無いと思いますので、  
説明をば

『さら雪』 簡潔に言ってしまえば、パウダースノーって奴です。

含む水分量が少なく、非常にサラサラとしており、ユキダマを作ろうと手で固めても、上手く固まらずに、簡単に崩れてしまいます。

ブルチ「だが、おれの体は水をぶっかけた時、そのまま水を吸って、『べた雪』になるらしい……」

『べた雪』　これも諸に方言でしょう。パウダースノーよりも含む水分が多く、べたべたとしている訳では無いですが、少しジメツとしていて、すぐに固まります。さら雪は蹴り上げると、小さな粒が舞い上がりますが、べた雪は蹴り上げると、固まった雪玉の状態で舞い上がります。

下手な説明でごめんなさい（――；）

ブルチ「べた雪状態のおれのインパクトは舐めたらあかんぞ？　さら雪状態とは話にならん」

落下していくゲニウスを見て、もう大丈夫だと判断したのか、今度はモンキーポッドのてっぺんを見上げた。木漏れ日が丁度ブルチの目を刺激したために、軽く驚いてしまったが、今までよりもずっと近くに光が見える事が、終わりの近さを表している様で内心ホツとしていた。

アト「プルチが『王宮に行ってくれ』って言ってたのはこの事なのかしら……」

ティア「かもね、ウインフリーが心配だからとも言ってたし……」

現在ティアとアトは城門で息を潜めていた。何故なら、2人の目の前では、海賊と思わしき者達が、フリッシュ島の王と思われる者とその執事で何やら話をしていたのだ。

アト「全く隠す気は無い見たいね。城門を全開のままだなんて……」

ティア「よっぽど自信があるのかなあ……」

デイモルとフォセカから言わすと、正直自信どこのこつのではない、ここに来るまでに散々暴れ散らしているだけに、隠すと言う発想自体がどこかへ飛んでしまっているのだ。それに、自分達の相手になる様な猛者がこのグランド・ラインの最初の島の1つであるフリッシュ島にいるはずが無いという考えもあるが。

アト「でも、強いわね……」

ティア「そうだね、下手したらもう気付かれてるかも……」

デイモル「ジュフフフフフ！　　ったく、もうじゃねえよ。端から気付いてるっての！」

ティア「えっ!？」

アト「嘘っ!？ 聞こえてたの!？」

突然大声を出しはじめたディモルにトロスとペディは驚き、混乱している。フォセカは気付いていた様で、やれやれと言う顔を隠さずに、あからさまに作った。

ティアとアトも初めこそ驚いたが、すぐに影と輝赤を構え、臨戦体制をとった。

ディモル「ほお。サイズか、面白いモン使ってんなあ」

フォセカ「……雑魚ではないな……」

下見をする様に2人を観察するディモルとフォセカに2人は何か気味悪い物を感じ、少し怯んでしまう。

ディモル「ジュフフフフフ! 可愛いねえ! 怯むな怯むな」

2人は見透かされている事にそこまで驚かなかった。ディモルとフォセカには今まで稽古を付けてもらっていた者達に近い凄みを感じるのだ。

ティアとアトは何も言わず、一瞬だけ目を合わせると、再び2人に視線を戻す。

相変わらずデイモルはニヤニヤして何を考えているかもイマイチ掴めない。フォセカは顔一つ変えずに2人を見ている。

デイモル「ジュフフフフフ！ まあ、良いや。おれ達の話が聞かれた可能性がある時点で、お前等はやらにやいけねえなあ」

やはり逃げられないかと頭で溜息をついた2人の姿をどこまでもニヤついた目で見てくるデイモルが、背中に背負っていた長銃を構え、フォセカは腰に据えた刀を左手に持ち、2人に言った。

デイモル「ジュフフフフフ！ さあ………生き残れるかなあ？」

## 24話 邂逅（後書き）

個人的にディモルは凄く気に入ってます  
（・・）

25話 開始（前書き）

テスト……今日で2日目の後3日……何やってるんだろ僕は（-  
- ;）”

## 25話 開始

デル「デイモルさん、おれも加勢しましょうか？」

デイモル「いや、お前はモンキーポッドに迎え。やることは分かる  
だろー？」

デル「……なるほど、分かりました。それでは、言ってきますや」

今まで黙って話を聞いていたデルが痺れを切らし、自分のすべき  
事を聞いた。

いや、すべき事自体は分かっていたが、一応デイモルの耳を通し  
てから実行に移そうとしての事である。

デル「それじゃ、行ってきます」

デイモル「おう。期待してるぜ？」

デイモルの言葉を聞き終わると、デルはすぐに王宮から出て行き、  
モンキーポッドの方向へ走って行った。

デルが行った事を尻目に確認すると、デイモルは右手に持ってい  
た長銃をティアに向けた。



ティアは、銃口と睨めっこして動かないでいるが、けして余裕をかましている訳ではなく、隙が見当たらないのである。

動いた瞬間に体を貫かれる様な予感が、ティアの体をガチガチに固め、更に、額から汗を噴き出させている。

デイモ「ジュフフフフフ！　　ったく、お利口だなあ」。下手に動いたら眉間に撃ち込んでやろうと思ったのによあ」

ティア「何で貴方程の実力者がこんなグランドラインの始まりの島何かに？」

デイモル「ジュフフフフフ！　　ったく、それはお互い様だぜ？　お前は何もんだ？　纏ってるオーラ、雰囲気がそこの雑魚とは明らかに違うぜ？」

ある程度の実力者同士ならば、対峙しただけで、力量は分かると言うが、まさにそれ、デイモルとティアはお互いを吟味しあっていた。

デイモル「ジュフフフフフ！　　強い、本当に強い……が、残念ながら、おれにや遠く及ばねえなあ」

勝ち誇った様に笑った後、ティアも悟っていた事実を述べた。

ティア（マズイ、まさかこんなのと、いきなりやることになるとは思わなかった……）

ティアの頭の中では逃げる事も考えたが、セドンやプルチ、ウィンフリーとの約束を思い出し、すぐに無しと判断した。

それに、例え『剃』を駆使し、この場から離れたとしても、何故か逃げられる気がしなかった。

いろいろと策を考えたが、結局は全てが行き止まりで、芳しい物は浮かび上がらずに、悶々としてしていると、デイモルから声がかかった。

デイモル「ジュフフフフフ！　　ったく、駄目駄目よ。今お前が策を模索したって生き残る事は不可能。それなら、醜く抵抗して美しく散ろうぜえ〜？」

ティア「嫌ですね。まだ、やり残した事も沢山ありますし」

デイモル「ジュフフフフフ！　　ったく、そうかい。んじゃ、がんびりなあ〜。ほれ、行くぞお〜！」

ティア「　　！？」

デイモルが引き金を引き、ティアに向けて弾丸を飛ばしてきた。

見聞色の覇気により、弾が飛んで来る事を予測したティアは、発

砲される前に反応し、銃口の軌道上から避けた。

デイモル「　！？　逃がすかつ！」

ティア「　えっ？」

発砲された弾はティアの頬を霞め、王宮の壁にめり込んだ。

ティア（とんでもない……！？）

デイモル「ジュフフフフフフ！　　まったく、見聞色の覇気か！  
まさかお前見たいな餓鬼が使うとはなあゝ！　　おれが打つ前に反応  
しやがった！」

ティア（この人、僕が反応したのを見て、軌道を修正した！　僕は  
かわせていない。あつちが外したんだ……）

デイモルが引き金を引く直前にティアが反応し、それを確認した  
デイモルがティアの頬を霞める様に軌道を修正させた。

デイモルの、化け物の様な反応速度と、機械の様な性格性に、テ  
ィアは遊ばれ、絶望した。

ティア（見聞色の覇気は当てにしちゃいけない……。見えた未来  
は、余りに実力の開いた者同士だと、簡単に捩曲げられちゃうみた

いだ……)

デイル「ジュフフフフフ！ さあ、どうする。この実力差を……」

「モンキーポッド」

プルチ「まさか、これが父さんの持って来いって言うたもんか？」

ゲニウスの迎撃を終えたプルチは、登る事だけに集中出来たせい  
か、先程よりもずっと速いペースで登る事が出来た。

お蔭で、早々とモンキーポッドのてっぺんに到着した。

丁度モンキーポッドを真上から見た時の中央部分に、枝が収束した場所があり、半径1m程度の広さで円形に広がった場所が出来ていた。

プルチがここに到着した時、自然に出来るには、不自然過ぎる場所  
にかなり驚き、固まってしまっていたが、その中央部分にあった  
物が目に入った瞬間、すぐに硬直を解き、それを手に取った。

形は林檎の様であるが、渦のような模様がビッシリと描かれていて、  
上からひよっこりと伸びたヘタは、クルクルと捻れている。

色は鮮やかな水色で、良く晴れたフリッシュ島の青空にどこか似ている。

プルチ「まさか、悪魔の実か!？」

十モンキーポッド下十

デル「よし、後は待ち伏せして奪いあげるだけだ」

バンダ「それにしても、驚きだな、まさか本当にゲニウスを倒すなんてな……」

ブバル「ふむ、湖に沈んでいるな……」

プルチに雪で丸められ、真っ逆さまに落下したゲニウスは湖に沈んでいた。

体中の雪はそのままに。

バンダ「ふむ、それにしても、随分と厄介な力を手に入れてくれた物だ……」

デル「まあ、この手錠があれば十分糸口はあるから、問題は無いだろ」

指で海楼石の手錠をクルクルとさせながら言う。

当然手袋ははめている。

ブバル「だが、油断は出来ぬな……」

少しだけ場を引き締める様に、バンダが言うと、デルが軽く呆れた様に言った。

デル「にしても、お前等は案外役立たず……。相手に傷一つ付けれずにおねんねかよ……」

バンダ「……言葉も無い……」

ブバル「……すまぬ……」

凶星を突かれた2人は、何も反論出来ず、素直に謝るしか出来なかった。

ウィンフリー「どうなってるんだ……」

自分の着替えを済ましたウィンフリーは、プルチの分の着替えを片手に、そそくさと出ていくつもりだったが、目の前では戦闘を広げるティア、ディモル、アト、フォセカがいた。

ウィンフリー「どうする……。あんな修羅場なんか潜り抜けられねえよ……」

ウィンフリーがオドオドしている為に、背後から近づいてきていた足音に気付くことは出来なかった

## 25話 開始（後書き）

まあ、良い気分転換になりましたや（^| ^ ;）



## 26話 想定範囲外（前書き）

3月の初めに携帯電話を替えました（・・・・・）

パケット料金の関係で、小説の続きを書く事が出来ませんでした。が、これからは投稿出来ますんで、今後とも宜しくお願いしますm（\_\_）m

えと、先に言っておきますね……

酷い出来です（・・・・・）

## 26話 想定範囲外

ディモル「ジュフフフフ！　　ったく、思ったよりもやるなあ。よし、少し楽しくなって来たぞ！？　　どうする？　　この実力差を？　　どうせ、目的のブツが届くまで少し時間があるんだ。暇潰しに付き合えや」

ティア「良いんですか？　　直ぐに僕を殺さなくて？　　意外と僕が粘って貴方を苦戦させるかもしれませんよ？」

軽く挑発的な口調で、言い放つ。

別に、策略があつたわけでは無く、余りにも自分をクズに見られたから少し反抗したかつただけである。

ディモル「ジュフフフフ！　　良いね。苦戦させてくれよ。お前みたいなルーキーがおれにどれだけヤレるか見てみてえ」

ティア「その、目的のブツって言うのも僕達が奪っちゃいますよ？」

ティアの言葉に一瞬だけピクツと反応したディモルだが、アゴに左手を当て少しだけ考えている様子を見せた。

ディモル「あゝ……良いぜ？」

ティア「え！？」

余りに予想外な答えが帰って来て、素っ頓狂な声を出して仕舞ったが、直ぐに冷静を取り戻してディモルの答を待つ。

隣で、アトと交戦していたフォセカもディモルの言葉の真意を図り兼ねている様で、チラチラとディモルの方向へ視線を飛ばしている。

しかし、どこか納得した様な所もあったのだろう。

一度大きな溜息をつき、どこか「やれやれ」と言いたそうに、肩を落胆させていた。

ディモル「いやな、出世し過ぎちまったんだ。おれ等……」

ティア「……出世？」

これだけじゃ、ディモルの言いたい事が分からないのだろう。

眉間に深いシワを作り、ディモルに視線を与え続ける。

ディモル「おれたちや戦う事が好きでねえ。元々フロックス・レボルートに入ったのだって、ハイレベルな戦闘を味わえると思っ

たからだ」

ティア「フロックス・レボルト？」

知らないワードに困惑するティアだが、そんなこと知らんとも言うかの様に無視して、説明を続ける。

デイモル「当然、おれとフォセカはかなりの戦績を上げて、直ぐにおれ達は出世して行つた。様々な指令の元での暗殺、潜入も新鮮で楽しんだもんだつた。が……。大幹部になってからは別だ。おれ達は、グラント・ライン始まりの海を拠点に、ただの下っ端管理仕事メインになつちまいやがつた。正直、死ぬ程つまらねえ……」

デイモルは説明をしている間、どこか表情が淋しそうになっているのが見て取れたが、ティアはあえてツツコミはせず、黙って聞いている。

フォセカ（ふつ、静かに過ごしたいだの抜かす癖にな……）

デイモル「そこでだ、お前に目的のブツを奪われ、更におれ達は組織を裏切る。……これで、おれ達にフロックス・レボルトからの刺客がタツプリとやって来ると思わねえか？」

ティア「な！？ そんな事したら、僕達がそのフロックス・レボルトって言うのに狙われるじゃ無いですか！？」

当然の反応。

しかし、ティアもこの後言われる事の想像はついてる。

体を強張らせた。

デイモル「ジュフフフフ！ その様子は、気付いたな？  
まったく、感の良い奴は好きだぜえ〜？ おう、受け取らなきゃ殺す」

にた〜つとした笑顔を作り、ティアに銃を向けて来た。

ティアも迷ったが、元々選択肢が無いに等しい。

命あつての人生、諦めたように「受け取るよ」と答えた。

デイモル「ジュフフフフ！ 　　まったく、賢い選択だ！ 感謝  
するぜえ〜？」

ティア「賢い選択も何も、殺されるんじゃ受け取るしか無いじゃ無いですか……」

呆れたように、ジト目で言い返す。

ディモル「ジュフフフフ！　まあ！　　ったく、だが、おれから少しサービスをしてやる。これでフェアって事にしやがれ」

ティア「……何ですか？」

期待の心は一切込めずに、ボソツと呟いた

ディモル「3度だけ、お前の言う事を聞いてやる」

左手の指を3本立て、ティアに見せつける。

ティア「3度……言う事を……？」

ディモル「ジュフフフフ！　　ったく、そうだ！　　意外と俺は義理堅いんだぜえ？」　　たまに……」

ティア（……突拍子もない事を言い出す人だなあ）

ティアが困惑しているのを見て、ディモルが笑いながら、ティアに言った。

ディモル「ジュフフフフ！　　ったく、今すぐじゃ無くて良いぜ？　　おれ達に電伝虫で伝えりゃ良い」

ティア「それ、本気で行ってます？」

デイモル「大真面だ！ さっきまで、敵だったから信じられねえか？」

ティア「それはまあ……はい」

デイモル「つたく、元をただしやおれ達は別に戦う理由なんざねえんだぜ？」

デイモルの言ったこの一言に、ティアも思い出した。

別に、2人が戦う必要はなかった事を。

観念した様に、デイモルに漏らした。

ティア「……そうですね。意外に話すと面白そうな人ですし、信じます」

デイモル「ジュフフフフ！ お利口ちゃんだ」

相変わらずのにやけ面に、ティアも軽くウンザリした様に溜息を付いた。





## 26話 想定範囲外（後書き）

やはり、こういうサイトに登録した時のメモは大事にするべきですね……

昨日まで、メモが見つからず、ログインできないと言う歯痒い思いをしましたか……

何とかなるもんですね（ ; ）



## 27話 帰還

ティア

先程、僕との戦いでディモルさんがイキナリ、「3回まで言う事を聞いてやる」何て事を言い出した。

正直な事を言ってしまうと、ディモルさんの強さは異常だ。

稽古をつけてもらっていた、世界最高峰の力を持つ面々を思い出す程に……

闘ったと言っても、ほんの2〜3分程度会話をして、銃弾が1発飛んだただけだけだね。

でも、たったの2〜3分だけでハッキリと自覚しちゃったんだからしょうがない。

そんな人に、今回は引くと、更には3回までは言う事を聞くという破格の条件で見逃して貰える事になった。

ただ、良い事ばかりでは無く、ディモルさんとフォセカさんの従来の目的の品である物を僕達に持って行けと良いでした。

勿論、そうなると僕とアトは、ディモルさんの所属していた組

織に狙われてしまつてあろう事は簡単に想像がついた。

けれども、こんな所で殺されて終わつてしまふのなら、お先が暗くなつてもそちらに掛けるべきと思つたから、ディモルさんの要求をのんだ。

今でも、ディモルさんは満足そうににやけている。

癖なんだろうね、このにやけるの。

最初は恐怖してたものだけど、スツカリ何も感じなくなつた。

慣れつて凄いね。

「ジュフフフフフ！！ んじゃ、今日はもう引くわ！ 頑張つて、デルから物を奪つてくれ！ ジュフフフフフ！！」

「デルつて、さっきまで一緒に居た人ですか？」

「ああゝ。そうだ、1つ忠告しておこう。デルには気を付けた方がいい」

「強いんですか？」

「ああゝ。おれとフォセカは、組織に……フロックス・レボルトに入りたての頃は、かなり強かつたからな、期待のエースとして、すげゝ勢いで出世して行つた。デルが、それだ。間違いなく、経験を積みめばおれ達クラスの実力になる！」

相変わらずのにやけフェイスで、ティアに言った。

それを聞いたティアは、不安にかられ、ディモルに聞いた。

「……………僕達と比べると、どうですか？」

「ジュフフフフ！　　ったく、そうだなあ……………お前の方が強い！　　だがあ、大差は無い。しかも、あいつはお前を殺す気でやるぜ？　　感じた所、お前は海軍と少し絡んでるな？　　それで持って、殺しをした事は無い……………だな？」

「確かにそうですね。殺し何かは生涯したく無いですし」

「ジュフフフフ！　　殺す気のある奴と、殺す気の無い奴との差は、想像以上に大きいぜえ？　　こんな当然の話、言われなくても分かってるだろうがなあ……………」

「いえ、復習は大事ですから」

軽く微笑んで、返事をした

すると、ディモルさんは半ば呆れた様に笑いながら「ったく、お利口さんめ」何て言っていた。

隣では、自分達を置いてけぼりに進む話に耳を傾けながら、ジト目を送っていた2人に気付いて、頭の中で申し訳ない様な気持ちになったので、軽く苦笑いを送っておいた……………ごめん、アト

その後は、フォセカさんがディモルさんに軽く小言を言っていたけど、ディモルさんに上手く丸め込まれて、何も言えなくなっていたり、何時の間にか居なくなっていたトロス国王に呆れていたりと、短い間だがやんわりとした時間が流れていた。

最後には、「じゃあな!」と、片手をあげて船へ戻っていった。

「何なのかしら…… あの、ディモルって人は……」

「なんて言うか、激しい人達だね……」

2人して、ディモルさん達の事を笑い合っているけど、本音を漏らして仕舞うと、ホントにホツとしてる。

だって、あの2人が居なくなっただけで気が抜けたのか、膝が凄く笑ってるんだもん……訂正します。

爆笑です……。

「……忘れちゃってたけど、ウィンフリーって何処に居るのかしら?」

2人のイレギュラーによって、完全に忘れていたが、ティアとアトの本来の目的は、ウィンフリーの安全確認。

「……………そうだね、取り敢えずこの中を隈なく探して見ようか」

「そうね」

プルチ

まさか、父さんの欲しがってたもんが悪魔の実だなんて、思いもよらんかった。

ユキユキの実を自分で喰わずに、おれに喰わしたのはこう言う事やったんか……………。

……………にしても、どうしよな。

今、モンキー・ポッドの中間辺りまで降りるとるんやけども、見え取るんよねえ、人影が3つ……………。

あつきらかに、恋人兄弟とウィンフリーの3人では無い事は確かや……………

となると、父さんからのありがた〜いお迎えって事になるんやろね……………

うゝん、本当にありがたい

にしても、どうしよ……………あいつ等に1回だけ抑え込まれとるけど、海楼石を持つとる見たいやしな〜。

助けが来るまで待つかなあ……戦略的待機？

実際、あいつ等に抑えこまれた時は全く気付けなかったしなあ。  
。

父さんの事で冷静じゃなかった事もあるんやろうけども、多分  
おれよりも強いし、3体1だし……うん、待つとる！

……向こうがおれに気付いてるのに、向かって来ないのが薄気  
味悪いけどな……。

デル

おれ達を警戒してんだろうなあ……

一気にプルチの降りる速度が下がっちゃった。

別に、下で待ってるのは、怠いだけで理由は無いんだけどなあ  
……

まあ、正直な所、地の利で言うなら下の方が良いけども、ぶっ  
ちやけどうちでも勝てるだろうから関係ない

ただ、さつきからバルが「早く降りるのだ！」って、連呼  
してるのが鬱陶しいから、早くして欲しいけどな……

何だろうな、何でキャラクターって最初に予定してた風になっ



てくれないんだろうな……ブバルはもう少し賢い奴だった筈なんだけ  
どな……気付けば馬鹿だ。

……ドンマイ

アト

「ウィンフリーは見つかった？」

「見つからない……どうしちゃったんだろう、ウィンフリー……」

あれから、20分位かしら……この宮殿の中を隈なく探したの  
だけど、ウィンフリーは見つからなかったわ……

「取り敢えず、プルチの所に戻って見る？」

「そうね。もしかしたら、すれ違ってるかも……」

その後は、すぐに王宮を出てモンキー・ポッドに向かっている  
最中なんだけど、ウィンフリーは何所に居るのかしら……

ウィンフリー

「これは……」

ううううう……！！

い、いてえ……！！

目の前には焼かれた街、刺されて、撃たれて、今すぐに生き絶えてもおかしく無い程の怪我を負った人達が転がる、地獄絵図が広がっていた……



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1864p/>

---

ONE PIECE ~ 紛れ込んだ双子 ~

2011年7月23日19時47分発行